

3973
H46



0057887000

0057887-000

397. 3-H46ウ

雷撃

早川成治・著

武蔵野書房

昭和18

AJG

3973
H46

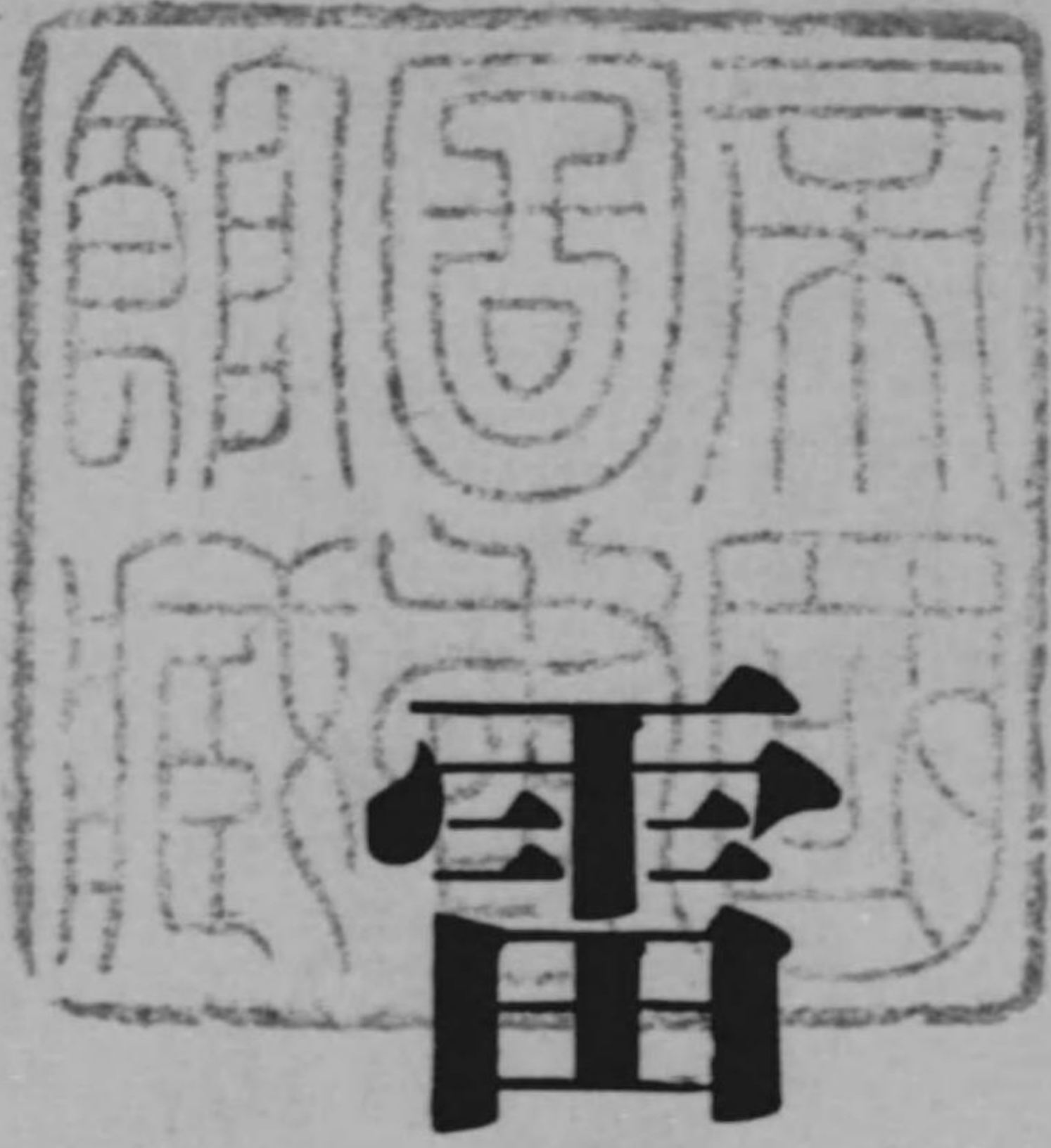
雷 擊

早川成治著

武藏野書房

14

397.3
H46



早川成治著

擊

武藏野書房



969

11

序

本書は「雷撃」と題してあるが、全巻雷撃に関する記述ではない。また海軍士官に対する戦術テキストでもない。

本書は大東亞戦争の現實に即した現代海戦の生態解説を企圖した茶話であり、南京豆的存在である。対象は青年諸君に在る。

海洋隨筆と稱してまとめられてあるものも純正なる隨筆ではあるまい。隨筆を作るにはまだ筆者は若過ぎる。これらは話題が海軍に關して濃厚ならざるものを分離したに過ぎないが、國家の發展、人類の向上に全く關係のないものは採用されてゐないと思ふ。

以上が筆者序文原案であるが、校正中に、編輯部から「序文をもう少し長く、二頁位になる様に、そして茶話とか南京豆的等の文字はなんとかかへて下さい」といふ手紙が届いた。

明治時代に漱石が完成した小説を倍の長さにしてくれと書房に言はれて困つたことがあつた。

然し彼は引伸ばすことを拒否して出版した。文筆專業者でない自分としては漱石以上の苦境に立たされたことは當然であるが、圖書出版は營利事業であるから、これ文思ひ切つた註文を著者に提出するには、ヨクセキの現實問題があることを察しなければならぬ。想像する所に基けば、序文を見て買ひたくなるやうな「お題目」をならべろといふ意味かとも思はれる。「茶話」と「南京豆」が世道人心に害ある辭句なれば、此の五字を削除しても差支へないと思ふ。

少年世界文庫の内幸田露伴の著書に「番茶餘談」といふ書名がある。國防、發明、修養を内容としたものであつた。筆者にとつて「茶」は人生に清新の氣分を與へ、哲理の明徹を助成するものである。信長も秀吉も茶をすゝりながら想を練つた。自分は「茶話」は修養談と紙一枚の位置にあるものと心得て來た。然しながら最近學生が所謂喫茶店に出入することを法によつて禁じられたとか言ふ報道に徴すれば、昭和の茶は轉落したことを筆者の迂愚が誤認したものと見える。南京豆は現在街頭に旗亭に、子を負ふた婦女や幼童幼女に携へられて暗取引が行はれてゐるから餘りよい印象を與へないかも知れないが、現下大金を投ずることなくして青少年の購ひ喰ふことの可能性がある榮養は南京豆である。自分の著書が此種の役目を果すものであるかと思つて「南

京豆的存在」と言つたまでである。

自分は時事に觸れて、之を研究する目的を以て論文を構想することが一種の癖となつて仕舞つた。然しその結論が概ね事後の事實として現はれて來る事が、この頃不思議に思はれるやうになつた。それらの稿屑が積つて本書を成したといつても差支へない。紙屑だと言つたら讀者はいやがるかも知れないが、文字だけならば要するに如何なる名言葉も聲明も紙屑である。紙屑を利用厚生する力は讀者の心の中に潜在するものであることは古來の定則である。近來時局便乗の書籍が氾濫の觀を呈してゐることに對して、筆者はあまりよい感觸を持ってない。従つて「お題目」を唱へることは甚だ好ましくない所である。然し強ひて序文を引伸ばさねばならぬといふ事情が存在するものと假定すれば、時局便乗圖書でないことを表明した上で次の言葉を引用したい。

軍は有道の人も負け、無道の人も勝ち、無理も勝ち、道理も負け、大勢も負け、小勢も勝ち、剛勇の者も負け、柔弱の人も勝つなり。是れ皆あるまじきことなれども、軍に限りて有る事なり。武道の妙を知ると知らざるとの二つなり。こゝに至りて工夫あるべきなり（以上楠正成公

著一卷之書抄録）

物すべて造り給へる大神は血をもて人を造らせ給ふ。

大神のたまひし血汐清かりき汚れし富をたのむ人の子。

おごる者神をかゞみに誠あれ、汝が血汐神の末なり（以上コーラン經試譯）

昭和十八年五月十日

著者敬識

目次

序

- 一 雷撃戦術……………一
- 二 未來の魚雷戦……………四五
- 三 ソロモン海戦以後……………五四
- 四 潜水艦と上陸作戦……………七〇
- 五 護送船團の襲撃法と其の防禦法……………八九
- 六 空母集團奇襲戦……………一〇一

二

七	對敵潛對策	一一五
八	東郷戰法	一二七
九	爆雷	一三八
十	艦砲	一四八
十一	魚形水雷	一五七
十二	米國戰力の檢討	一六四
十三	米國の潜水艦	一七七
十四	艦隊の編制	一九四
十五	海上の決戰	二一〇

十六	大主力艦主義是非	二三〇
十七	基地飛行機と戰艦・空母の將來	二三三

海洋隨筆

十八	鰐狩記	二五三
十九	制海權下の印度洋	二六九
二十	パナマ運河	二八九
二十一	スエズ運河	三〇一
二十二	太平洋横斷	三二五

二十三	スラバヤ動物園……………	三三二
二十四	武装商船乗取事件……………	三三九
二十五	爪哇正月と曆……………	三七五
二十六	サルタン物語……………	三八七
二十七	水物語……………	四〇六

一、雷撃戦術

1 戦術諸相

戦術とは如何なるもので如何にして講究されるかといふことを先づ明かにすることが必要である。戦術は戦術であるに相違ないが英語で言ふタクチック (Tactics) の譯語である。この語源はタクト (Tact) に發してゐる。タクトは氣轉、機才などを意味し音楽方面では拍子のことである。兵語でいふ戦術は兵術 (Art of War) の一分科で主として「戦闘において軍隊を指揮運用して敵と戦ふ技術」と解釋するのが世界共通である。

しかるに戦闘なるもの、範圍には限界がない。數隻の軍艦が一小地域において短時間戦ふのも戦闘であれば、大艦隊が廣大なる海面にわたつて數日間戦ひ抜くのも戦闘である。従つてこれを實行する技即ち戦術にも大小の差異がある。更にまた戦闘に用ひられる兵器によつて砲戦術とな

二
り、魚雷戦術となる。機雷戦術もあれば、爆雷戦術、爆弾戦術もあるわけである。艦種によつて種別すれば艦隊對艦隊戦術、艦隊對驅逐隊戦術、その他潜水艦、航空機等自體の持つ特性と立ち向ふ敵に對應する手段の特殊性によつて戦術は様々に分岐する。戦術は人間の技術中最大なるものである。萬有の因子を包含し人智の進むに従つて幾何の種類に別れるか豫斷し難い。兵力兵器の増大進歩に従つて戦術にも一日の停頓がないのが當然である。然らば如何にして戦術は講究されるかといふと兵器の特性を知つてこれを活用することが第一義である。これを別にすれば温古知新の外に數へ方は無いと言はれてゐる。古今の名將兵家の著書言行を資料として兵術の原則を研究し、これを近代海戦に應用するのだとも言はれるが、古今の名將にして兵を論じたものは、戦史の講釋と抽象論が多い。兵器の特性に立脚した議論が一番よろしいのであるが巷間において兵を論ずる場合の困難は現代兵器の性能を知る點において越ゆるべからざる線のあることである。魚雷戦術を説くに當つても原則の把握と將來の趨勢を考へるに止り禁斷の境界に踏み入らない方針を採らねばならぬ。

2 肉薄戦術

軍艦の砲彈に對する不沈性が増して來た對策として、敵艦の水線下を破壊することによつて手ツ取りばやく撃沈しようとしたのが魚雷發明の動機である。魚雷が出來て見るとこれは水中を自力で馳走するものであるから射出に大なる初速を必要としない。従つてその射出機構は大砲に比べると甚だ輕量ですむことになり輕快艦艇に適するものとなつた。一方には雷速低く射程短小である關係上肉薄戦が要求された。初期に魚雷を主兵としたものは水雷艇であつた。水雷艇は夜陰に乗じて敵に接近肉薄する艦種として生れた。水雷艇の性質に航洋性と攻撃力を増したものとして出來たのが驅逐艦であつた。水雷艇を驅逐する艦種として此の名を得たのであるが、水雷艇に航洋性が少いために驅逐艦が水雷艇の任務も取つて仕舞つた。スピードに依存した洋上の白晝魚雷襲撃、小型を利用しての敗敵掃蕩夜襲戦はいづれも驅逐艦の獨占する舞臺となつた。

現在行はれつゝある飛行機の魚雷襲撃は此傾向の劃期的進展であつて魚雷の自力航走を利用した着想であると同時に小型を高速武器として大敵に肉薄し得る可能性が多いからである。

潜水艦は肉薄する手段において特殊な強みを持つた艦種であるから、魚雷襲撃に最適のものである。速力の関係でその襲撃運動はまだ特殊性を脱し得ないが、大敵に接近し得る力量は無比である。

巡洋艦は多数の發射管を裝備してゐる。これは強大なる敵に接近し得た場合、或は測らず強大なる敵に接近して仕舞つた場合に砲力の劣勢を補ふに首となるものである。

主力艦に發射管を存置するの可否は久しい間の問題であるが大艦隊が多数の魚雷射線を以て敵の長蛇の陣を襲ふことも豫想し得る戦況である。従つて魚雷の進歩は射程の延長、雷速の増大その他の改善を目標としてゐる。

然しながら砲力の存在を考へ、また魚雷の發達道程を検すると魚雷の眞面目は近接戦に在る。

大砲と水雷は海軍攻撃力の雙璧である。大砲が魚雷に比べて長所と見られて來た點は從來次の如きものであつた。即ち、一、裝備が比較的容易で多数を搭載し得ること。二、加害距離が大なること。三、抵抗物に對する穿入力が大なること。四、照準發射が確實迅速で加害力の公算が大なること。五、構造比較的簡單で損傷が少いこと等が挙げられ、魚雷は破壊力において大なるも

のがあり、馳走線が平低であるといふ利點があるが缺點も甚だ多いものとして改良に努力されて來た。魚雷を海戦に使用したのは日清役が世界最初のものであるが當時の魚雷に對して與へられたその後の進歩は、加熱装置を氣室に附着して氣壓を高め、馳走距離および馳走速度を増加すること、縦舵機を簡單強固にして戰鬪の要求に適應せしめること、照準機を改良して照準發射を確實迅速にすると共にこれを長距離發射に適合せしめること等であつた。加熱装置、縦舵機等は後章において説明する。

同じ時代即ち十九世紀末二十世紀初頭においては魚雷命中公算の比較的僅少な理由として次の如き項目が挙げられてゐた。

- 一、構造が薄弱であるから取扱上の不注意によつて機能を失ひ易い。
- 二、馳走速度が艦船の速度と大差ないから發射後敵艦がこれを避け得る餘地がある。
- 三、射程が比較的短いからわれが發射位置に達する以前に敵の防禦砲火に妨害される。
- 四、照準機の構造が比較的簡單で魚雷そのものの精巧さと釣合が取れてゐない。
- 五、敵艦の距離、針路、および速度の測定は困難である。

六、敵艦に對し發射位置を占めるまでに時間を要する。發射位置を占め得たとしても敵の運動によつて直にこれを失ふ場合がある。

七、驅逐艦水雷艇の如き動搖大なる艦上から照準發射するには困難が伴ふ。

右の中、第四項までは機構上の問題で造兵家の領域であるが第五項以下は「術」に基く困難である。魚雷がいくら進歩しても本來の性質からは抜け切らないものである。魚雷を使用する術が多くの困難を克服して進んで來たことは想像するに難くない。敵艦速力および針路を測定することは白晝といへども困難な問題である。暗夜は殊に然るべきである。これらの困難な點を知つて有効に活用することが魚雷戰術の過去における道程であつた如く將來においても魚雷は用ひ方によつて驚嘆すべき効果をもたらすものであらう。魚雷の射程が短少で馳走速力がのろければ艦艇そのものが優速を利用して敵に接近するといふことは當然辿らねばならぬ道である。攻撃に要する時間を短縮することは間接に敵の防禦砲火を減殺することとなる。敵の針路、速力等の誤測から生ずる不命中の原因は肉薄戰によつて解消される。「術」を極點に發揮する果敢な攻撃精神は魚雷戰の精華である。

3 魚雷の進歩

魚雷の缺點は排氣の氣泡を水面に噴出し航路を残す點である。機關を改良して遠距離を高速で航走し、しかも航跡を残さないものが近代魚雷の理想である。

壓搾空氣を以て魚雷馳走の原動力とする代りに酸素と水素を入れ、此二つの氣體を加熱器に導いてオキシ・ハイドロゲンの焰を作つて機關に入る瓦斯は全部蒸氣とすれば海中に排出されるときは皆水となつて航跡を残さない。従つて、敵に轉舵逃避の余裕を與へない。ドイツ海軍は前大戰の終期において六十三種半の此種魚雷を製出した。内火式機關に用ひるエレン・モーターを運轉し、速力四十節、到達距離一萬五千米、炸藥量半應といふものであつた。米國においては六十三種半の魚雷に二次電池による電氣推進を用ひ、絶對無航跡、射程二萬米、炸藥量三分の一應、しかも驚くべき高速力を得たといふ話も相當古くなつた。

昔、一八六〇年（井伊大老櫻田門外の變があつた萬延元年に當る）頃オーストリアの海軍士官が思ひついた軍艦攻撃法は魚雷發明の前ぶれであつた。これはボートの艇首に爆藥を入れ海岸か

らこれを操縦するといふ案であつたが實現しないで考案者が死んだ。その後ルツビスといふ同國の海軍士官がこの案を見て非常に興味を感じ、模型試験に成功したので海軍當局に提出したが採用されずに却下された。そこで彼は此種の研究を獨力で完成することの困難を感じ、一八六四年になつてヒューメ市の鐵工所の支配人ロバート・ホワイトヘッドに助力を頼んだ。ホワイトヘッドはルツビスの案を基礎として水面航走の水雷を造つて試験したが思はしくなかつた。彼はこの時水雷なるものは水中航走自動操舵でなければならぬと氣がついた。一八六六年（慶應二年）に希望通りの新式水雷を案出して特許を得た。これが魚雷の元祖である。この魚雷は直徑十四吋（三十六糎）全長十一呎（三・三五米）のもので壓搾空氣によつて推進し速力は六節乃至七節を得た。一八六八年深度機の考案に成功した。これは魚雷が一定深度を保つて航走するやうな自動的横舵の着想であつた。此時代の魚雷は有効距離七百碼（六四〇米）、平均速力七節位であつた。此發明を知つた英國海軍は直にその秘密を買つて兵器に採用した。佛、伊、獨、露等がついてこれを採用した。

一八九〇年（明治二十三年）にオーストリアの製圖技師オブリーが縦舵機を考案して方向調整上に劃期的な改良を遂げた。一九〇五年（明治三十八年）にはアメリカで加熱装置が發明されて推進上能率を擧げるやうになつた。造兵家は上記の深度機、縦舵機、加熱装置の三大發明を以て魚雷の第一期第二期第三期の革命としてゐる。このやうにして魚雷が水中を走るやうになつて見ると今度は有効距離、速力、爆藥量をそれぞれ増大するために直徑の増加といふことが競争的に行はれた。一八九一年頃から四十五糎（十八吋）、一九一〇年頃から五十三糎（二十一吋）、一九一九年頃から六十一糎（二十四吋）といふ趨勢であつた。現在英米の新式驅逐艦は五十三糎發射管四聯裝二臺として八門を裝備してゐる。潜水艦も各國五十三糎魚雷が多い。フランスは早くから五十五糎魚雷を採用してゐた。

日清戰爭時代の三十六糎（十四吋）魚雷は射程四〇〇米位であつた。一九〇〇年頃には射程八〇〇米、速力二九節炸藥量一〇〇斤の四十五糎（十八吋）魚雷が現はれた。日露戰爭時代の四十五糎魚雷は射程四、〇〇〇米であつた。前大戰時代の五十三糎（二十一吋）魚雷は一五、〇〇〇米有効と稱せられた。一九一九年頃からの六十一糎（二十四吋）魚雷の性能について外國で公表したものを綜合して見ると、有効距離二萬米、平均速力二十五節、また馳走距離一萬米ならば速力

約四十節といふ程度である。戦前の発表であるが英國では百三十節の飛行機魚雷に成功したと發表したことがある。

一〇

4 魚雷の構造

魚雷は水中に射出或は射入される時推進機を起動して自力で進行出来るやうになつてゐる。自動的に横舵を操つて水面下一定の深さを保つ。この深さは發射前任意に定められる。方向は自動的に縦舵によつて調整されながら進む。發射された方向に直進するのが普通であるが、射入後射線と或る角度を持った方向に進ませることも出来る。これが斜進發射に用ひられる。

魚雷の各部に頭の方から名をつけて行くと頭部、氣室、液體室、機關室、浮室、車室の六室になつてゐる。頭部の外皮は厚さ三耗位の鋼板で出來て居り、内部に爆薬を入れる。頭部の尖端には爆發尖が挿入してある。觸挺式爆發尖と稱する種類が最も普通である。これは外部に四本の觸挺(角)が出てゐて、どれを一本押しても爆管に點火する。安全装置は魚雷が水中を馳走する間に水の抵抗で抜け出るやうな小型プロペラがある。これを廻さぬ限り觸挺は作動しない。平常は

安全ピンで此プロペラを止めてゐる。ピンは魚雷の發射管に裝填する時抜き取る。爆破作業はこの頭部が承るものであつてこれ以外のものは推進、操舵、浮泛の装置である。昔は魚雷のエンジンは壓搾空氣のみで作動したものである。現在特殊魚雷は別だが一般的なものは詰め込んだ空氣で油を燃やし、その瓦斯の中に火を吹き込んで蒸氣を作り、蒸氣も瓦斯も一緒になつてエンジンを作動せしめるものである。魚雷馳走の原動力として重要な空氣を溜めるところを氣室といふ。氣室は鋼製で圓筒の兩端を半球形の蓋で塞いだものに過ぎない。しかし、此氣室が魚雷全體の製造費の約半額を喰ふ。その理由は重量を少しでも軽くして高壓に耐えるものとする爲に特別上等な鋼を用ひる。僅かな瑕があつても、相手が高壓力の空氣であるから瑕がもとで爆發する危険がある。念に念を入れて製造するから高價なのである。従つて直徑の大なる割にこの鋼壁は薄いものである。五十三種(二十一吋)の氣室鋼壁の厚さは十耗内外である。氣室の鋼材は普通六角形の鑄型に入れて固め、鑄型から出た鋼塊を鍛鍊法で筒にする、これに焼入れをやつて機械作業で仕上げる。鋼塊に不良な元素例へば燐や硫黄が凝集した部分があれば弱い箇所が出来る。これを機械作業の終りに發見すれば不合格品となる。これも氣室が高價なものになる一理由である。前

大戦中にアメリカでは壓出法押し出しによる氣室製造法を考案した。これは鋼を筒の形に壓し出すので工程が簡單迅速である。

氣室の附屬品として導子と稱するものがある。これは魚雷が發射管を滑り出す間、天地逆轉を防ぐ爲に設けた突起物である。これが發射管の前進移動を妨げることなく左右に傾くことを防止してゐる。

氣室にはまだ附屬品がある。それは裝氣弁と塞氣弁である。裝氣弁は裝氣用の管をねぢ込んでゐる間は空氣を氣室に吸ひ入れるがこれを取り去れば發條と内部から働く氣壓で強く閉鎖するやうに出來てゐる。塞氣弁は魚雷を用ひない時、氣室内の空氣が漏れるのを止め、魚雷の後部を分解する時にも同じ目的に使用される。魚雷裝填の時に塞氣弁を開くことを忘れたら發射しても推進機械は起動しない。

5 魚 雷 構 造

大江匡房卿の「鬪戰經」第四十九章に「術が力に勝つことがあるが、凡そ兵術は草鞋のやうな

ものだ。健脚と草鞋は主客自ら分明である」といふ意味が記されてある。現代兵語にも術力といふ言葉がある。術と力はいづれも鬪戰要素として缺くべからざるものであつて兩者の比較輕重はとかく議論倒れとなり易い。

力と術と別にそれ以上のものが三位一體となつて鬪戰能力を發揮した實例は敵巨艦の轟沈爆沈によつてわれらは現前の實例を知つてゐる。魚雷兵器の場合は、そのスピードと射程（航續力）の本質を知つて置かなければ魚雷戰術の苦心の程は解り兼ねる。

大砲の方は口径の増大や、火藥の改良が著しい進歩を遂げたので射程はズンズン延びた。魚雷が艦上で砲弾と並び用ひられるには同様の進歩がなければならぬのであるが、そのテンポは必しも同様でない。魚雷推進の原動力が魚雷戰術を左右して來た實例は甚だ多い。

雷撃機が萬危を冒して敵艦まぢかに魚雷を搬入する理由、潜水艦或は輕快艦艇が萬難を排して敵艦に肉薄するところに、魚雷の眞面目が發揮される理由などの一面は魚雷の足が影響してゐるのである。

A、原 動 機

魚雷の原動機は極めてせまいところに、コンサイスされながら、大きな馬力を出すことが要求されてゐる。これには昔から様々な科學的工夫をこらして進んで來たものであるが、結局は氣筒の數多き放射、即ち星型機關が魚雷に最適な原動機として、それ自身の進歩が久しい期間考究されて來た。

一方では一般原動機にタービンが用ひられるやうになつて以來、魚雷推進にもタービンを採用する案が尖端機械文化の國、アメリカに起つた。アメリカの魚雷は現在タービンだと學者の間では言はれて居る。但し最近アメリカの魚雷を拾つて分解して見たわけではない、列國の多くは今日も猶、星型機關を採用して居り、氣筒の數を増し、複動に變じて、能率と馬力の増加を企てることが進歩の方向であるらしいといふことになつてゐる。

星型機關の最も原始的な形は九十度間隔を以てX字形に對置された四氣筒のものである。

「加熱装置」については別に後述するが、魚雷の中で燃料を燃やし、壓縮空氣を温めて用ひる發明を完成して以來星型機關にも種々な改良が加へられた。

星型機關は衝程が短かく、且連結錘が短かいので、曲柄を推す斜度が大なるばかりでなく、單

動であり、活塞の長さも小さいから不平均な磨滅を生じ易いといふやうな異説も起り、複働機關を以て右の缺點を補ふ發明もあつた。

アメリカのタービン魚雷は二種の羽根車を上下に置いて順々に蒸氣を通し各逆方向に回轉させて内外二様の車軸を廻轉するやうに出來てゐる。

オーストリアのホワイトヘッド社でも魚雷用タービンの計畫を發表したことがある。アメリカ式にくらべて特色とするところは減速用の齒車の數を極度に減じて能率をよくした點にある。

B、加熱装置

原始的な魚雷推進法は壓縮空氣の膨脹力で機關を運轉したものである。西紀一九〇四年にアメリカ人ブリスは魚雷の中で燃料をもやし、空氣が持つ酸素を熱の發生材料とすることを創案した。はじめ熱が強過ぎて困つたが、これは燃焼熱で蒸氣を作ることによつて解決された。斯様に氣室内の空氣を以て發熱する装置のことを「加熱装置」又は「加熱器」と名づけた。燃焼瓦斯をそのまま機關に送るものを「乾式加熱器」といひ、蒸氣を發生するものを「濕式加熱器」と稱してゐる。濕式加熱器の構造原理は壓力を以て送られて來る燒料油の管と壓縮空氣の管と合流して

噴霧状になつた燃料に点火されると、壓力で送られて來てゐる水が螺旋通路において蒸氣となり、この蒸氣は上向に吹き出して火焰に直接出會つて燃燒成生物、即ち炭酸瓦斯や窒素瓦斯などとよく混合して過熱蒸氣となつて下方の出口から機關の方に送られる。

噴出燃料に對する点火装置は普通黒色火薬の火焰が用ひられる。魚雷が發射されると同時に空氣壓力によつて作用される撃鐵が雷管を打つて火薬に点火する。油の噴霧状態が調子よくなつた時に發火しないと、所謂「冷走」をやることになるから發明當時は点火装置はなかなか苦勞されたものである。

加熱器に導入される清水は燃料油の三倍乃至四倍であるから、「清水タンク」はかなり大きなものになる。送水法は壓力を用ひる方法とポンプを用ひる方法があるが後者が普通である。

水は攝氏二百四十度で蒸發するのに潜熱が四百カロリー取るのだが、水の代りにアルコールを用ひると同温度で潜熱四十カロリーであるから、餘程多量の蒸氣を作ることが出来る。従つて馳走距離を増すといふ點からアルコールを採用した國もあつた。

C、無航跡魚雷

上述の如き魚雷は排氣の氣泡を水面に噴出して航跡を残す。これは相手が發見すれば避退したり魚雷を砲撃したりする機會を作る。

砲弾も飛んで來る時は鳥のやうにわれらの眼に映するが飛行秒時が速いからヒラリと身をかわすわけにいかない。魚雷はこれに比べれば甚だのろいものである。

氣室に空氣を蓄へる代りに酸素と水素を入れ、この二氣體を加熱器に導いて所謂、オキシハイドロゲンの焰を作り機關にはいる瓦斯は全部蒸氣にして海中に排出するならば噴出するものは皆水になるから、航跡を残さないことになる。アブクが見えないから、相手に轉舵逃避の餘裕を與へない。これが「無航跡魚雷」を得る一法である。電池に依る電氣推進も絶對無航跡であり得る理屈である。これらは前節に述べた以上に詳細なことは公表されてゐない。現在此種のものは何處の國に如何なる程度に採用されてゐるか一切不明である。電氣推進の方はアメリカが得意とするところであるが、今度わが砲手に撃たれた魚雷があつた。深度の狂つたものであつたものと見える。

魚雷構造の説明は以上で盡きたと言ひ難い。「深度調整装置」、「方向調整装置」も説明したいが本稿は兵器解説を主眼とするものでないから射法の話に移る。

英國では高速の飛行機用魚雷に成功したといふことであるが射程がどの位のものか不明である。普通魚雷は推進機關にさまざまな改善が試みられても飛躍的な變化が得られないのが當然である。今假に雷速四十節の魚雷を速力三十節の軍艦に向つて發射する場合を考へて見ると、魚雷が四千米走る間に敵艦は三千米移動してゐる。すなはち魚雷の走る方向は敵艦の速度に基いて、敵艦の未來位置に向けなければならぬ。魚雷は敵艦と出會ふやうに走らねばならないのである。

大砲に照準機があるやうに發射管にも照準機があつて、右の事情を解決する。それが「方位盤」である。現用の方位盤を説明することは出来ない。原理は次のやうなものである。

敵艦と我艦との距離を時々刻々測定することによつて敵艦の速力と針路（發射後も變針せぬも

のとして）は決定することが出来る。雷速は既知である。この二邊と挾角（敵速、雷速、敵針）によつて決定された三角形に相似なものを照準装置にと、のへられるやうにしたものが方位盤であつて、この盤上の照準望遠鏡に敵艦が入つた時に發射すれば魚雷は最初ソツ方を向いて駛走するやうであるが敵艦と魚雷は次第次地に吸ひ寄せられて遂に一點に出合つたらばその魚雷は命中である。魚雷が敵針路を通過した後に敵艦が來たり、敵艦が豫定位置に來ても魚雷が豫定位置に達しないといふ場合は不命中である。これは魚雷の調整が悪いか、敵針敏速の測定或は推定に誤算があつた場合である。わが發射後に敵がそれを氣づいて任意に速力針路を變更したらば一發必中はとても無理な相談である。

大艦隊が長蛇の縦列を形成して航走する場合に、われより數條の魚雷射線を放射すればその中どれか命中するといふ射法もあるにはある。然し魚雷は砲彈のやうに雨霰と敵艦に注いで命中を期する性質のものではない。理想は一發必中である。従つて魚雷に長途の旅をさせぬ方が命中率がよいわけであるから魚雷の運搬に従事する艦艇其の他は、或はその隱密性を利用し、或はそのスピードに依存して敵艦に肉薄せんとするのである。スピード依存の代表は飛行機雷撃であ

り。隱密性の最も濃厚なるものは潜水艦による雷撃である。その中間を行くものが驅逐艦、水雷艇、更に小型の高速魚雷艇の類である。

7 雷撃機戦法

飛行機に魚雷をつんで敵艦に接近した上、落射するといふ案が現在わが海軍において着々戦果を収めつゝあるがこれらの元祖は西紀一九一二年にアメリカの海軍少将フィスクが特許を得たのに始まる。前大戦下、一九一六年英國の雷撃機はドイツの軍艦二隻を沈めた。ドイツの雷撃機は英國のジエナ號を沈めた。これが雷撃機魚雷の奏功のはじめである。大戦後雷撃機は専門飛行機として各國が研究したのみならずこれに用ひられたる魚雷も専門特殊魚雷として研究された。此種魚雷は概念的に言ふと、遠距離用を豫期せず、高速を短時間に發揮し得る性質のものであるべきである。魚雷の構造が強く出来てゐる程落射位置は高くてよろしいわけであるが、魚雷の強度には限度があるのみならず射法の上から空中を長道中させるわけにはいかない。落射位置は敵艦と水面に近い程理想的である。ところが右兩者は敵の防禦砲火の命中率をよくする性質のもので

ある。そこで速い飛行機を單獨でなく、出来るならば大群を以て敢行し、敵の防禦砲火を分散させるといふ手段を選ばなければならない。敢爲の精神が敵の意表に出で、奇功を奏することがある。天象に恵まれて敵の不意を襲ひ得る場合もある。然し此種の問題は戦機を捕へる妙諦に屬するものであつて、日常の猛訓練の効と、敵前において餘裕ある心境が必要である。問題は機械を離れるわけではないが人に移る。この實相に適合した襲撃命令を出し得る指揮者は名戦術家である。飛行機をこのやうに働かせる爲にはこれに附随した他種艦艇の戦術行動もあり戦略的な準備も必要であるが、話が擴がり過ぎるからこれで止める。

8 潜水艦戦法

西アフリカのフリータウン沖でイタリア潜水艦バリバリゴはミシシッピ級米國戦艦を魚雷四發で撃沈した。この潜水艦長グロツシー中佐は米國戦艦メリーランド型を仕止めた殊勳者である。どんな機械でも機械に魂がこもる程に操縦者と一體にならなければ全能力を發揮し得るものでないが潜水艦の如きは艦長一人の全神経全靈が肉薄運動を敢行し、必殺魚雷發射の機會を捕へ

るので言つても過言でない。

潜水艦の戦術運動については秘密な事項が甚だ多いから、不用意な言葉を警戒する意味でドイツ海軍のパウエル大將が述べた所を要約列挙することによつて概念を得る資料とする。

○若し潜水艦が潜望鏡深度を保持しながら航行し得るものならば理想的であるが、實情はそれを許さない。即ち艦長は潜望鏡によつて海上全般の状況を知らねばならぬ。此潜望鏡は魚雷發射の照準望遠鏡となるものである。此唯一の眼玉で敵の警戒艦艇と上空の敵機を發見して適當な處置を講じなければならぬ。この二重負荷を軽減する爲に二番潜望鏡に他の將校を配置するといふ手段があるが、敵に接近してから二番潜望鏡を使用するといふことは被發見の危険率を増大させるのみならず、魚雷發射と敵の攻撃を回避する運動は間髪を容れないものであつて艦長独自の判断によつて行動することが要求されるのである。即ち潜水艦長は視界に關する限り一騎打ちである。

○潜水艦は構造上水中速力低劣である。しかもその最大速力を使用すれば短時間内に電源が枯渴する。また八節乃至十節の速力を出せば潜望鏡が水面に作る艇跡によつて敵に發見される機會

を増す。更に潜望鏡の振動といふことがあるから潜望鏡觀測の必要程度に應じて水中速力は持つてゐても出せない。こんなわけで敵が大角度の變針を行ひ且つ高速力を用ひるならば潜没位置から適當な「射點」に移ることは困難である。

○潜水艦の水上速力は戰術的に如何なる意義を持つてゐるかといふと、潜水艦が敵の視界内で浮き上り、「射點占據」の運動をやるやうなことは先づ例外である。通例潜水艦自體を敵の視界外に保ちながら迂回航路によつて敵の前路に待ち伏せして適當な射點を得るのである。

9 旅順襲撃隊

日露開戦劈頭わが驅逐隊三隊が旅順の敵艦隊を襲撃したのは明治三十七年二月八日の夜から翌九日の夜明け前であつた。驅逐隊は六日に佐世保を進發して七日に前進根據地についた。こゝで三人の驅逐隊司令は鼎座して明晩決行すべき襲撃法について軍議をこらした。各隊の襲撃順序、襲撃方法、襲撃隊形、奇襲の時刻等が主な議題であつた。

さて三司令鼎座の末、出來あがつた旅順口襲撃三驅逐隊の襲撃規約は協定された。

間もなく驅逐艦は珍島を出勤して、每勿島の附近に達し、驅逐隊司令三人は旗艦三笠の司令長官にいとまごひの爲伺候した。長官は喜怒を色にあらはしたことがないといはれた人格の持ち主であるが今日は思ひなしか一文字の口が一段と引締まつて見えた。長官はおもむろに「荒天つゞきの折から驅逐艦の勤務御苦勞察します。今日までに、敵ならざる敵と闘つて、貴重なる一隻（あけぼの）が傷いたことは誠に残念である。同情に堪へない。曙の分までも努力して存分に闘はれよ」

といふ意味の激勵の言葉があつた。先任司令は、その意を承つた旨を述べた。血氣盛の三司令は口には出さなかつたが決心の程が六つの瞳孔にかゞやいてゐる。

斯くて聯合艦隊は每勿島を艦尾に、金色の夕陽を灰色の左舷に反射させて北上を開始した。その姿は長蛇と形容するよりも昇天の龍の如くであつた。龍の前後左右には決死の驅逐隊が、グラングランとガブリながら随伴してゐた。

八日午後六時圓島（旅順口東方約四〇海里沖）の南東六海里の地點に達した時驅逐隊は本隊に別れることになつた。驅逐隊は夕霧を衝いて叫ばれる萬歳の聲に送られて、襲撃地點に針を向けた。

第一第二第三驅逐隊は規約通り隊番號順序に旅順港口老鐵山燈臺を目ざして眞一文字に進んだ。途中二個の燈火が現はれたので、よく見ると敵の哨戒驅逐艦であつた。われは艦尾燈を消して敵の注意を避け右に回頭しながらわが所在を晦ましたのであつた。われは敵に姿をくりました積りであつたが敵は知つてゐたのである。

ロシア海軍大佐ブーブノフの手記によれば、

余（ブーブノフ大佐）は一月二十六日（わが曆にて二月八日）午後四時、スタルク中將夫人の許にて、大守附外交事務官ブランソンより、内密に雙方公使の召還せられたる事實を聞き取り。是より先、わが軍艦は長官の信號により毎夜水雷艇防禦を行ひたるも、防禦網は張らず、かゝる前後の關係より、水雷艇防禦の信號ある毎に之を以て操練なりと心得たるのみならず、

概して夜中の哨戒は緩にして大口徑砲には装填せず、總兵員は脱衣して眠り、或艦の如きは釣床内に入るを許せり。二十六日より二十七日（八日―九日）に亘る夜の如き、外港碇泊の多數軍艦は、大艇を用ひて石炭を搭載し、戦争の避くべからざること明白なりしにも拘りず、全艦隊は警戒に關し、何等處置をも取らざりしなり。而して二十六日（八日）の夜、二隻の驅逐艦は「決して射撃すべからず、若し疑はしきものを見たる時は引きかへして長官に報告すべし」との訓令を受けて巡羅に出でたり。此結果わが驅逐艦は、襲撃を決行せんとして航行せる日本驅逐艦に遭遇したるも、之に對し砲火を開かず、訓令の趣旨を遵奉して、引きかへし、敵と殆んど同時に艦隊に歸投し、其の中一隻の艦長は、敵驅逐艦出現の報を旗艦にもたらしたる時、「バルラダ」は既に爆發の難に遭ひ、また「ツエザレウイツチ」も艦底に水雷爆發したるとき、始めて砲火を開き、日本驅逐艦は連続襲撃し來れり。爆破せられたる「バルラダ」は、西方砲臺下の岸に乗上げて坐礁し、同じく「レットウイザン」は内港に向はんとして通路の礁上に坐して横に港口を塞ぎ「ツエザレウイツチ」は之につゞいて同方面に向ひ、「レットウイザン」を避けんとして同じく坐洲せり、月出づるに及び、四邊の光景漸く靜寂に歸し、哨艦に

當れる二隻の外の驅逐艦は、内港に在りて敵の襲撃を知るや否や直に汽釀追撃の命下りたれども、其の出發後何物をも發見する能はずして早朝空しく歸航せり。といふ次第であつた。

かゝるていたらくとは想像する由もなく、わが第一第二第三驅逐隊においては、敵哨艦の出現にハツとして第一驅逐隊は俄然速力を減じた。第二驅逐隊の一番艦「いかづち」は第一驅逐隊の殿艦「あかつき」に接近したので驚いた。衝突を避ける爲に速力を減ずると同時に「あかつき」の右舷に出やうとする一刹那、後方の「おぼろ」は「いかづち」の右舷錨座に接觸した。「おぼろ」の鼻が曲がつて仕舞つた。第二驅逐隊司令は今遂巡して時機を誤つてはならぬと思ひ「其の艦は破損の程度に應じ、單獨機宜の行動を採り、第三集合地點に到るべし」と訓令し、「いかづち」は其のまゝ第一驅逐隊に續行したが、このドサクサで第二驅逐隊の殿艦「いなづま」は、後續して來なくなつた。第三驅逐隊も見へない。かくて襲撃隊は第一驅逐隊の四隻と第二驅逐隊の「いかづち」が一團、第三驅逐隊（第二驅逐隊から落伍した「いなづま」が殿艦に入つた）が一團となり、第三驅逐隊からはぐれた「さゝなみ」は單獨で襲撃したのであつた。

第一驅逐隊は前述の如く敵哨艦を右廻して避けた後原針路に復し、午後十一時八分老鐵山燈臺の燈光を認めて艦位を定め、敵艦隊の探照燈を目標として徐ろに敵艦に近づいて行つた。

午前〇時五分（九日）豫定地點に達して北方に變針して襲撃隊形に移つた。

午前〇時二十分下弦の月未だ昇らずたゞ敵の探照燈のみが海面に躍り、暗中覺束なき視界であつたが、幾多の巨艦が情報と大差なき状態で碇泊してゐるのを發見し得た。

第一驅逐隊は淺井司令の襲撃命令で攻撃を開始した。一番艦「しらくも」は左に回頭し、三本煙突の敵艦を襲ひ更に二本煙突の一艦に一撃を試み、全速力で南方に避退した。毎發の魚雷は皆爆發するのを認めた。二番艦「あさしほ」は一番艦の航跡を進み左回頭して、〇時三十二分「ベレスウエート」型戦艦を襲ひ、次いで「レトウイザン」型戦艦に迫り、魚雷の命中を認めて南東に避退した。

敵は我が襲撃を覺つて、各艦俄かに騒然。砲聲いんいん四方に起り、彈丸雨飛して、わが驅逐隊の所在に落下した。

三番艦「かすみ」も「あさしほ」の如く左回頭するや敵探照燈の光芒に入つた。砲撃を蒙らぬ

内にと、〇時三十三分、二橋三煙突の一艦に第一撃を加へ、つゞいて「バルラダ」型を襲つた。

敵艦側には火柱奔騰し。味方の方では敵弾が雨霰のやうであつた。全速南方に避退して危く沈没を免れた。殿艦「あかつき」は屢、探照燈に照射せられたが、〇時三十三分左回頭し、西に定針三十五分「レトウイザン」型に一撃を加へ、更に西走して二橋三煙突の一艦を襲ひ、いづれも魚雷の爆發するのを認めた後、彈雨を冒して全速南に避退した。

第二驅逐隊司令はたゞ一隻となつた乗艦「いかづち」を率ゐ、微速力で正北に潜進中、敵の照射に會つたが發見せられず、〇時三十分、暗中に敵の艦列を認め得たので、だんだん速力を増して接近し、〇時三十五分右回頭して一發を二橋三煙突の一艦に喰らはせ全速後退、アスコリッド型から照射猛撃されたが飛彈は皆艦上を掠めて損害を受けなかつた。

敵艦を見失ひ新に他隊の「いなづま」を拾つて殿艦に容れた第三驅逐隊は前續艦隊の襲撃に遭つて猛照亂射する敵艦に對し、〇時三十分先頭艦「うすぐも」左回頭して「ヂヤナ」型に一撃を加へ、次で西隣の一艦を襲ひ、二番艦「しのめ」も敵に近接し〇時四十二分右回頭して魚雷を發射し南東方に避退した。此時新入りの四番艦「いなづま」は、猛砲火を冒して前續二艦が左右

へ去つた中間から突進し、○時四十五分左へ回頭の上、「ヂャナ」型に向つて發射を行ひ、更に「レトウイザン型」を襲つて退航した。

はぐれた第三驅逐隊の三番艦「さざなみ」は僚艦だと思つて近づいて見ればそれが敵の驅逐艦であつたりして飯隊の目的を達しない間に時が立つた。遂に單獨襲撃を決意して黄金山に向ひ敵が俄に探照燈を點じたのを幸と、午前一時二十五分艦列の中央と思はれる「ポルタワ」型に近づいて襲撃を行つた。

衝突事故で鼻を曲げた第二驅逐隊の「おぼろ」は、航進すると艦首で白波を立てるので敵に發見され易い状態であつたのみならず操舵にも故障があつたが艦體には異状がないので單獨速力をおとして港口に近づいた。わが各艦の襲撃が終つて敵艦隊はヤレヤレと思つてゐた時、午前一時四十五分頃、四煙突の一艦に魚雷を發射し再び起る猛砲火を冒して南東方に退避することが出来た。

此夜の襲撃隊の幹部には十年の昔、威海衛において清國艦隊を襲撃した水雷艇隊の艇長、艇隊附等が多少居たのであるが、全機構としては初陣であつた。

襲撃隊の先頭に立つてリードした驅逐艦「しらくも」の當夜の模様は次の如くである。

○老鐵山頂の方位をたよりに港口に向つて進んだ。○眞つ暗で距離が定められないから仕方なしに老鐵山を空に透かして敵艦碇泊位置を海圖に記入しジリジリ微速力で接近して行つた。○司令は艦首の旗竿の下へ行つて敵狀を注視してゐる。艦長はコンパスで地物の方位を取つて艦を射點に持つて行くことに専念してゐる。○前方に「レトウイザン」が見え出し「レト」が居る、「レトが居る」といふ聲が起る。○發射管受持の中尉が艦橋に呼ばれ敵艦の狀況を見た。○二千米まで近づけば發射出来るのであつたが千米まで近づくことにした。○司令が「もうえゝぞ、もう來たぞ」と催促する。○艦長は「まだ参りません」と少し進行をつゞけた後「もう大概距離に入つたやうでございます」といふと直に「取舵一杯」の號令がかゝつた。○大きい舵をとると艦が傾いて照準が困難になる。艦首を水に突込むやうになるから艦長はそれを加減して操縦し規約通り左舷に回頭した。○照準が出来たら發射せよと艦長は命令した。○一發また一發連續發射すると發射管から吹出す火焰と音響とに驚いた敵の狼狽振りは非常なものであつた。○敵の警戒は嚴重であつたものと見え、直に探照燈の照射と砲火の掃射を蒙つた。○砲弾は悉く頭上を飛んで一つも

損害を受けなかつた。○それから續々二番艦以下と他の驅逐隊が襲撃にかゝつた。

開戦劈頭に行はれた此魚雷襲撃は決行前既に落伍を生じ、更に暗中で隊としての統制を一部失つたが、はぐれたものも傷いた艦も單艦突入して十艦各二發合計二十發の魚雷を敵の巨艦に向つて發射した。命中三發、命中公算は一五%であるから一發必中を戦法と信ずる隊員として戦果に不満があつたものゝ如くであるが、日本海軍何程の事や爲し得ると蔑視してゐた敵の荒膽をとりひしぎ無限の精神的効果を與へた。更に翌年日本海海戦において魚雷襲撃に大成功を得たことは此時の襲撃が多くの教訓を與へたものだと言はれてゐる。それは獨り日本海海戦に於いてのみに止らないと思はせられる。

此夜の戦果

戦艦「ツエザレウイツチ」(一二九一二噸) 舵機室を破壊せられ浸水、左舷に傾くこと十八度。

戦艦「レトウイザン」(一二九〇二噸) 水線下仰筒室の艦側に大孔。

巡洋艦「バルラダ」(六七三一噸) 中央水線下汽罐室附近損傷。

わが襲撃隊驅逐艦は全部歸還した。わが三隊の驅逐艦名は次の通りであつた。

第一驅逐隊 白雲。朝潮。霞。曉。

第二驅逐隊 雷。龍(雷と衝突損傷單獨襲撃)。電(第三驅逐隊と共に襲撃)。曙(事前春日丸と衝突後送不参加)。

第三驅逐隊 薄雲。東雲。漣。

旅順艦隊に對する雷撃は旅順陥落も切迫して來た明治三十七年十二月にも行はれた。これは唯一の敗殘艦「セバストポリ」(戦艦一〇九六〇噸)に對してわが水雷艇隊が吹雪の夜を利用して繰返し決行したもので、これにより旅順艦隊は全滅したのである。

10 日本海夜戦

五月二十七日午後二時から七時半頃迄で日本海海戦の晝戦は一先終つた。當日此地の日は七時二十八分であつた。「驅逐隊艇隊襲撃せよ」といふ信號命令は午後四時に一回と日没近くに一回掲げられた。砲戦に傷いて二時半頃から列外に出た敵の旗艦「スワロフ」は通報艦「千早」が襲撃を行ひ、また第四驅逐隊(朝霧、村雨、朝潮、白雲)が三百米に肉薄して發射を行つたが沈

まなかつた（一發命中）。その後午後七時二十分第十一艇隊（第七十三號、七十二號、七十四號、七十五號水雷艇）の襲撃を受けて沈没した。其の夜、北走して浦鹽に向ふ殘敵を打取る雷撃陣は次の如く三面包圍の形であつた。

北方から。第一、第二驅逐隊および第九艇隊。

東方から。第四、第五驅逐隊。

南方から。第一、第十、第十五、第十七、第十八、第二十艇隊（水雷艇二十四隻）。

敗殘の敵艦隊は副將「ネボカトフ」司令官これを集め、午後八時過、四面暗黒の夜に乗じて針路を北々東に定め浦鹽へと志したのであつた。嚮導艦は戦艦「ニコライ一世」、これについて戦艦「アリオール」、装甲海防艦「アブラクシン」同じく「セニャーウイン」。少しく離れて装甲海防艦「ウシヤコフ」、戦艦「ナワリン」、戦艦「シソイウエリキー」、装甲巡洋艦「ナヒモフ」が續行した。巡洋艦「イズムルート」は「ニコライ」一世の左舷正横に位置し艦隊の速力は約十二節であつた。

日本海海戦に現はれた敵の戦艦は八隻であつた。晝間の戦闘で砲戦の結果撃沈されたのは四隻

である。此中には魚雷によつてとゞめを刺されたものもあるが既に戦闘力の九〇%を失ひ愴愴蹙蹙としてゐたものである。或る驅逐艦長の如きは艦隊から襲撃命令が下つたが傷いた「スワロフ」の遁走出来難い姿を見て貴重なる魚雷を夜戦の爲にセーブした方がいゝと思つて打たなかつた位である。

二十七日夕刻敵戦艦の形勢は次の如くであつた。

「スワロフ」(午後七時二〇分沈没)

「アレキサンドル三世」(午後七時〇分沈没)

「ボロジノ」(午後七時二三分沈没)

○「アリオール」(北進)

「オスラビヤ」(午後三時七分沈没)

○「シソイウエリキー」(北進)

○「ナワリン」(北進)

○「ニコライ一世」(北進)

右の外に装甲海防艦、巡洋艦等の中型軍艦と驅逐艦若干が残つてゐたのであるから、若し同夜の魚雷戦が無かつたならば二十八日朝の鬱陵島附近における敵將降伏の事情は變つたものであつたかも知れぬ。艦隊司令部としても晝戦の戦果が更に少なく、打漏らした艦隊の勢力が大きい場合でも、夜戦に期待出来ると思つてゐたものゝ如くである。

同夜は浪なほ高く驅逐隊艇隊にとつては可なりの悪運であつたが雷撃隊は驚くべき勇敢さを以て敵に當つた。射程の最短なるものは二〇〇米に及んだ。索敵中に敵艦と危く衝觸せんとした驅逐艦もあつた。

日没後直ちに雷撃隊の進發を令したのは敵を暗に見失はぬやうつけ廻はさせる爲であつたが第四驅逐隊の如きは最後に襲撃するといふ規約があつて待つて居る間に敵の所在を見失ひ暗中索敵に苦心した。敵が探照燈を點じたのはよき目當になつた。

當夜の雷撃隊奮戦記録は戦果の大小にかゝらずどれも捨て難いものであるが全部を記せば紙が足りない。

第四驅逐隊は東方からの進撃隊で朝霧、(村雨は不参加)、朝潮、白雲の四驅逐艦が司令鈴木貫

太郎中佐に率ゐられてゐた。

午後十時半頃北方に進行する四隻の艦影を暗中に發見した。これは索敵中の味方驅逐艦であると思つて遣り過した。(後に彼我の戦史を調べて見るとこれがネ司令官の率ゐる敵の大艦四隻であつたのである)

午前(二十八日)一時過ぎ、折柄現はれた月光に一隻の敵艦を發見した。艦型が三笠によく似てゐる。三笠が晝戦で非常な損害を蒙つたとすれば今單獨で蔚山にでもたどりつかうとしてゐるのも不思議ではない。二三度の味方信號を吹いて見た。(ゴム管を口で吹くと焰を走らす石油ランプの信號燈。焰の吹き加減で長短符を出すから「吹く」といふ)。應答がないので、是れだけ慎重を期した以上萬一間違つて味方を沈めても仕方がないと決心して襲撃運動に移つた。「村雨」は晝間の戦闘で傷き速力十五節以下に落ちたので對州に歸らせた後であるから三隻の襲撃であつた。距離は約二千米。敵は東、われは西、敵は月光を背にしてゐるから其の行動は、此方から手に取るやうに見える。敵が氣がつかない。第一回の襲撃運動を濟ませて更に西北に進むとまた一隻敵艦を發見した。これを追ひ越してから反航して此敵に襲撃運動を試みた。終つたのが午前二

時頃。襲撃距離は六百米—三百米。魚雷爆発の激動はブリツジでは、左程に感じなかつたが機関室の人員が飛上つて来て、「魚雷命中」と喜んで甲板上に躍つてゐた。水線下の方が激動を感じることに鋭敏であつたのである。一番艦よりも二番艦三番艦の方が強く激動を感じた。再び北西に針路を定めて航走すること五分位で後から防禦砲火が起つた。第一艦は戦艦「ナワリン」(一〇二〇六噸)第二艦は戦艦「シソイウエリキー」(一〇四〇〇噸)であつた。ナワリンは命中魚雷二發で、其の場で沈没、生存者捕虜三名。シソイウエリキーは此雷撃で大破し、二十八日朝わが假裝巡洋艦に捕獲されたが、廻航の途中對州沖で沈没した。

驅逐隊は更に西北に進んで敵を索めたがこれ丈で夜が明けて仕舞つた。二十八日は蔚山に行つて石炭を積み、魚雷を補充して夕刻近くに蔚陵島に到着した。丁度瓜生戦隊(「浪速」、「高千穂」、「明石」、「對島」の輕巡戦隊)が敵の巡洋艦「ドンスコイ」を攻撃中であつた。夜になつたら「ドンスコイ」とどめを刺してやらうと待つてゐたのであつたが、その夜再び「ドンスコイ」を發見出来なかつた。明けて二十九日の朝、蔚陵島に来て見ると、ドンスコイは今自沈したところで乗員は陸上に避難した後であつた。第四驅逐隊の武運は最早これ以上恵まれず海戦は終

結した。

「ドンスコイ」の艦長レーベフ大佐はエラ物であつた。二十八日の朝彼は「ドンスコイ」と他に驅逐艦三隻をまとめてゐた。驅逐艦「ブイヌイ」は、傷いた司令長官を收容してゐた。戦艦「オストラビヤ」の乗員二百三十名も收容されてゐた。然しもう石炭が缺乏してゐた。「ドンスコイ」艦長は「ブイヌイ」の乗員と收容人員を自艦に移し長官は驅逐艦「ベツドウイー」に移して驅逐艦「グロズヌイ」と共に浦鹽に向け走らしめた(途中捕獲された)。「ブイヌイ」は「ドンスコイ」の六吋砲で撃沈して敵手に渡る懸念を斷ち自艦も浦鹽へと急いだのであつた。夕刻(七時)になつて右舷から瓜生隊四隻、左舷から「音羽」「新高」(出羽戦隊の一部)に挟撃せられ、第二驅逐隊(矢島隊)「隴」「電」「雷」「曙」は退路を扼してゐた。「ドンスコイ」は兩舷戦闘で文字通り獅子奮迅の勢を示した。不思議に沈まない。日没に近付て戦隊は攻撃を中止してあとは驅逐隊に「襲撃せよ」といふ信號を残して東南に去つた。夜九時頃第二驅逐隊は三隻(「雷」は第一夜に損傷甚しく竹敷に歸らせた)で「ドンスコイ」を襲撃した。場所は蔚陵島の南の沖であつた。此襲撃はロシア側の戦史を見ると、一發も命中して居らぬ。

驅逐隊は襲撃後北方に先行して終夜哨戒した。それは若し「ドンスコイ」を打ち洩らしてゐたら、浦鹽に向ふものと推測したからでもある。夜が明けて（二十九日）南下して見ると「ドンスコイ」がまだ浮かんでゐる。矢島司令は二番艦「電」に命じて昨夜「ドンスコイ」をつけきはしてゐた「淺間」をさがして発見の情報を傳へるやうに命じ、三番艦「曙」は鬱陵島の望樓との打合はせをして来るやう分派し、司令驅逐艦「隴」一隻を率ゐて「ドンスコイ」に立ち向つた。萬國船舶信號を以て、「降伏せよ」とやつた。應答がない。よく見ると艦上に人影がない。中佐と下士官一、兵三、信號兵一の六名より成る敵艦捕獲隊員が小さいジンギー（小型ボート）で派遣された。隊員の心中には敵甲板に上つた時ワツと出て來たらどうしやう。刺し違へて死ぬばかりだといふやうな幻影が去來した。ボートが敵艦まで二百米位の位置に來た時、「ドンスコイ」は突如艦首を二三次打振るかと思つた間に沈んで行つたので呆氣に取られてゐると、鬱陵島の方から漁船が一隻、向ふ鉢巻の船頭が八挺櫓を押して息せき切つて飛んで來た。「旦那大變です。昨夜ロシア人が澤山島に上つてゐます」と訴へた。「ドンスコイ」艦長は夜中に自艦を見捨て、人命のみを島上に留めたのである。これで第二驅逐隊も魚雷の遣り場には終焉を告げたのであつた。

（捕獲隊が島の芋洞といふ沙濱に船頭の案内で上陸すると若いロシア士官が三人、海岸に待つてゐて握手を求めた。その士官の案内で捕獲隊指揮官は下士官一名と信號兵をつれて「ドンスコイ」艦長がゐるといふ山深く入つて行つた、艦長はとても重傷なので代理として副長を捕虜として歸艦した。

そこへ鈴木貫太郎隊が「ドンスコイ」を雷撃する意氣込でやつて來た。矢島隊は鈴木隊に「島にロシア兵が澤山ゐる。後は頼む」と、言つて立ち去つて仕舞つた。鈴木隊はありつ丈けのビスケットを島に送つて、傷者をねぎらつた。その日の内に「春日」他三艦が來て捕虜を全部收容し、これを佐世保に送つた。

第二驅逐隊の襲撃法を海戦第一日に遡つて略述し、驅逐隊の話の打切りたいと思ふ。

第二驅逐隊の戦策では暗夜索敵は困難を豫期されるから薄暮に敵影を捕捉して置いて暗くなつたら直ぐ襲撃するといふことになつてゐた。故に襲撃命令の信號が降りると直に全速索敵に移つた（信號は降ろした時が發動を令する時機なのである）。此時北東に進む四隻の敵艦を発見したので、襲撃を決意した。敵艦隊の先頭に向つて驀進接近し敵と併航しながら敵針、敵速を測定し

た。これを確めるや取舵一杯とつて内方に旋回し反航して襲撃に移つた。隊の規約で敵艦四隻に對し反航襲撃の場合には一番艦「臙」は敵の殿艦を目標、二番艦「雷」は敵の三番艦、殿艦「電」は、敵の二番艦、四番艦「曙」は敵の先頭艦といふことになつてゐた。「臙」の戦況は次の如くであつた。

八時十五分「臙」の先任將校(軍艦の水雷長に當る)は照準器について反航する敵の殿艦を狙つてゐた。距離四百米—三百米。此時敵は探照燈を點じ砲撃を開始し、小銃迄持ち出して彈雨をわれに浴びせかけた。發射する迄に兵が斃れてはと敵彈の中らぬことを神に念じ發射管員は甲板上に「伏せ」の姿勢をとらせた。此日浪高く艦の動搖が激しい。右舷正横に向けた發射管からやゝもすれば魚雷が滑り出しさうである。恰も奔馬に手綱を咬ませるやうに左右から綱を採つて兵に持たせて魚雷の奔逸を防いだ。發射時機刻々切迫。發射管員を立たせ、狙ひ定まつて發射した。

此四隻は「ウシヤコフ」(装甲海防艦)、「ナワリン」(戦艦)、「シソイウエリキー」(戦艦)、「ナヒモフ」(装甲巡洋艦)であつて臙は「ナヒモフ」を狙つたわけである。

露國側の戦史によると「敵の襲撃に對し、第一に犠牲となつたのは「ナヒモフ」である。午後

八時頃艦首石炭庫に破孔を生じ、その爲翌日沈没した」とある。即ち臙の魚雷が少くも一發命中した事は確實であるが直に轟沈と行かなかつたのは敵にとつて當り所が良かったのであつた。

此襲撃中に「臙」は僅かに三〇五噸の小艦でありながら三十六個の命中彈を受けた。

概観して見ると日本海海戦におけるわが驅逐隊は〇二十七日朝敵發見の初期、敵の前路を横斷(鈴木隊)した時敵は魚雷發射を豫期して大動搖を起した。その混乱は午後二時過ぎ砲戦開始の時迄に回復出来なかつた。○晝戦で半分になつた敵の戦艦を一夜中に更に半減した。(初め八隻—四隻—二隻)。○晝戦後先行北上したわが主力の布陣に敵主力がつかまつて降伏を餘儀なくされたのは第二日の白晝であつた。

11 結 言

昭和十七年十月二十六日南太平洋の戦場で〇〇兵曹の雷撃機は海面すれすれを飛んで這ふが如く、敵艦に近づいた。愛機は今敵彈の爲に火を吹き出した。敵戦艦が眼の前を横切らうとしてゐ

る。機は魚雷を抱いたまゝ、敵艦の舷側に突撃して壯烈なる自爆を遂げた。これが「戦艦一隻撃沈」の瞬間であつたか否か今日までの新聞報では知る由もないが、眞珠灣特別攻撃隊その他と共にこれが日本海軍現前の姿である。往時に比べて魚雷そのものゝ機能が進んだ。魚雷を運ぶものもその機能が進んだ。たゞ昔も今も變らないのは、わが魚雷戦の闘魂である。「一發必中」の理想は相次いで實現されつゝある。雷撃戦術の眞髓も究極する所これ以外のものではあり得まい。

二 未來の魚雷戦

魚形水雷、略して魚雷は砲彈と甚だ趣を異にしてゐる兵器である。即ち薄い堅牢な鋼鐵で作られた魚體狀のケースの中に自力推進、自力操舵の精密なる機器を藏してゐる。従つて砲彈は初速一千米秒程の大きな初速で出發するが、魚雷の方は水中發射管たると水上發射管たるとを問はず、僅かな火薬或は壓縮空氣の力によつて舷側から海中に押し出し或は上甲板から舷外に投げ込めば、それから先は自力で與へられた深度を保ちながら敵艦の未來位置に向つて突進する。深度の上下及び潮汐の流壓、その他の外力に基く偏向は縦舵横舵を作動させて修正しながら進みに進んで、魚雷が敵艦水線下の艦腹船殻に打ち當れば頭部に装着した觸角風の鐵片を壓することによつて發火し、全魚形體の約三分の一の容積を占めて充填されてある實用頭部（練習用は柔軟金屬の中空頭部）内の三―四〇〇ポンドの高爆薬に引火して炸裂し、大破孔を敵艦にうがつものであるといふ事は大方ご存じのことと思ふ。

日露戦争時代のヴェデット（艦載水雷艇）或は近頃の高速モーター・ボートの發射艇又は落射機と稱する兩舷側に裝備された断面圓弧狀のグレーチングから、恰もイソップ物語にある魚を喰はへた橋上の犬が、水鏡の結果ワンと吠えた時に橋下に落した魚の如く、魚雷を海中に落下せしめ、此時に魚背の發停起動のトリガーを作動せしめて發射の目的を達する頗る簡單輕妙な發射装置もある。いづれも水中又は水面上高からざる位置から海中に投するのであるから、如何なる精巧な機械を藏するものと雖も、發進の機能を阻害し或は變化せしむる懸念が無いのである。

これに類似の落射装置を攻撃機の底面、フロート或は車輪の間にとりつけて飛翔中に敵艦を照準し魚雷を落射する飛行機が所謂雷撃機である。その魚雷が飛行機魚雷或は空中魚雷或は略して空雷と呼ばれてゐるのである。

雷撃機は水上におけるまた水中における雷撃用艦艇に較べて甚だ高速力であるから曉天薄暮敵艦隊の視界大ならざる時を選び、不意に敵艦めがけて襲撃を執行する爲の接近運動をとる爲には、甚だ好都合であつて非常な肉薄を敢行しても敵の防禦砲火を潜脱する機會も甚だ多く期待せられ、回頭、離散、上昇も同じく水上襲撃艦艇の企て及ばない敏活さで行はれるから、考へ方に

よつては雷撃機のかくも的確なる奏功は寧ろ當然だと言ふ人もあるであらう。

その昔、日清役において黄海大海戦の猛砲撃に彼は装甲の威力を以てわが砲彈の撃破力に耐へ、打ちもらされて根據地威海衛の奥深く遁竄した。われはこの北洋艦隊主力に對し「月はかくれて、海暗き、二月四日の夜の空」に「暗をしるべにさぐり入るわが軍九隻の水雷艇」が「目さす敵艦、沈めずば、生きてかへらじ退かじ、この身は彈丸に砕くとも、指は凍りてちぎるとも」の覺悟の下に決行された萬死に一生を期する水雷艇隊襲撃の結果が「敵の艦隊亡びたり、敵の關門破れたり、音に名高き威海衛、早、わがものぞ、わが土地ぞ、目さす處は今早四百餘州も何のその」と謡はれた戦果を収めた勇敢行爲と、現在二分の一世紀を隔てた今日、ハワイの奇襲空雷戦において敵主力の大半を屠り、米國太平洋艦隊をして再び立つ能はざらしめた曠古の大捷は、其の襲撃手段襲撃機構において昨日の科學と今日の科學との變貌こそあれ、わが海軍、わが海軍の傳統の繼承者の身にとつて寧ろ當然なる軍事行動にすぎないのであるが、懸軍數千海里怒濤風雨と闘ひつゝ空襲部隊の進撃を推進した艦隊將士の勞苦、別しては敵の防空彈幕の亂射亂撃を冒して至近の距離に肉薄して魚雷發射一發必中の大任務を平然決行した年若き人々の膽勇と貴

き犠牲的精神の發露に對しては思はず眼頭の熱くなるを覺える次第である。がこの成功には更にかくれたる犠牲が礎石人柱となつてゐることも閑却することが出来ない。それは今から三分の一世紀を遡つたわが海軍の航空部隊創設時以來のわが航空戰術創案者、空戰訓練の當事者達の大きな苦心と貴き犠牲に就いてである。

日本海軍が艦隊雷撃法を率先着想して研究を開始したのは今を距る事二十餘年前のことである。外國では三百米の高所から魚雷を落射すること、甚だしきは一萬米の高所からパラシュート附の魚雷を落下する實驗を行つたといふのがつい數年前のことである。もとよりこれらの研究を怯懦の結果なりと冷笑するものでは斷じてない。人間がついて居ないで敵艦を轟沈せんとする機雷戰術も尊重されるものであるから、戰略上戰術上各種の要求に基いて攻撃法が研究されることと見るべきであるが、先制集中を生命とする緒戰期一番槍の魚雷戰術には前述以外に重大なる研究の分野がある。それは低空、肉薄襲撃の確實性の活用である。

魚雷の機構は冒頭に述べた通り甚だ精巧にして同時に脆弱性を有するものである。

水泳の飛込でも未熟時代に經驗するところの状態を魚雷に移して考へて見ると、水面衝擊の結

果が魚雷内部の機械に狂ひを生ぜしめて發進時において既に命中精度を低下せしむるの理は明らかである。この邊が航空機に自信を有するドイツ海軍すら魚雷落射について一日の短を嘆じつゝあるゆゑんである。

英國海軍の戰前に公表した所によると、海面上三十米以上の位置から落射して、時速百三十海里馳走の魚雷に成功したと傳へられてゐる。襲撃隊の被撃墜率は遠距離高々度なる程小であるから、これに耐える堅牢な魚雷を作るといふ事も造兵者側の一任務であるが、魚雷の照準機構、射程の大小が馳走速力の大小に逆比例すること、航走中の敵艦なれば避退運動の餘裕を與へること等を考へれば、低空肉薄は空中魚雷戰の理想でなければならぬ。

元來近代戰艦は魚雷を一發や二發艦腹に受けても、浸水を一局部にとゞめ全艦覆没の如きは豫期すべくもないこと、言はれた程の水中防禦完備の不沈艦であるべきものである。例へばバルヂと稱する水線下艦腹に裝備した鋼鐵の中空のふくらみは魚雷による破孔を船體外板以外の外廓にとゞまらしめるものである。二重底内に形成する防水區隔の數百室は各々浸水を一局部にとゞめ數發乃至數十發の魚雷命中にも損傷位置によつては、沈没を顧念するに足らぬものとされてゐる

のである。

然しながら若し構成極めて良好なる魚雷の發射が連続一氣に行はれて敵艦の彈火藥庫附近と覺しき外敵を破り、つゞく魚雷は内敵を破るといふ風に發射されたならば、敵艦は忽ち黒褐の煙を天に冲して一分の後には沈没する事必定である。

かゝる理想を完行するには襲撃隊の物心二つながらの優位はもとより奇襲を成功に導く爲には天の時、地の利を精細大膽に考慮した進發發令者にも連帶の責任と光榮を持つものである。今次戦争の戦闘方式について未發表の事項を説述することは禁止されてゐるから此程度において本題を終る。

頽勢敗殘の敵潜水艦すら、殊勝にもわが伊豆沖に行動することが出来た。潜水艦の効力また偉大なりといふべきである。

わが新鋭潜水艦の果敢な神出鬼没の大活躍は米英海軍當局の心膽を寒からしめてゐるが、西南太平洋で最後のあがきを續けてゐる米國潜水艦と確認された一隻が、わが潜水艦の巧妙な攻撃を受けて撃沈された。或る日午後ボルネオ北方水域でわが潜水艦が哨戒中、海上を游弋中

の敵潜水艦を發見し、直に潜航しながら接近してよく見ると正しく海上ゲリラ戦を企てつゝある敵潜水艦であつた。そこで背後から迂回して潜航の敵潜水艦と並行となるや、急速に浮び上りすかさず砲撃を浴びせ、敵が遁走するすきもあらばこそ、一瞬間に撃沈、こゝに戦史上かつてない潜水艦對潜水艦の砲戦といふ。わが海軍ならではの爲し得ない戦果を擧げたのである。

(二六〇二年一月五日〇〇基地特電)

以上は潜水艦が水面上において一騎打を行つた珍らしい戦例であるが、私は十數年前に潜水艦専門の或る造船官に質問をしたことがある。それは潜水艦が水中で敵の潜水艦を探し、深海中で萬字巴と相搏つやうになつたならば海戦の様相は大に變るだらうといふことであつた。ところが潜水艦は海中で目が見えないから海中では、机龍之助たらざるを得ない。深海の照明が大きな問題である。

また潜水艦の運動性は水の抵抗を全面的にうけて、比較的小さな縦舵横舵で旋回、昇降するものである。その上スピードは水上艦隊に辛うじて隨伴することに適せしめようとする工夫の道程にある位であるから、この時期において戦闘機の空中戦のやうな運動を考へることは尙早だとい

ふ考へ方に了つたことがあつた。然しこれは科學の常識から見て必ず之を實現せしめる方向に進んでゆくべきものだと思はれる。

前歐洲大戰ではUボートの神出鬼没な攻撃に對する哨戒の爲に、英國は敵潜一隻に對し平均三十隻累計三千隻の艦艇を動かして辛うじて長期戦に誘導することが出来た。大艦隊の優越を保持しながら、北海の制海權の歸屬は五里霧中の間に終始して、大艦隊は釘づけとなり「通商破壊戦のみが行はれる謎の海」を作つたに過ぎないといふ状態に満足した。ドイツ本土上陸作戦なんていふことは夢にも考へたことなく、米國の壓倒的な海上部隊の援助で飢餓戦から思想戦に辛うじて持つて行くことが出来たのであつた。故にドイツの海軍士官はドイツ帝國は戦争に負けたのではないと今でも言つてゐる。若し英國側の潜水艦とUボートが水中權を争ふ時代であつたら、戦局は大に異つてゐたらうと想像できる。

それから二十幾年の今日では「一呎の領土も占據出来ない飛行機の優越が何だ」と言つて不沈艦至上主義を墨守してゐた英國海軍は國土の分身である大小艦艇を空襲の爲次々に失ひつゝある。陸戦においても航空部隊の役割は進攻戦線の前路空爆や落下傘部隊、空輸部隊の占據豫備行

動の可能性が現出されて來た。潜水艦の使用法も敵艦隊を釘づけにする事、通商破壊戦のみに役立つこと以上に、もつと海上の決戦に對して積極的な役割を演ずることが出来る、またすべきだといふことを紙の上では私も兼ねて論じた所であるが、今やわが海軍によつてそれが電撃的に實行されつゝある。しかもその一部は極めて小數の乗員によつて操縦される袖珍潜航艇の活躍、それは潜航艇自體の行動力のみ依存するものでなく、またこの國人でも同様の戦果を収め得べきものでないことは勿論であるが、撃沈撃破手段の世界的驚異が現はれて來たと言つて差支ない。劃期的な事件である。

今潜水艦の一騎打ニユースを見て進攻敵潜の撃滅戦にもまたゲリラ戦を企圖する潜水艦群に對しても、われに萬全の方策が樹立されてゐるに相違ないといふことの暗示に打たれる。潜水艦の水中格闘も早晚實現されるものと想像することを禁じ得ない。是れが實現する頃の魚雷は三十疋爆雷（長さ一尺位）を發射する發射管を潜水艦の艦首や胴體にハリネズミの如く裝備されるであらう。こんな潜水艦と潜水艦が深海において、龍攘虎鬪する有様は想像するだけにけなげである。現在を以て將來を推せば水中闘争においても日本人は必ず世界第一であるであらう。

三、ソロモン海戦以後

□

神武天皇紀元第二六〇二年（西曆一九四二年）春三月十日、わが會敵必勝の海軍部隊はソロモン群島の北端ブカ島のクイン・カロラ灣に敵前上陸を敢行して全群島三十餘の島々の死命を制した。此日は昔日故大山元帥麾下の兵勇が奉天城を占領した記念すべき日にも當つてゐる。

最早ソロモンの島名は三尺の童子にも注意を呼び、錢湯床屋の話題においても認識は日と共に深められ、世紀の大格闘、日米二大陸海強國の一大決戦場であることが明白となつた。

然しながら作戦進行中の地域における戦闘經過はその真相詳細を公表するには二つの大なる困難がある。其の一は當局者として機密擁護の必要が大である事、其の二は遠戦夜戦その他混乱場裡の血闘記録は後日の彼我合戦圖戰闘記録を符合せしめなければ想像推定に基く誤差が多分に含まれざるを得ないことである。今日兩者に基く限られたる資料によつて真相を判断することは頗

る困難なる作業であるから、本稿の如きも既に公表された記録に若干の註解を加へたものでしか有り得ない。

□

本國を遠く離れて洋中に敢在する屬領を維持することは戦時において最も困難を感じる所のものであるが、或重要海面の管制を企圖する國家は、その海面の戦略的地點に地歩を確立しなければならぬ。位置の選擇が適切である所の數個の戰略地點は根據地を形成する。此根據地は本國から見れば第二義的なものであるが、其の特定海面に關する限り第一位的存在である。

陸軍戰略の原則となつてゐる所の「本國を離れた遠隔地に作戦する軍隊は、その作戦地域附近において、本國根據地と同一要件を具有する第二根據地を設定し、而かも確實なる交通安全線に依つて兩地を連絡しなければならぬ」といふことも同一論據である。たゞ海上における確實安全な交通線といふものは即ち海軍の對敵優勢を意味するものである事、および本國根據地と前進根據地間において殊に左様であるといふことは記憶せらる可きである。

右の如き第二根據地は本國の國境上のそれと同一なる原則によつて構成せられ、その中には防

備港二個あるを至便とする。但しその中の一個に對しては第一級防備港たる設備が要求せられる。これら二港は互に支持し合ふことが出来る程度に接近しあることが要求せられるが、敵をしてその主力艦隊を分割せず、に兩港を確實に監視し得る程度に接近してゐてはならぬ。一八〇三年乃至一八〇五年の間ツォロンを監視してゐたネルソン麾下の英國艦隊はマルタとジブラルタルを前進根據地として使用した。此兩地は艦隊支持の任務を分擔したのみならず、イギリス海峡からレヴァントに至る通商交通線を保護することの目的の爲に相互にその重要性を分擔したのである。往年の日露戦争の場合を例にとつて見ると若しロシア海軍が開戦前において其の全艦隊を東洋に派遣してゐたならば艦隊數量においては日本海軍に對して優位を占めることが出来、旅順と浦鹽との兩根據地を更に活用し得たであらう。

若し海上の戦域が廣大であつて利用せらるべき戦略地點が多數である場合には、その選擇は頗る重要なことである。中央位置に在る地點の威力は、其處から戦域内の各地點即ち分散した地點に到達する手段が容易になる。然しながら其の中軸的地點の戦闘能力が若し全戦域の外縁に到達し得ない時には此地點と本國との間に結ばれる交通線は危険である。

此危険を除去する爲にその國家は制海權を新たに獲得するか、或は既存の制海權を擴大するか、或はまた單に現有の屬領を脅威する敵國の進出を阻止して敵の攻撃力を防禦しなければならぬ。これが作戦の眼目である。

本國から遠い海面において行はれる作戦は一般作戦の特殊な場合に過ぎないものである。即ち戦争目的に對して重要な地點を既に確保してゐる場合、又はいまだこれを保有し得ない場合において同じく攻勢的行動を取り、敵領土の占領或は海面の管制を期することが海上遠征である。たとへ戦争の主目的が守勢であつても、攻勢的動作は此目的を達成する爲に最良の手段である。海上遠征の特殊性は、其の陸軍部隊が、海上に在る間は極めて無力な事である。即ち其の安全性が全然味方海軍の制海權保有に依存してゐることである。即ち陸軍部隊は其の兵力の大小、又は士氣、軍規乃至は訓練の程度如何に拘らず、航海中は到底有効な行動を實施し得ないものである。此期間の危険性と、終始制海權に依存する海上交通線の危険性とは實に海上遠征の最重要問題である。

遠征目的を達成する爲の作戦計畫において決定せられねばならぬものは根據地目標（オブジェ

クチヅ・ポイント) および作戦線の二要素である。

以上は現在米海軍の要職に在る連中にアメリカ海軍大學で前後二十年間にわたり海軍戦略を講じ、一九一四年に死んだマハンが述べた作戦理論の要約である。

航空兵力の効果が今日の如く實證されなかつた時代の述作であるが現在においても右理論は海戦の常識として別に大なる異端邪説であると認むべきものは發見し難い。

ソロモン諸島乃至附近の海面がアメリカ海軍の現下の作戦上如何なるポイントであるかそれは太平洋圖を開いて一見すれば雄辯に物語るであらう。現在進められつゝある日米海軍の作戦上重要地點である特定海面の争奪戦について敵の意圖、われの意圖に關して餘り深く立ち入つて論ずることは今日許されない時期に在る、けれども右の如き理論に照らしましたソロモン諸島の位置を考へるならばソロモン海戦の性格は概ね分明である。

□

米國のスポークス・マンは自ら「守勢から攻勢へ」と呼び、ガタルカナル島の完全攻略はやがて日本本土に押し寄せる米國對日攻勢の第一歩だと宣傳してゐる。米國側の見解を以てすれば、

今日若しガタルカナル島を米國が手離すことになれば米本土から濠洲へ、濠洲から印度へ、印度からイランへ、イランからソ聯へ、また印度から重慶への補給路の根幹が根本的に動搖を來たすことになる。米國の補給路は米本土からハワイを経由してフィジー群島のスヴァに至り、それからニューカレドニアの首府ヌメア港を経て濠洲のブリスベン、シドニー、メルボルンに至る線である。ガダルカナル島を基點としてこれら米軍の補給路上の各基地との距離を見ると、スヴァまで二千四百軒、ニューヘブライズ群島のエスピリツ・サント島まで八百八十軒、ヌメアまで千七百二十軒、ブリスベンまで二千六百軒である。若しもガダルカナルが完全に日本軍の攻略する所となれば米國の補給路の根幹が非常に脅威にさらされるばかりでなく日本軍によるニュー・ヘブライズ諸島、ニューカレドニア島進攻の危険も迫ることになる。これは南太平洋戦争における米國の致命的打撃である。此意味から米國はガダルカナル島をあくまで守り通さねばならぬと現在言つてゐる。

一方米國軍事専門家の見解によれば戦争第二年度における米國の戦略的立場に對して次の如き弱點があることを自認してゐる。即ち○ガダルカナル島を中心とするソロモン海戦において日米

の補給路の距離を見ると日本の補給基地とガダルカナルとの距離は米國の補給基地からの距離に比べて遙かに近い。○日本は南太平洋戦争において海軍勢力の全部を使用し得る地位に在るのに對し、米國は常に海軍勢力の一部を大西洋に振り向ける必要に迫られてゐる。○航空母艦と相並んで巡洋艦と驅逐艦および驅逐艦勢力は今後における南太平洋戦争繼續の上に最小限度のものが残されてゐるに過ぎない。

而して米國が將來に希望をつないでゐる所は艦船飛行機の新造能力に關する優越感に基くものである。

米國海軍の太平洋反撃作戰を回顧して見ると昭和十七年八月上旬を期してアリュエーション、ギルバート、ソロモン方面への出撃であつた。このうち敵が主力を傾倒したのはソロモン群島方面であつた。第一次および第二次ソロモン海戦以來二ヶ月以上にわたつてわが海軍は沈黙を守つた。われは次に來るべき海戦に對して更に一段の戦果を擧げることを楽しみに沈黙してゐたのであつたが、敵は此沈黙を以てわが海軍に甚大なる損害を與へたものとして宣傳すると同時に、戰

勢を挽回する目的を以て根幹的兵力即ち主力艦、航空母艦、大小巡洋艦、および水雷戦隊を擧げてこの方面に注ぎ込んで來たのであつた。敵は敵艦隊最高指揮官ゴムリーをハルゼーに改め、海上兵力の集中を行ひ、十月二十六日を以て出撃を決行したのである。かくて、サンタクルーズ諸島方面北方洋上で激戦が展開された。これが「南太平洋海戦」である。翌十月廿七日は米國の「海軍記念日」(米國海軍建設の恩人故ルーズベルトの誕生日)であつて先振れ鳴物入りの進撃であつたがこれも惨敗に終つた。

次に十一月十二日から十四日までになつて激戦が此方面に展開された。これが「第三次ソロモン海戦」である。

敵は再三の敗戦にも懲りることなく更に此方面に對してしぶとい反撃戦を試みなければならぬ運命を持つてゐた。

これを察知したわが艦隊は猛然敵陣に突入するの策に出た。これが十一月三十日、ガダルカナル附近において行はれた「ルンガ沖夜戦」であつた。

八月七日の第一次「ソロモン海戦」以來約四ヶ月の間に此方面において、敵の戦艦四隻、航空

母艦八隻のほか、各種艦艇、輸送船を合はせて百三十五隻を撃沈撃破し、飛行機八百五十機以上を撃墜撃破した。

公表せられた戦況によれば「第三次ソロモン海戦」の十四日の夜戦において大破したわが戦艦は、戦艦を中心とする敵の有力部隊に遭遇するや、猛然先制攻撃の集中弾によつて最初に現はれた敵戦艦を撃沈し、さらに攻撃の中心となつて奮戦をつゞけ、他の敵戦艦をも大破せしめたのであるが、敵戦艦群のわれに對する集中攻撃の爲に大破しやむなく戦列を離れたといふが如き前例稀なる取圍であつた。

残つてゐる一つの問題は米國が撃沈、大破、撃墜、炎上を蒙つた艦艇航空機の補充能力の作戰に及ぼす影響である。

開戦當初米國海軍が保有してゐた兵力は、彼の公表した所によると戦艦十七隻、航空母艦七隻、特設航空母艦二隻、巡洋艦三十七隻、驅逐艦百八十五隻、潜水艦百十八隻であつた。それが開戦後約一年間で戦艦九隻、航空母艦十隻、巡洋艦二十九隻、驅逐艦約五十隻を失つて仕舞つ

た。ところが此間に米國は中小破艦艇の修理と建艦工程を促進して戦力挽回を計つて來た。外國新聞等の所報を綜合して見ると開戦後戦艦四隻、防空巡洋艦六隻、其の他航空母艦、特設航空母艦が十隻以上竣工したと傳へられ、航空機も月産四千機を突破すると稱してゐる。但し此建艦や飛行機製作はわが國においても其の具體的な状況は發表されてゐないが、着々と新造されてゐることが公表されてゐる次第であるから米國海軍が撃沈に次ぐ撃沈を蒙りながら建艦競争で頽勢を轉倒せしめやうとあせつてもそれが容易の業でないことは明かである。前に述べた如く特定重要地點を確保する爲には其の地點と本國乃至は中軸的前進基地と連結する線を守らねばならぬことが海上作戰の原則であるから其の線が長ければ長い程多數の艦艇を行動せしめなければならぬ。海戦に負けながら此線を延長せしめやうとすることは明白な不合理である。海戦に負けて艦艇を喪失する程度に従つてその線を短縮して行くことは頗る合理的であるがこれは敗退である。

前大戦には陸戦においても海戦においても一種共通なる性格があつた。それは膠着状態といふ文字で表現された。太平洋戦争には膠着状態を見ない。外電所報によればアルゼンチンのゴーム

ス陸軍大佐は「何故に日本がガダルカナルの水域に米國艦隊の出勤を知らずながら大輸送船團を繰り返し執拗に送つたのか。それは日本の爲だからだ。國の爲敵と同じ程度の損害を蒙ることはあへて日本人の願慮するほどの問題ではないのだ。即ち敵艦隊の破壊、こゝに日本の作戦の本質がある。しからばソロモンは上述の見地から果してどんな役目を果してゐるのか。端的にいへば作戦上餌の役目を果してゐるに過ぎない。米國海軍はそこで奇蹟を實現せんと狂奔する。日本は失はれた米國の威信をソロモンの餌で引き寄せて不眠不休で米國艦隊を粉砕してゐる。これが日本の戦略だ。米國に新艦が出來れば出來るほど日本の軍略にひき搔き廻はされるだけだ。失墜した威信と、生命を捧げた愛國精神との戦ひがソロモン海戦であり、今後またさうであると思ふが「確信する」と評してゐる。この評の或部分の當否を更に批評すべきはその時期でないと思ふが誰が見ても膠着状態に陥つてゐないことは事實であらう。

飛行機の攻撃威力が顯著な發達を遂げた今日前進基地の争奪の重要性が増して來たことは明白な事實である。即ち此種の目的に對する「點」は昔日の燃料補給その他類似の目的の用に供せられた「點」とは大なる差異がある。然るに此航空基地たる「點」と補給基地乃至本國を結ぶ「線」

は概ね昔日の線に近い。その「點」の防備或は確保手段といふものも概ね昔日の面影と要求を残してゐる。こゝに新しい海戦の性格が出發してゐるのではないかと思はれる事實は屢々、經驗した所である。此の「點」を争奪する爲に或は確保する爲に、或は活用する爲に「線」上に航空母艦或は航空集團、或は所謂機動部隊が出現するといふことは當然な理由が多分に存在するやうに思はれる。航空母艦が本格的に出現したのは前大戦直後であるが、その搭載飛行機の重大任務は艦隊に隨伴して偵察を行ふ事であつた。航空母艦が動く基地と言はれ、航空基地が動かぬ航空母艦と稱せられる場合があるけれども兵術上の性格は必ずしも同種類のものではない。われわれが米國海軍の渡洋作戦の新着想として聞かされた輪型陣の中の航空母艦は進航前路の偵察機と決戦期の制空權獲得の爲の航空兵力を運搬する目的のものであつたやうである。今日若し米國海軍に輪型陣なるものがありとすれば航空母艦に關する限り趣を異にしてゐるものであらうと思はれる。主力艦の數と航空母艦の數との對比が往年と異つて來たらうと思はれる。航空母艦の新しい用法、巧妙なる驅使、周到なる護衛といふ問題は今後愈々進歩すべき新しい課題ではないかと思はれる。矢繼早に航空母艦を撃沈大破せられた米國海軍としては殊に此問題について考へさせられ

る點が多いのでなからうかと思はれる。

「エセックス」、「インデペンデンス」、「プリストン」、「レキシントン」、といふやうな同型類の米國航空母艦は着々完成竣工するやうにも傳へられてゐるが、航空母艦だけで作戦行動が不可能であることは不沈航空母艦たる航空基地が海上兵力の支援なくして存立し得ないのと略ぼ類似の事情に置かれてある。航空母艦が活動する爲には多數の巡洋艦、驅逐艦が必要である。不沈性を眞に誇り得る戦艦があり得るならば戦艦に伴はれた航空母艦は一段の強みを感じるものと考へて差支あるまい。

英國海軍造船局長サー・スタンレー・グッドオールが先年某航空母艦の竣工に當つて次のやうな説明を公表したことがある。「英國海軍は年來軍艦の排水量を小にし、建造費を減少することに努力して來た。新航空母艦はそれが實現されたのである。備砲は四・五吋砲十六門を主とし、仰角も俯角も充分大きくして、二聯装八基に改め、舷側高所にスポンソン（壘型張出砲甲板）を裝備して射撃角度を廣くし、波浪の飛沫を避けるやうに計畫されてある。その他ポンポン砲四

基、高角機銃二十門、禮砲用小口径砲四門を持つ。

甲板も舷側も充分に防禦せられ、水線下の防禦には改良型バルヂを廣い範圍に設け、内部は更に幾多の防水區劃に仕切られてある。

飛行甲板は船體に強度を與へる爲に大切な要素である。上下二段の格納庫はいづれも廣大なスペースであるから、この外壁と甲板とは充分な強度を以て下方の船體と連結されてゐる。

格納庫と飛行甲板との間には飛行機を昇降させるエレヴェーターが三ヶ所に設けられ、その各は二段のプラットフォームを備へ、六臺の水壓機によつて作動されてゐる。

格納庫は火氣に對して最も危険であるから數室に仕切られ、防火鐵壁が、ローラー・ブラインド式に電氣によつて開閉される。格納庫内には強力な消火ポンプ、消火劑噴霧裝置通風換氣裝置等が完備してゐる。

以上は新式航空母艦の様相を髣髴たらしめるものがあるがこの型の航空母艦も既に撃沈されたものがあつて眞價は試験済である。

米國がいそぎあわてる場合は別であるが若し腰を据えて最新式航空母艦を造る場合には右のや

うななまやさしいものでなく新機軸を案出するであらうと思はれる。建造費を節約する努力が必要でない場合にはなほ更のことである。然しながら空母戦艦とも稱すべき性質の航空母艦が出現し得るかといふことは大に研究の餘地が残されてゐる。

航空母艦は脆弱性を持たねばならぬ事情が多分にある。何故に航空母艦は造船學上脆弱性を持つことに甘んじなければならぬかと言ふと、航空母艦は出来るだけ澤山な飛行機を格納すべき格納庫を用意することが本來の面目であるからこの爲に多大の容積を必要とする。また發艦着艦用の滑走甲板はすべて艦の上部にあるからこれに多大な重量を與へて敵の攻撃を防禦することは普通のやり方では艦の安定と兩立しない問題である。また高速が要求されるからその方に重量が奪はれるのである。従來の航空母艦はその防禦力或は不沈性において巡洋艦に比べても大きな顔が出来ないといふ状態であつた。

所謂航母集團なるものは若干隻の航空母艦を中核として、この脆弱性あるものを護衛推進する爲に若干の巡洋艦、驅逐艦を随伴したものに名づけられたものである。或る場合には戦艦が航空母艦をつれた形の航母集團もあつたやうである。此種の所謂機動部隊が相手の虚を衝いてゲリラ

戦を試みるといふことは一がいに突飛な構想だと斷ずることは出来ないが、相手が如何なる種類の兵力でも必要に應じて繰り出し得る立場に在つて待ち構えてゐる海域に航空母艦を侵入させるといふことは正常なる戦法ではない。此種の戦法が若し繼續的に行はれるものとするれば、そこにはわれらの知らない理由が存してゐるのであらう。

□
ソロモン方面の海戦が決戦の連続であるとも稱せられてゐる。これは意氣込から鬼たならばそれに相違ないものであらう。

米國海軍は此方面において本格的な一大決戦を企圖するか或は早めに諦めて立ち去るか此二途の中一途を選ぶことは理論的にはありさうな段階のやうに思はれる。

四、潜水艦上陸作戦

七〇

今から十七八年前、ハワイ上陸作戦の能否が、アメリカ軍部に話題の華を咲かせてゐた頃、同地の科學雜誌「サイエンティフィック・アメリカン」に潜水艦の隱密性を利用した敵前上陸法の通俗論文といふか夢物語といふか想像の挿繪入りで出たことがある。その細いことは忘れたが椰子の生へた波打際に潜水艦が浮いてゐて、豆タンクを陸上に向かつて吐き出してゐる光景であつた。

これは面白い思ひつきであるが、面白いといふことにも様様な定義がある。現實とかけ離れてゐるために奇想天外な點に感嘆する場合もあれば、實現一步前の思ひつきであるが故に注意を惹く場合もある。戦争本然の精神に觸れてゐない遊戯的或は恫喝的な意味を持つために笑を含んだ面白さもある。

兵は國の大事、死生存亡の別れ道であるから察せざるべからずと支那の古人さへ言つてゐる。

面白がる性質のものではない。

然しながら、近くは一九四〇年初夏のフランクス地方に行はれたドイツ軍の大殺陣で飛行機に角笛を装置して騒音で敵陣を攪亂した物語の如きは近世の出來事とも思はれぬ位にユーモアを感じさせる。騒音戦法は支那で大昔やつて以來はじめてだといふことである。

古い話では大楠公の千早城も、さる事ながら近代平和主義の聖都ジュネーブにも次のやうな昔話が残つてゐて、今日でも毎年十二月の中頃三日間を鍋祭（マルミットの日）といふ記念日を設けて古人の武勇を偲ぶよすがとしてゐる。チョコレートで作つた大きな鍋形に菓子を入れて小供達を喜ばせる催しである。何故鍋がジュネーブの町に因縁が深いかといふと、昔ジュネーブが獨立の土侯國であつた時代に、隣國の敵、サボアの城主がジュネーブの城に奇襲を企てた。夜明け方に梯子を城壁にかけてサボア軍は登りかけた。城中のつはものは皆まだ眠つてゐた。早めに起きて炊事をはじめてゐた一人の婆さんのみがこの危急を發見して取りあへず鍋の中の熱湯を攀ち上る敵兵に注いでゐる間に城兵の戦備が整つたので見事に敵襲を撃退することが出来た。鍋もまた兵器なりといふので昔を忘れぬ鍋祭が小供の心を沸き立たせるのである。

火藥時代以前の攻城野戦には渡河點と城壁突破が勝敗分岐の重大時機であつた。今でもさうであるが、現代では敵國を遠く海のかなたに求める戦争が多くなつたので所謂敵前上陸、奇襲上陸が先づ第一の難關となつた。

渡河點、城壁の阻止線、上陸地點が何故難關となるかといふと、これは侵入軍の戦闘能力が一時低下停頓するから比較的劣弱な守兵によつても阻止される場合が多いからであるといふことは説明するまでもなく明かなことである。況や強兵の守りを突破するには並大抵の工夫では齒が立たないのが當然である。

カナダ軍と英軍を渡海させてジエップに上陸させるチャーチルの作戦はドイツ軍によつて僅かに九時間の後壊滅せしめられた。「軍事的に愚劣な人間のやる作戦は豫想することが困難だ」とヒットラー總統は、此種の申譯的攻勢を笑つた。「必要地點は必ずこれを確保する。必要な地點に對しては、斷乎攻撃を加へる」といふことはドイツの作戦であるのみならず戦術者の理想である。然しながらその必要を充たす方策が有ると無いとで狂人と區別されるとナポレオンも言つてゐる。ナポレオンはいつも前進命令を出す前に、この戦闘は勝てる見込があるかどうかと考へた

といふことである。そのナポレオンですら英國の海軍力を甘く見てエジプト奇襲を企てた。これが千慮の一失として千萬言の批評を後世に残した。

ヒットラー總統が告白したわけではないが陸路千軒の敵地に突入するは易く海路四十軒のドイヴァーを渡るは難いといふ事實は現前の問題である。

楠流の軍學は東郷元帥にも終生の研究對象に上つた深遠なる戦争哲理であるが、水戦を論じた部分は甚だ稀である。これは楠氏の指導した作戦地域が、水に縁が薄かつた點にも由る。楠家傳七卷之書第四卷に船軍の法といふ一章がある。その一節に「異國には渡海多き故に船軍ありと雖も本朝には船軍すべき地はあらず。四國九國の海にて先代に合戦ありしといへども皆愚將の故なり。敵、船に乗らば味方は陸にあつて戦ふべし、必ず船にて戦ふことなかれ。敵船に乗らば、海に漂はせよ。揚がらんとほつせば疾く之を撃つべし。敵船にて漂ひ亂るゝに對し吾れ法を以てすれば何ぞ敵を亡ぼさざらんや。敵をば船によらしめて味方は陸にある如く謀れ。是れ第一の秘術なり。故に常に船をも用ひてこれを敵に誇示せよ。心中に之を用ふべからず。人は本來土に居生す。何ぞ海上に居ることを要せんや。若し海上に流浪する時は假令船軍の妙術を知るといへども

益あるべからざるものなり」と説いてある。

湊川の一戦は賊徒が徒らに海上に漂ひ疲れるにはあまりに優勢であつた。彼等が敵前上陸に成功した後における楠氏の心事は尋常一様の作戰理論を超越した悲壯なものであつた。史實が傳へる所によれば此戦闘經過は楠氏が早くより豫見した所であり、一武將の如何ともすることの出来なかつた天下の大勢であつた。故に湊川の敗北は楠氏船軍の法に誤つた指導原理があつたからだといふことは皮相の觀に過ぎる。近代においては海上の兵備が進んでゐるから楠氏の船軍思想を其のまゝあてはめることは出来ないが、上陸軍の作戰を不可能ならしめる點が最後の線である點は今以て楠氏の兵術思想に生命を感じしめる。前大戰では戦局の全面を通じて雙方の海軍作戰は實のところ海上に漂つただけであつた。機械水雷と潜水艦が異常な發達を遂げた割合に之に對抗する工夫が無かつたから、單に兵力の大小懸隔によつて敵本土に殺到することを斷念させたのである。もう一つは陸戰の様相が戦前に考へられてゐたよりも防禦の抵抗力が攻撃性を啞然たらしめたことである。これは陸戰兵器進歩の事情によるものであつて、「西部戦線異常なし」の原因はこゝに在つた。結局通商破壊戰による飢餓作戰に望みを繋いで制海の價值が閑却された。こ

れはドイツの海軍力が然らしめたとも言へよう。またドイツ陸軍の強精に信頼した結果であると思ふことも出来る。その内にアメリカが參戰して老大な海軍が大西洋を渡り、百萬の陸軍が上陸したので大勢が決して仕舞つた。渡海の敵を海に漂はすことが出来なかつたためである。

侵入軍が壓倒的な場合は渡海も渡河も問題ではない。然しそんな破目に陥るか陥らせないかといふことは戰略的な問題に屬する。作戰の研究としては如何にして敵本土に突入するかを解決することが戦争解決の鍵である。海を隔てる國家間の戦争では上陸作戰の見込が立つか立たぬかで大勢が定まるものである。されば上陸作戰は前大戰以後特別に列國は研究を進めて來たものゝやうであるが非常に秘密が保たれてゐるからその理論も方法論も參考とすべき文献を世界に求めたところ得難いのが當然である。

大東亞戦争勃發以前にアメリカン・マーキュリーといふ通俗雑誌にアメリカの陸軍少佐で評論家であるエリオットといふ者が「日米戦争不可能論」(インボッシブル・ウワー・ウイズ・ジャパン)を書いたことがある。その結論は甚だ悲觀的なものであり、戦争なるものゝ根本理念において、われらはどうかと思はれる論策であるが、その一部に次のやうな意味が記されてゐる。

「トラック島は直徑三十五海里の珊瑚礁で大小の島に環り巻かれてゐる。その入口は狭く天恵的
海軍基地である。トラック島はガム島を攻撃するに恰適な地勢に置かれてある。日本はトラック
において相當な抵抗を試みるであらう。一たび米國がトラックに確實な地點を占めた場合戦局は
一轉する。次の一戦は、六五〇海里を距てたガムである。ガム島はミクロネシア諸島中の最良の
島で、防禦的諸設備を行ふに適し、良好なる港灣と飛行場を有してゐる。日本の横須賀から僅か
に千三百五十海里であり、小笠原から八百海里の距離に在る。彼我戦争状態に入ればガム島は直
に日本の完全確保に歸するものであらう。

米國の行ふべきガム島逆襲戦は、攻撃時機の選定に自由を有する日本主力艦隊によつて背後か
らの攻撃を受ける虞れがある。然かも此作戦は最も危険多く、多數の軍隊、船舶、航空機を使用
し、究極には敵前上陸を敢行する必要がある。而かもそれは常に決死的な作業である。が、米國
部隊が一たびガムに到達したならば、日本を屈服させる大芝居の舞臺が出来上つたわけである一
といふ風な次第である。

此種の未來戦記を今更批評する時期でもなく、且現實が現實に既に批判してゐる。然しながら

この筆法で若しも日米未來戦のテーマを進展させて行くならばアメリカの所謂「決死的な作業」
たる敵前上陸が問題の中心となる。

本來上陸作戦なるものは、それが奇襲上陸であらうとも、また敵前強行であらうとも海軍戰略
と陸軍戰略の智謀と、それぞれの戰術的行動を交織した錦繡である。華々しい話であるが、どち
らの絲に缺點があつても忽ちほづれる。こゝに缺點といふのは精神的な缺點のみならず必要にし
て充分なる兵力を分配出来るかどうかの戰略的な問題と現代科學の到着し得た敵前上陸の可能力
が防禦戦を克服し得る程度である。飛行機と潜水艦が協力し得る今日においては錦上更に華であ
ると同時にデリケートさを増した。即ちほづれ易いことスフ以上である。一九四〇年のドイツ側
一大勝利の作戦であつたノルウェーの爭奪戦は、純然たる爭奪戦であつて、防禦陣地の完備した
敵根據地或は敵本土の占領とは趣を異にしてゐる。敵も味方も敵前上陸を決行したものである。
英國海軍は少、強引にその海軍力を利用してノルウェー占領を企てたが、ドイツ海軍空軍は更に
強引に戦つて天目山奪取を完成したものである。海上權を制することなく甚しく劣勢なドイツ海
軍力を以て海外遠征を試みた此の作戦はヒ總統の素人的天才によるものだと評せられチャーチル

はドイツの企ての無謀なることをあざけつてゐたが、結局その方が素人であつた。議會でウンと油を絞られた。ドイツ側の獨創的戦法には劃期的な時代のひらきがあつた。もつとも四月上旬のナルビック附近は天候濛密、雪も降り、飛行機の偵察も思ふにまかせず、山嶽地帯は早いもの勝ちであるといふ點等奇襲側に天恵豊かなものであつた。この戦法が世界到る處に隨時行はれると思ふことは如何に勇敢なる軍隊を持つ場合といへども速断であるが、此天恵を利用する爲に周到な準備が行はれた點にドイツの勝因があつたのである。ドイツ側は海軍の劣勢を補ふために空軍を擴張した。落下傘部隊を訓練し、多數の輸送機を急造した。第五列を準備した。遠隔の地に豫め輸送船を配置してゐた。その輸送船は鐵鑛積取船、鯨工船などに變装せしめ、軍隊、軍需品をホルドの中に匿しておいた。これに反して英佛側は全々受身で周章狼狽、照準器のない高射砲を持つて行つたといふやうなわけであつた。

さて、この作戰に潜水艦はどんな風に用ひられたかといふと、ドイツ側には五十六隻用意されてゐたのであるが、約半数は教育の爲に使用してゐたので、此作戰に参加したのは三十隻内外であつた。これらの大多數はフイヨルドの内部に配備されたのであるが、とかく狭まくるしい處で

潜水艦を運用することは困難なもので此方面のものは役に立たなかつた。一部の潜水艦はジェットランドとノルウェーの間、一部はジェットランドとオークネーの間に配備されたが此方面は艦船の往來が少い上に英國艦隊の直衛配備も大分上手になつてゐたのみならず、優秀な水中聽音機を以つて警戒に當つたからドイツ潜水艦のあげた戦果は、巡洋艦一隻、驅逐艦二隻、潜水艦一隻、輸送船多數を撃沈したといふ程度のものであつた。然し偵察には極めて重要な任務を果した。

英國側の潜水艦はカテガット海峡、スカゲラック海峡方面の交通破壊に飛行機と協力して使用された。水上艦艇は全く用ひられなかつた。此方面に用ひられた英國潜水艦の数は明かでないが大體して極力交通破壊に従事せしめられたものと想像される。これらの潜水艦と飛行機ならびに機雷によつてドイツ側輸送船は三十隻撃沈されたと英國では發表した。ドイツ側の發表では總計九隻だと發表した。相當の効果があつたものと思はれる。

ドイツの上陸作戰の特色は輸送船に機械化部隊、軍需品を搭載して先發させた大冒險がその一つである。後續部隊は軍艦驅逐艦に搭乘してあとから出發した。ナルビック部隊は千百海里を二

日間で渡つた。平均時速二十三海里で海上の電撃進軍に属する。落下傘部隊と空輸部隊で飛行場を占領して仕舞つたことも特色の一つである。空輸には七百機位使用した。空輸した總兵力は五萬人程で、三日間に三萬人空輸の記録を作つた。海上輸送の兵力は八萬五千であつた。空輸機一臺につき三十名乃至五十名の武装兵を搭載したといふことである。

聯合軍の方は最初巡洋艦と駆逐艦で陸戦隊を上陸させた。二日程おくられて陸兵一旅團を輸送船で持つて來たのであるが、良い港がドイツ軍に占領されたあとであつたからタンクや大砲を揚げるのに大困難を感じた。それにドイツ飛行機の爆撃が猛烈であつたから、たとへ人員のみが上陸に成功しても兵器軍需品の陸揚げが困難であつたから、後続部隊を送ることは断念せざるを得なかつた。こんなわけでノルウェー作戦は雙方が馳けつけたのであるが事實はドイツの占據地點に聯合軍が侵入を企てたといふ形になつて仕舞つた。そのために英國の優勢な海軍力はたとへドイツ側の水上艦艇ならびに輸送船に大打撃を與へ得たとしても作戦目標たるノルウェー上陸については徒に海に漂はされたといふことになる。

飛行機が軍用として出現の頭初は偵察の任務であつた。それが陸兵の揚陸や野戦部隊の推進に

偉大なる効果あるものとなつたのは今度の大戰がはじまつてからの事である。

潜水艦は魚雷發射と或艦種はその他に特殊の強みを持つてゐることは周知の通りである。通商破壊戦に偉功のある點も周知の事である。この艦種が上陸作戦に如何なる役割をつとめるかを考へることが本稿最終の目的である。飛行機の歩んだ徑路を願れば潜水艦が如何なる形式で上陸作戦に参加しても不思議とするに足らない。

古代の海軍は海上權の爭奪といふものを考へなかつた。侵入軍の海軍は陸兵輸送が目的であり、防禦軍の海軍は灣内或は敵輸送船隊の通過すべき海峡、岬角に待ち伏せしてその進航路を遮ることが目的であつた。最強の武器は衝角戰術で、それが効を奏しない時は敵艦に飛び込んで敵の權を奪ふことであつた。敵が上陸の目的を達した場合にはこの上陸地點において敵の艦船を焼き棄て、敵軍の退路を斷つことであつた。その次に現はれたのが海上の決戦によつて敵海軍力を撃滅した後安全海面を輸送船隊が渡るといふ原則であつた。この原則は今日亡びたとは言ひ難いが、前大戰以來潜水艦の能力によつて一大決戦によつて海上の安全が得られるといふわけに行かなくなつた。かゝる時代において潜水艦は如何なる海面においても敵の有力部隊が発見するま

では局部的時限的に制海權獲得と同じ効力を發揮することが出来るのである。故に潜水艦によつて大兵團が敵の豫期せざる地點に上陸するといふことは甚だ結構なことであるが飛行機による空輸法とは自ら趣を異にしてゐることを考へねばならぬ。

陸兵が渡海して目的地を占據し、陸兵本來の能力を發揮し得るまでには海上においては敵の海軍力に對し、上陸地點においては敵の海軍と陸軍に對して一時的な弱點を暴露するものであるからむづかしいのである。上陸時における侵入軍の不利を補ふ要素は空輸の場合はそのスピードに依存するのであるが海上輸送においては海陸の兵力において絶對優勢なる點に依存しなければならぬものである。潜水艦によつて海上又は海中輸送を企てる場合には途中の弱點暴露は合理的に解消されるものであるが敵前上陸となれば一舉に大兵團が着岸しなければならぬ。

假に十萬の陸兵を一舉に輸送する爲に幾隻の潜水艦が必要であるかといふことを考へれば相當ぜいたくと言つては語弊を感じるが多數の特別潜水艦が用意されるといふことが前提となる。

然しながら敵前上陸を決行するに當つては潜水艦の隱密性は放棄するのであるからやはりこれはぜいたく過ぎる戰備と評する外ない。

水中戰艦の思想は陸兵輸送によつて生れたものではないが、此種のもものが實現すれば陸兵の海中輸送について新しい暗示を得られるかも知れぬ。水中戰艦の目的とする所は敵に接近して水中攻撃を行ふといふが如きは問題でない。水中戰艦本來の使命は適當な戰機を捕へて水上に浮び出で、敵と戰鬥を交へ、優勢なる敵に出會つたならば潜沒してこれを避けるといふ思ひつきである。水中戰艦は潜航性を保有せんがために戰鬥力に充て得る重量をこの方面に振り向けなければならぬ。潜航準備や浮き上り後の合戰準備に多大の時間と注意努力とを必要とする上に操縦上の問題もあるから一躍水上主力艦以上のものが出現するといふことは考へられぬ。まづ巡洋艦以下に對しては堂々と戰鬥が出来るが、戰艦に出會つたら潜沒回避するといふ程度のもものが最初に現はれるものかと思はれる。このやうな艦種が實現する場合に重要問題は戰鬥力に相應した船體強度を如何にして與へ得るかといふことである。薄い鋼板で覆はれた燃料タンク（船體内殼と外殼の中間）に命中した一發の彈丸は鋼板を貫徹し得ない場合でも燃料の漏洩箇所を生ぜしめることが出来る。その部分から流れ出る油は海面に浮ぶからして敵に所在を知らせることゝなる點は普通の潜水艦と異なる所がないであらう。これを防止する爲に内殼外部に燃料タンクを設けることを

廢止すれば航續距離を甚だしく減少して水中戦艦の價値を失ふこととなる。も一つの問題は水中の安定を得るために、艦首上部の装甲重量に相當した大なるバラストを下方に持たねばならないからどの程度の大きさの水中戦艦が如何なる攻撃力、防禦力を持つかといふ如きことは簡單に見當をつけるわけにゆかないが、概観して水中戦艦なるものは敵の制海面においても敵を求めて攻撃し得ることとなるからかゝる艦種に多數の陸兵を搭載し特に機械化部隊、航空部隊を搭載したものが大なる隻數を以て不意に上陸作戦を執行することが出来たならば防衛軍にとつては大なる脅威に相違ない。また此種の潜水艦に護衛される潜水輸送船團ともいふべきものが實現されることも考へられる。

潜水艦の船體は發明頭初には全部厚い鋼板が用ひられ、その横断面は水深に基く壓力に對して最も堅牢なる圓形をなしてゐた。恰も鐵管の前後を尖らせたやうなものであつた。これが單殻式時代である。艦型が増大するに従つて操縦性の要求も起り種々な不便が起るので二重船殻となつた。複殻式時代である。二重船殻の上部に當るところを上部構造物と稱してゐる。

これは水面浮揚の時には甲板の用をなすもので、この二重船殻の中間に、揚錨棧、短艇、氣蓄

器、救難浮標、索具等を句藏してゐる。

斯くの如くして往時「池のドン龜」と形容された潜水艦の外形はやがて普通の船舶に要求されるものと大差ないやうになり、操縦性、速力、耐波性等に一大飛躍を見たのである。

然しながらこの内殻外殻は協力して深海の壓力に耐える性質のものでないから重量の輕減上外殻は薄い鋼板が用ひられてゐる。

潜航中は外殻が水壓の爲に破壊されるから内外殻の間には海水を滿たすやうになつて居り、一部は燃料タンクに充ててゐる。

これは潜水艦構造上のなやみであつて、水上水中推進力を各別箇に裝備しなければならぬ結果としての速力の低劣なることと共に潜水艦の二大特性といふよりも二大弱點である。

即ち潜水艦の強さは潜望鏡のみ水面に露出して敵の水上大型艦船に魚雷を擬する時が一番強いのである。一般生物界の現象を見ても弱いものは速いか隠れる力を以つて對抗してゐる。

潜水艦は海水の被覆を離れては相對的に弱くしてのろいばかりである。

斯くの如き性質の艦種を以て海陸を通じての戰鬥中われに最も弱點の集積する敵前上陸を企て

るといふことについては大なる考慮を要する。

即ち構造上性質上からすれば水上においても、もつと堅牢にして攻撃力の大きなもの、特に對空攻撃力が充實したものでなければならぬ。

戰術的には潜水艦自體の性質に信頼する以外に他の攻撃力、例へば空爆撃機の掃蕩力と緊密なる連繫を以て行はれなければならぬ。従つて戰略的には完全なる空母集團が遠隔ならざる地點に航空基地を持つてゐなければならぬ。

これは潜水艦のみが隱密性を持つてゐてもこれを敵地に推進せしめるには暴露部隊の敢闘が前提であるといふことを意味する。如何に潜水艦を巧妙にやろうとしても敵が知らぬ間に敵地に不敗の陣地を占據するといふやうなことは想像し難い。

たゞ此種の輸送法が完成したらば次のやうな戰術的利益が豫期される。

從來輸送船隊護送艦隊が制海不安定の水域に乗り込んで有力な敵艦隊に出會つた場合、或は敵の空軍に捕捉された場合に、輸送船隊は海戦のソバツエを喰ふ機會の多いことを豫期しなければならぬ。これは程度こそ相異してゐるが制海權を持たぬ海面に商船を獨り歩きさせることに似た

性質を持つものである。

若し輸送船隊が必要な場合水中に避退して海戦が終結してから再び進航をつゞけるといふ寸法になれば護送法による揚陸作戰の一大進歩と言つて差支ない。

但しかゝるデリケートな輸送船隊を作る位ならば用途萬能な軍艦を増建する方がいゝとか、平時貿易に従事出来る尋常一様の商船を多く造つて護送法の研究を進めた方がいゝといふやうな經濟上の問題も當然本問題と關聯を持たねばならぬが、今甲乙兩國が遠隔地に對峙して甲は金と時間にあかして乙の本土上陸を計畫する場合に少しでも冒險分子を削減するためには潜水艦輸送船隊の如きは思ひつかぬものとは斷定出来ない。今日列國の水中聽音装置は異常の發達を遂げたものの如くであるが、潜水艦を水中に追及して格闘する考案は發表されたものが無い。

それは水中で視界を得難いことゝ、水中武器の性質に原因してゐる。

また潜水艦の構造上水中の衝突觸接は彼我共に危險を感じるからである。潜水艦は敵の水上艦艇をして完全な制海を得させぬ唯一の存在であるから將來各種の目的に向つて發展しなければならぬものである。即ち水中戰闘の時代が必ず來るであらう。

恰も偵察のみに用ひられた航空機相互間に空中戦闘法が生じたやうにやがては水中格闘法が確立して空中と水上と水中の敵を完全に掃蕩することが出来るやうになつたならば原則通りに安全な海面を作り出すことが出来る。

敵兵力を海上に漂はせてくたびれるのを待つといふのは歴史の逆行である。

五、護送船團の襲撃法と其の防禦法

□
本題は輸送船團護衛制度（コンヴォイ・システム）に對する攪亂法とそれを仕向けられた時の對策といふ意味である。

第二次世界大戦における海戦の新様相は商船護送が大に組織化されたことと通商破壊戦輸送破壊戦も甚だ組織化されたことである。この現象の因つて来る所は飛行機の發達、潜水艦戰術の發達に在る。潜水艦と飛行機が制海に影響する性質の變化が輸送による戰時輸送を要求する所大であるからである。

マカロフが戰略論を書いた時代には水雷艇が唯一の奇襲部隊であつた此小型海軍兵力が暗夜海明を防禦力として強力なる敵側海軍の存在に關係なく攻撃し得る點を指摘して「敵海軍に水雷艇が無くなる迄は絶對の制海權を得たといふことは出来ない」と論じてゐる。然し此時代には敵の

根據地、前進基地をわが海軍兵力で押へることが出来れば決戦前と雖も海上交通の安全感を或程度得られた。また此安全感を攪亂する爲には相當有力な艦隊を出動せしめなければならず、それを繰り返せば出動艦隊はやがて捕捉撃滅されるといふ状況に在つたのであるから海上交通線の確保といふことは今から見れば甚だ容易であつたのである。

一九四一年秋頃ルーズヴェルトが物々しく誇示した哨戒制度、護送制度はその内容も或程度まで新聞紙上で宣傳されたが、これが眞實としても別に新構想ではない。ルーズヴェルトの立場も、米海軍の作戦もこれを誇示するより外に法がない環境に墜ち込んだまゝのことである。其の後も盛に撃沈されてゐる所を見ると、その護送制度は性格において前大戦時代に比べて面目を一新したものだと言ひ難い。

一九四二年四月九日ルーズヴェルト大統領はバタアン防衛ウェーソライト軍絶望の陸軍省発表をめぐる記者團の質問に對して、

『數週間以前から防衛軍救援は事實上不可能の状態に陥つてゐた。マニラを中心として四圍の海空路は全く日本軍の制壓する所となつてゐた。前米國比島軍司令官マッカーサーがバタアン

を脱出した當時、われわれは彼が舟艇によりバタアンを脱出し得るならば舟艇による救援も可能であらうとの一縷の望をいだいてゐた。其の後日本軍がルソン封鎖を強化したことによつて、その希望をまつたく絶たれて仕舞つた。』

と悲鳴をあげた。理論上脱出の海上交通が可能ならば救援の海上交通も可能なわけであるが、これは士卒のインスピレーションを考へない理論だと思ふ。

米國作戦部は最早行詰つた。然らずとするにはル氏の心性の正常を疑はざるを得ない。ル氏は嘗て(大東亞戦勃發直前)、一九四一年七月一日を期してドイツ及びその同盟國に最後の一撃を與へる軍事行動を起すため、五百萬のつはものを派遣するのだと言つた。一比島の救援に手を焼く海軍を以てこんなことが出来るとするは少々眉つばものである。

海軍の一大決戦をやらすに遠征軍渡海の方法を目下研究中かと思はれる。

□

現前の海上作戦においては船舶の喪失量、護送任務に服する輕快艦艇の消耗量、及び攻撃の立場にある潜水艦の損失量に基いてそれら各々を補給する造船能力、人員の補給訓練の能力からし

て、此勝負の歸趨を看取すべきであるが、近來特に損害公表が一方的の資料に限定されて來たから護送制度の眞價を論ずる材料と致し難い。護送制度は一大進歩をしたことは事實であり、また當然な努力だと思ふ。

船團護衛法の古來の理念、海上輸送を行ふ戰略を説くことは省略するが、現代相を持つに至つた過程は前大戰において英國海軍がドイツ潜水艦の無制限撃沈策に對應する爲に編み出したものである。一九一六年の晩秋、ドイツ潜水艦無制限撃沈作戰實行近きを豫想された時、ロンドンでは軍事委員會において船團護衛法が論議された。

ロイド・ジョージが先づ發言して「ゼリコー長官（英國大艦隊）は外洋における敵潜水艦の行動を阻止する手段について、何か名案をお持ちですか」と言つた。答は「否」であつた。それにつけ加へて「目下英海軍は武装商船を使用してゐるが、武装商船は攻勢的に使用出來ない。船團護衛法は目標を大きなものにするから敵潜に好餌を展示するやうなものとなるから賛成出來ない。海上情報局として要所に警戒船を配置するのは一案だと思ふ。」（これは先頃ルーズヴェルトの案出した哨戒艦制度の同類である。）

ボナー・ローは「一國の軍艦を以て船團を保護することはどうか」と言つた。

オリヴァー軍令部長は「地中海では此方法を實行してゐる。然し同時に二隻以上を護送することはよろしくない。フランスは三隻を護送して其の中の二隻を喪失した」との言に對し、ロイド・ジョージは「軍艦三隻を以て商船十二隻を護送する案はどうか」と言つた。

ゼリコーは之に對し「商船隊は驅逐艦數隻で遮蔽されるやうに緊密な隊形を維持することは困難だ」と言ひ、ランシマンは「噸數の見地から見れば、船團護送法の原則は極めて浪費的である。船團は最劣速船を基準として調節したスピードで運航しなければならぬから、速力において何等利する所がない」と述べた。

この種の問答の結果は潜水艦戰に對抗する方法の各種提案と現有手段を科學的に研究闡明する一部局を海軍本部に新設するといふ純軍政的なものだけであつた。英國海軍らしい態度である。翌十七年一月英國軍令部の發表した意見は、

「船團護送法は確實な通商防禦手段でない。船團の隻數が多い程、潜水艦が攻撃の成果を愈々多く獲得する。守勢的武装を有する商船は船團を作るよりも、單獨航行が安全である。潜水艦

は大船團に對して遠方から魚雷を打ち込めば、どれかに命中する公算がある。速力優秀な商船は敵艦に捕へられる懸念は殆ど無い。敵潜が砲撃の目的で浮揚したらば之を砲撃して潜没を強要し、然る後優速を利用して離脱すればよろしい。」

といふやうなものであつた。

この問題が斯くの如くゴネたのは實行上英海軍に驅逐艦が不足してゐた事が大きな原因であつた。も一つは私的事業に對する國家管理について英官憲の遠慮があつた。

海軍本部は老巧な船長若干を召集し、危険状況を充分に説明した上、意見を求めた。結論は「優秀なる商船士官は既に海軍に轉身して仕舞つた。商船には編隊航行の爲に速力を細かく調節し得る機械装置が備はつてゐない」等の理由で三隻以上の船團航行は効果なしと彼等は主張した。又船團護送には「航海回数が減ずるから運送能力が低下する。船團各船の解列運動中及び解列直後敵襲に極めて暴露する。船團の集合地、解列地點、船團の通過する沿岸航路には猛烈な機雷戦が行はれることを覺悟せねばならぬこと」等を指摘して對策を要する旨進言した。

一九一七年二月首相ロイド・ジョージは對潜審議に對する審議基礎案を提出した。これは二月

一日からドイツが勅令に基いて無制限潜水艦戦を開始し、船舶の喪失高が俄然激増したので、首相は素人であるが、戦争指導の責任者として文珠の智慧を引き出すのが目的であつた。當時行はれてゐた商船保護法（哨戒法）はイギリス諸島沿岸の海面を數個のセクションに區分し一定數の驅逐艦、哨戒艇、四船、掃海艇、對潜作業艇等を配屬せしめ、指探官として一名の海軍將官を置いたものであつた。この効果がかんばしいものでなく、指定航路は敵の偵察組織によつて發見される懸念があつたから、戦略の原則に立脚して敵潜を機雷に封じ込むまで（當時英國は機雷敷設上の施設は時代おくれになつてゐた。その原因は海軍本部が對潜無制限機雷戦を採用しなかつたからである）船團護送法採用に轉向すべきだといふのが提案の骨子であつた。

それから三月四月と研究中々々々で経過した。商船は盛に撃沈された。特にスカンジナビア貿易は大なる脅威を感じた。各提督の意見提出、審議會の開催がつゞいた。四月二十六日に海軍本部對潜水艦作戰課長ダフ少將は船團護衛法實施案をゼリコー大將に出すに至つた。（註米國は四月六日に參戰した。）

海軍本部第一軍事委員たるゼリコー大將は船團護送法以外に窮境脱出の道なしと感じ、四月二

十七日對潛處置覺書を起草した。順序を経て首相に届けられた。

かくして第一回船團護衛は一九一七年五月にジブラルタル、英國間に試行された。護衛艦は特務艦三隻であつた。船團は十六隻を以て一隊を編成し、三列の航行隊形をとつた。船團航行速力は七節以内とし十一節以上の速力を有する商船は編入しなかつた。各船の船橋と機械室には移動電話を特設して占位上の命令傳達に便利なものとした。

各商船には信號送受の爲に海軍豫備團の信號兵一名を乗せた。護衛特務艦の先任艦長（大佐）は輸送指揮官として中央列先頭の船に乗船して船團を率ゐた。此航海では敵潜に出合はず、英國近海では驅逐艦六隻、ドリフター二十四隻等が出迎へて各方面の目的港に向つて護送を分擔し無事に入港した。海軍本部では船團護衛委員會といふものを新設して更に研究を進めた。

六月には八日を周期として出船八船團、入り船八船團を護送する案を樹立した。入り船の集合港は紐育、ハムプトンローズ、ダカール、ジブラルタルの四港、出船の集合港も四港設定した。護衛艦は六隻一隊驅逐隊十四隊即ち八十四隻、巡洋艦若しくは武装護衛船五十二隻を此任務に充てることにした。驅逐艦は潜水艦危険海面内の護衛に當り、その先の洋上若干距離間は巡洋艦又

は武装護衛船に護衛することにした。武装護衛船とは商船に六吋砲を三門乃至四門装備したもので、貨物輸送にも従事したが、離現役の海軍將校一名が船長の外に乗船してゐた。船團が危険海面を航行する時はZ字運動（ジグザグ運動）を行はしめた。これらによつて英國側商船の被撃沈を完全に解消することは出来なかつたがドイツ側の考へた六ヶ月で英國國民を餓死させる作戦は望み薄くなつた。米國海軍の來援、米國が大量の機雷を獨潜行動阻止に使用したことも大なる一因であつた。但し英國側の毎月の船舶喪失高は依然補充能力を超過してゐた。

獨潜は二ヶ月の長期にわたつてアゾレス島附近に出動し南大西洋航路の商船を撃沈脅威するものもあり、英國側は船團護衛制度適用の區域を擴大する必要に迫られ、護衛艦の隻數不足を痛感した。當時百隻に足らぬドイツ潜水艦の警戒に當つた驅逐艦及び小艦艇は併せて三千隻に近いものであつた。

今度の戦争直前に英當局が公表した所によると英國の商船隊は對潜水艦戦に備へる爲造船上の準備はもとより各級船員に對して對潜軍事行動に必要な教育を汎く施し終つたと言つてゐた。

□

現駐日伊國大使館附海軍武官が大西洋で活躍するイタリヤ潜水艦について一九四一年春發表したのを見ると、近代戦における潜水艦の使用法を概ね解説してゐる。船團護送の對抗策としては水中聽音器の改良進歩によつて護送船の護送線を突破する新戦術が前大戰當時既に出來たのであつたが、近代戦における潜水艦の使用は次のやうな様式によつて行はれてゐる。

- 一、新對潜防禦手段に對應して最も適確なる戰術を用ひて通商破壊戦を行ふ。
- 二、敵艦隊侵入阻止の豫定線上で大艦隊の軍艦に對し攻撃を行ふ。
- 三、敵根據地に對し不斷の攻撃待機を行ひつゝ敵艦船の行動を監視し通報の任に當る。
- 四、敵に對して潜水艦搜索の爲多數の水上艦艇の使用を強制し、廣範圍の勞苦、大なる警戒網の展張等の爲敵が奔命に疲れるやう極度に活躍する。

右のやうな計畫を實行する爲に作戰地域は非常に廣大なものとなり現在イタリヤの如きは國外一萬海里の洋上に潜水艦を出してゐる。

戰時の護送船團は平時の通常航路を進まず他の迂回航路を選び敵潜の攻撃策謀線から離れやうとするのみならず屢々航路を變更するものである。故に潜水艦の方では巡航數週間中十數時間づ

つの潜航を反覆して待機すると共に、屢々果敢なる急浮揚を行ひ、或は外洋において長時間の夜間漂泊を行ひ、或は機關を停止して水中聽音器を以て敵船の行動を窺ふこと等によつて敵の新航路を發見し之を明白にした。右の如き、連綿不斷の秩序立つた作業の結果として海流、敵海運の方法及び最も頻繁に通航する航路に關して多數の資料を蒐集した。英國を圍繞する近海封鎖の作戰地域から遙かに遠い大西洋航路を數百海里にわたつて調査することが出來た。數ヶ月の長い經驗に依つて廣漠たる大洋の航路上における敵海運の破壊法に最も適當なる潜水艦の新用法に關して有効なる結論に達した。

以上が伊武官の同國潜水艦に依る通商破壊戦に關する解説の概要である。但し新用法のかんじんの要點に觸れてゐないがこれは筆者においてもどうとも出來ない。潜水艦が相當の期間前進基地から遠い海域において行動し得る方策を得たことは各國が公表してゐる戰果報告によつても推知することが出来る。潜水艦はその速力、運動性その他の點において、まだく改善せられ進歩すべき懸案が多々残されてゐるのであるが、若し潜水艦戦を愛好する國家が特定事情に置かれた敵國に對して使用すれば敵國海軍は廣範圍にわたる奔命に疲れて警戒艦艇の不足を嘆じつゝけな

ければならぬことは前大戦の場合の比でない。今の處、潜水艦戦と抗争する要素は武装商船が浮揚潜水艦を砲撃するか遁入直後に爆雷攻撃を行ふといふやうな消極的攻撃を選ぶ以外には、商船建造補充の能力を進めて危険海面を護衛艦の護衛能力に信頼して或る程度の危険を危険のまゝに乗り切る外に道はないといふ状態に置かれてある。

潜水艦以外の水上艦艇による交通路破壊も今日まで折々行はれて來た。これはなまじ弱小なる護衛艦ではどうにもならぬ代りに、跡をつけてやがて掃滅の運命に陥れることは却つて容易である。

潜水艦による交通路の脅威は將來益々増すであらう。これに對する徹底的な對策は潜水艦を以て潜水艦を追ひ詰めることの出来る科學の時代に完成されるであらう。

六、空母集團奇襲戰

1

わが邦の水軍の古書に「豹陣」「水陣」といふがある。

虎の妻を豹といふ。これを用ゐて敵を誘はゞ、敵侮りて追ひ來るに相違なかるべく、わが思ふ壺に引き寄せて、亭主の虎現はれ忽ち敵を嚙み殺す。これを豹陣虎陣と言ふ。

と説いて居り、また水軍の主戦といふことに對して次の如く定義註解してゐる。

主戦とはわれ亭主となり、かれ客となるの意なり、主戦は客戦と違ひ、兵糧其の他も求め易けれど、戦利を得ざる時は國の存亡にかゝる故に客戦より重し」

現前の日米英戦争においてわが國が亭主であるか否かは解説を要するまでもなく、連日の新聞紙がこれを報じてゐる。われらは甚だ重い戦を戦つてゐることは一億の自覺する所である。これは敵性國家も自覺してゐることである。現代科學の要求する半徑の國防圈に立つて不敗陣を張つ

てゐるわが軍に對して、若し敵軍が萬里の遠征を企てその突破、内部の攪亂を試みた結果、多少の危害を與へるといふことになれば、それは豹が虎に飛びかゝつた場合である。その手段が戰略の常道に合致すると否とに拘らず眞劍なる鬭争であつて侮るべからざるものなることを覺えると同時に、窮餘の一策には必ず脆弱性を持つことに對してわれは自信を以て對處せねばならぬ。

2

現下の戰況は戰爭遂行上の必要から發表が制限されてゐるであらうことは當然想像せしめられる。此の部分的な資料によつて其の陣容を説きその能力を判斷評論することは、當路者はもとより慎むべき重大事であり、われら巷間の研究者、所謂シヴィル・ストラテジスト (Civil Strategist) には現在出來ない相談である。強ひてやれば百害無益の所業となるであらう。従つて本稿は航空母艦の集團襲撃法なるものは如何なる動機によつて生れ、その特性は奈邊にあるか、航空母艦なる艦種が如何なる脆弱性と長所を持つものであるかを検討して大方諸君の日常に參考資料を提供せんとする一個私人の論筆であつて、本題に關し當路者の意見或は述作を絶対に見聞して居らぬものであることは、豫め明言して置く。

3

前大戰においては、日米間に從來唱へられて來た如き所謂進攻作戰なるものは發見することが出來ない。極端に言へば海戦らしい海戦は一つも存在して居らぬ。然しながら航空母艦なるものゝ起源は前大戰であつた。

英國海軍は一九一六年四月に、ドイツの航空母艦がジープルージ (Zebruggen = ベルギー所在) の根據地にゐることを探知した。英國も翌一九一七年一月には航空母艦を持つてゐた。イタリアが英國造船會社に注文した商船アーガスを購入し、長さ五五〇呎幅六八呎の飛行甲板を設けたのが英國海軍航空母艦の第一艦である。これは一九一六年のことであるが、當時航空母艦と稱して實戰に参加したのは商船の一部を改造して臨時的に水上機を搭載し得る程度のものであつた。その目的とした所は海軍飛行機の行動半徑が頗る小さく、洋上を横斷して敵地に達し其の任務を遂行する力が不足であるが故に之を補つて飛行機の行動半徑を艦竿式に延長することであつた。この意味においては今日の著しく發達した航空母艦の目標と少しも變るところが無い。

水上機運搬用として生れた航空母艦は、今日では水上機母艦と稱して航空母艦と區別されてゐ

る。わが海軍が青島戦に使用した航母「若宮」がこの水上機母艦に當り、大正八年（一九一九年）に起工された「鳳翔」は航空母艦の魁である。英國が最初から航空母艦として造つたのは既に沈んだ「ハーミス」（一〇八五〇噸）で一九二四年の竣工である。米國初代の航空母艦は更に弟分で、「ラングレー」は給炭船「チェビター」を改造し、一九二七年頃短い滑走甲板をつけて研究してゐたものである。

一九三〇年のロンドン海軍會議では航空母艦を次の如く定義した。

水上軍艦にして航空機を搭載することを特有專一の目的とし、航空機を其處より出發し、また歸着し得るやう設備せられた艦は排水量の大小を問はず、これを航空母艦といふ。

といふのがそれであつた。従つて搭載機が大陸歸還を豫め計畫する如きは航空母艦本來の用法ではない。軍縮會議御破算の今日ではあるが、現在浮いてゐる艦船は概ね此の協定下に制限を受けて出來たものである。航空母艦は戰艦、巡洋艦、驅逐艦等と共に、華府條約、倫敦條約によつて、その單艦排水量、關係各國の保有量及び備砲口径の制限を受けた。備砲口径は六・一寸を超ゆるを得ず、單艦の基準排水量は二萬七千噸を超ゆる得ず、といふが如きが其の鐵則であつた。

但し華府條約では、廢棄艦を航空母艦に改装する場合の除外例を認めたので、八吋砲裝備三萬噸以上の大艦も現存してゐる。

然しその後、どこの國にも大艦巨砲の航空母艦は現はれない。二萬噸内外で八吋砲を巡洋艦なみに裝備しては多數の飛行機が積めないのである。

一九三八年に竣工した米國航空母艦「ヨークタウン」級、「ヨークタウン」及び「エンタープライズ」（ハワイ沖海戦で損傷）は基準排水量一九、九〇〇噸、速力三四節、備砲五吋高角砲十二門其の他小高角砲である。最新艦ホーネット（一九三九年起工）も同型である。同年に起工して既に就役を傳へられてゐる「ワスプ」は基準排水量一四、七〇〇噸に下り、速力も三〇節に低下し、備砲は五吋高角砲八門である。

「ヨークタウン」級は飛行機百臺以上格納の餘積を持つてゐるが實際の常備機數は七十五臺だといふことである。これは米國海軍の全航空母艦を通じた平時の基準搭載量である。爆撃機隊、戦闘機隊、偵察機隊及び雷撃機隊の四隊が各十八機で編制せられ他の三機が雑用である。防禦設備は防禦甲板（甲羅式鋼甲板）と機關部防禦用の幅狭き裝甲を持つてゐるといふことだが厚さは

不明である。水面下の防禦も完備してゐる由であるが詳細は不明である。

要するに兵装と防禦において輕巡にも劣る此種航空母艦は脆弱なる艦種である。その使用法にも原則的な定説があるのであるが、速力が飛びぬけて速い若干の航空母艦と巡洋艦は米國海軍における特異な存在である。

一九三九年頃の撮影だと思ふが米國航空母艦「レキシントン」、「レンジャー」、「ヨークタウン」、「エンタープライズ」の四隻が高速編隊航行してゐる光景を上空からとつた寫眞を見たことがある。此種の編隊が何を目的とするものか、興味を持つて想像をめぐらしたことがあつた。

4

従來説かれた空母集團（キャリアー・ストライキング・フォース）といふのは航空母艦一隻に驅逐艦、巡洋艦等の高速護衛艦を隨伴せしめ、快速を利用して遠く敵地沿岸に出沒し、搭載機を放つて敵本土の空襲、敵主力の奇襲、通商破壊を企てるもので、本來は主力部隊の渡洋作戰の一部として着想されたものが獨り歩きをするやうに變形したものだといふことである。従つてこれは一隊であつて戦略的には片輪ものである。堂々と海軍國の本土に接近する完全な資格を持た

ないものである。

わが元龜天正時代には正船、奇船といふ稱呼の下に目的任務を異にする二隻の兵船の一群隊を以て戰術單位とした。此の二隻は終始相離れることなく協力して戰術任務に従事するものであつた。正船の集團と奇船の集團を以て正隊、奇隊の二箇群隊を編成し、これで一箇の水軍を組織した。此の古法は近代の艦隊編制法にも生きてゐるのである。此の奇兵が分離別行動を企てる場合、或は別行動を執らねばならぬ場合は、時に奇功を奏することがあつても弱體たるに相違なく、その行動を繰返してゐればやがて掃滅される運命を持つてゐる。

原來戰術單位なるものは戰術部隊が組成する最小單位であつて、戰術に當り分離別動し得る兵力の極限である。この戰術單位が數個團結して「隊」となつたものが戰術單位である。戰術單位の集團が戰略單位である。

海軍の最小戰術單位は各種特異性を有する艦艇一隻である。此一隻が時にすばらしい戰果を収めることが無いでもないが、戰術的に使用されるには貧弱に過ぎる。それは海軍に與へられる任務が然らしめるのである。戰術單位は特性ある艦種の集團であるが、山盛りにしても澤庵は澤庵

の味であつて、未だ一食膳の醍醐味は得られない。然し數片の澤庵でも腹のたしにはなるにはなる。航母集團はそれ程單純なものでは無いが、簡單な辨當に過ぎまい。

5

前大戰時代に比べると陸海の作戰を通じて航空兵力の擔當する役割は非常に擴大された。

當時航空機の發揮した偉大たる効力と稱せられたものは、西部戦線における猛烈なる空中戦とドイツの「ツェッペリン」飛行船の倫敦襲撃であつた。然しながら海上における飛行機の効力は微々たるものであつた。全戦役を通じてドイツ側が決行した雷撃機襲撃回数は僅かに十一回である。爆撃はダルダネルス海峡において、ドイツ装甲巡洋艦「ゲーベン」が敵飛行機から受けたもの、外、殆んど論ずるに足らない。

ユトランド海戦では英國側に飛行機運搬艦「エンガジーン」があり、ビーチ隊と共に、ドイツ偵察部隊に接近したが、飛行機を水上に卸し、これを飛揚させるに手間取つた爲、却て巡洋艦の報告の方が早かつた。即ち飛行機は偵察の任務にも役立たなかつた。

ドイツ側では飛行船五隻が、ヘリゴランドを起點とし、北方乃至西方に向つて二〇〇乃至二一八

○海里の扇形區域を偵察してドイツ大海艦隊の爲に敵情をもたすことを企圖したが、當日濛氣があつて、三百米の低雲が附近一帯を覆ひ、何等の效果も收め得なかつた。

航空機そのもの、發達もさることながら航空母艦の出現によつて、航空戰術乃至海戰術に新生面を發見したのである。

飛行機の前進基地としての島嶼は不沈の航空母艦として珍重されてゐる。この基地の勢力圏を大艦隊が突破することは苦手に相違ない。然しながらその位置が海圖上に明記されてゐる敵基地は、その後方連絡を絶つことと、現存航空兵力を撃滅することによつて無力化することが出来る。即ち前進基地は地理的布置と敵の戰略的配備によつては對策を發見することが容易である。殊にわが海防圏、空防圏内に敵の前進基地が長く存置されることはあり得ない。

此の缺點を補つて航空兵力の威力を發揮しようとするものが、空母集團奇襲作戰案出の動機であるかと思はれる。検討は航空機の奇襲が、戰略的に何を爲し得るかに移らねばならぬ。

6

一呎平方の土地も占據する力の無い飛行機に何が出来るかと樂觀してゐた英國の評論家があつ

た。然しながら落下傘部隊の發達は一人一呎以上の土地を占據出来ることを實證するに至つた。あとにつゞく兵力の如何によつては、航空兵力の貢獻する所おそるべきものとなつた。然しながらそのあとにつゞくものが兵術家頭痛の種である。

爆撃機、雷撃機は從來の大砲、水雷の射距離を驚くべく伸長したといふ戰術論は既に久しき以前から現はれてゐる。爆撃、雷撃によつて主力艦を撃沈し得るものか否かといふ事も多年の懸案であつたが、これは日本海軍によつて明らかに解決せしめられた。

航空兵力が何を爲し得るかといふ問題の次には如何にして行はれるかといふ條件が附帯する。航空作戰の特異性は他の兵種が、航空機に對して、航空機の作戰地域を敵の方向に進出させることのみによつて出来るが、他に何等の支援をも與へることが出来ない點に在る。即ち捨子同様である。航空機は地點を保持することが不可能であるから、之を利用することも不可能である。又空中で自分の位置を固守することも出来ない。地上に在る航空機はそれ自體に攻防共に何等の威力を持つて居ない。航空機が戰術的に行動する場合には唯一個の想定だけがあり得るのである。即ちそれは成功を贏ち得る企圖の爲に行はれる戰闘においてのみ價值があるといふことである。

とである。

かくの如く航空機の戰術的使命は、戰役の目的達成を助ける何物かをつかむことにあるから、わが航空兵力は敵よりも常に優勢であることが必要である。漸減作戰などの餘裕が與へられず大勢が決するのである。この理は今度（一九三九年）白、蘭、佛に侵入したドイツ軍が妙用した。即ちドイツ軍の先鋒たる空軍はいつも絶對優勢の地位を占めて特に英國遠征軍の空軍を痛目に合せ、英國識者は此怪奇なる現象に臍を嚙んだがどうにもならなかつた。英國空軍が五、六年立ち遅れたことを自覺したのみであつた。

一隻乃至數隻の航空母艦に搭載された航空機がその航空母艦の優秀性と他の艦種の協力よろしきを得て目的地上空に推進せしめられたとして、その後何をするか、そのしたことが戰術的に如何なる價值を有するものであるかを検討すれば、本稿は結論に達するであらう。

戰術的に關聯を持たない一戰術單位が如何程巧妙に驅使されたところで大局に與へる効果は知れたものである。太宰に比す可き一大定食の一皿に過ぎない。とゞのつまりは喰はれて仕舞ふだ

けのことである。潜水艦は往往にして長途の奇襲作戦に成功する。それは隱密性が應對に當る敵側に驚く可き多數の水上艦艇を使用させて奔命に疲れさせる性質を持つばかりでなく、武運つたなく敵に發見され、攻撃される時は、其の直前において一大任務を遂行した後であるといふ作戦を執り得る特性を有するものである。航空作戦の奇襲はこれと大に趣を異にしてゐる。一體敵の重要地點に向つて絶對優勢な航空兵力を僅少なる航空母艦と弱少なる護衛兵力を以て無事に輸送し得るものであるか、または絶望的作戦であるかは三尺の兒童と雖も判斷し得る所である。水軍に正奇を分離して作戦することはわが古法の嚴に戒めてゐる所である。奇中の奇術がたとへ若干の成果を收め得るとしてもそれは線香花火に過ぎない。

航空兵力が單獨に攻撃價値を持たないことは米國の海軍戰略家マイヤースの輩が既に口を極めて論じた所である。日露戰爭における東郷艦隊の名參謀であつた秋山眞之中將は明治三十六年海軍少佐時代にわが海軍大學校において「將來天軍萬能の時代が來るかも知れない。然しながら人間の壽命は限りあるものである。現前の科學に立脚した攻防法を先づ研究すべきである」と講述したと傳へられてゐる。天軍は今日まだ萬能の時代は來てゐない。

スターク前作戰部長は比較的穩健な戰略眼を持つてゐた提督である。之に代つたキング提督とホーン海軍少將其他空戰通の稱ある幕僚達の腦裡に在る航空作戦の戰略眼に對して輕侮する意味ではないが、大なる疑念を抱かざるを得ないことを海上作戦の常識がわれらに向つて暗示する。世に常識に離れた盲動程恐るべき危険はない。敵の非常識に備へるに非常識を忘れぬことも國防上大切なことである。

太宰の帥、大江匡房卿は支那の兵學に満足出来なかつた活眼の達人であつた。彼は孫子十三編は「懼」の字を免れぬものだ。吳起の書六篇は「常」を説くことに殆んど終始してゐる。

日本式奇正の戦法はこれらを超越すべきであるとの抱負の下に「鬪戰徑」を草して自己の戰術的原理を要約した。

「鬪戰徑」の第八章に

支那の兵法には詭譎がある。日本の鬪戰教範は眞と銳とを説くのみである。詭か、銳か、狐を以て狗を捕へるか、狗を以て狐を捕へるか。

と論じてゐる。

現代戦においては狐と狗とを兩々用意して敵狐に備へることが上々策であり、且可能な問題であると思ふ。従つて狐の價値は分明である。こゝに敵狐と稱するは航母集團である。(一九四二、四、二九)

七、潜水艦の發見法

1 種々な對潜兵器

潜水艦を攻撃する爲に、また之を防禦する爲に最も必要なことはその所在を發見することである。そこで水上の軍艦ではマストや艦橋等の高所に多數の見張員を出して精良な望遠鏡を用ひて海面を見渡して潜水艦發見に努めるのであるが潜水艦の特性としてその一部又は全部を海中に隠すことが出来る。潜望鏡まで隠せば潜水艦の方も盲目同様となるから普通潜水艦が敵に對する接近運動には潜望鏡の先端だけは水上に露出してゐるものである。潜望鏡が潜水艦の航進に従つて白波を立てることは見張員に發見の機會を與へるものであるが、風の爲に白波が立つ場合にはそれとこれと區別が困難である。潜望鏡を水面下に引下げた後の潜水艦は若干深度までは飛行機が透視することが出来るがこれは天候にもよることである。深海に没入した潜水艦は最早視力を以

てその所在を知ることが不可能である。水中聴音機の機能によつてその所在を聞き出すより方法がない。

潜水艦攻撃用の兵器は大砲と魚雷と爆雷である。また潜水艦捕獲網と機雷も有効な對潜水兵器である。大砲と魚雷は潜水艦全没後は使用することが出来ない。爆雷と捕獲網は水上艦艇が潜水艦に比べて優速なる點を利用し敵潜没入位置に馳けつけて之を施せば効果を期待し得るものである。但し比較的近距离に油断した敵潜の潜望鏡を哨戒艇が発見して敏速な運動を行ふ場合に限り。全没した潜水艦の攻撃法は沈置して置いた機雷に彼自ら來つて之に觸れるチャンスを期待することと残る唯一の手段は水中聴音によつて潜水艦の所在を探求してその位置に深海爆雷を投ずることである。従つて問題は水中聴音の精度と潜水艦爆破の敏速程度が解決するものである。假に位置発見の精度が百パーセントであつても之に伴ふ攻撃力が無ければ目的は達せられまい。

2 音無しへの構へ

對潜水艦兵器として出現した水中聴音機はその初機においては潜水艦狩に従事する艦艇の艦尾

から電纜を流しマイクロホンに相當する部分を曳航したものである。陸岸基地から水中に設置したものは今も残つてゐるであらう。潜水艦推進器翼の回轉によつてその音響が水中に傳播されると電氣的装置を介して警戒者の耳で聴取するものであつた。前世界大戦においては潜水艦が初めて實戦の用に供せられ、その成果も並ならぬものとなつたのである。従つて水中聴音の方も幾多の實驗を経て著しい發達を遂げ、この装置を各種艦艇の艦腹に装置するやうになり、曳航時代よりは航行にも便利なものとなつた。艦體に水中の耳が生えたのである。

水中聴音機構の原理は各國共殆んど單一なものであらうが、米國製と稱するものは、捕音器が電話の送話口と同様原理によるカーボン型で作られ、方向の判知作用によつて潜水艦所在の方位を測定するものである。また十二個の捕音器を艦底に裝備し、最大感度、最小感度、相覺感度によつて敵潜の方向を測定するものもあるといはれてゐる。獨乙製と稱するものは、十六個の捕音器を用ひたもので、最大感度によつて敵潜の方向を測定するものである。ドイツが潜水艦狩りをするのはチトおかしいやうな氣がするが英國海軍と雖も潜水艦を用ひないわけではない。前大戦において英國側潜水艦の喪失はCクラス十三隻、Dクラス二隻、Eクラス二十六隻、Gクラス四

隻、Hクラス四隻、T一隻、K三隻、L一隻、總計五十四隻、その内ドイツ側の機雷にかゝつて最後を遂げたものは僅に三隻潜水艦同志でやられたもの一隻のみである。衝突其の他のアクションによつて失つたものが十二隻で残りの三八隻といふ大多数の大部分はドイツの積極的な驅潜水艦に追ひつめられたものである。即ちドイツは潜水艦自體の發達に専念したのみならず、英國潜水艦の掃蕩にも相當な力を發揮したことが明かである。

尙、水中聽音機には佛國製と稱するものがある。

これはランデバン氏の發明した所のもので水晶の壓電氣現象を利用して超可聽音波を發生せしめ、味方の船體から發散する音波の反響によつて相手の所在位置の方向を知り、且方向と反響を受けるまでに消費された時間によつて距離を測定するものである。

これは前者に比して一層積極的自主的であるから敵潜水艦が、依然潜伏する場合にも使用出来るものである。近年各國海軍において盛に用ひられてゐるらしい。机龍之助は盲目にして音無しの構へを愛用した。刀と刀とがチャリンと音を立てる程に彼我の兵器が近接する以前において敵所在の方向と距離とを腦裡に描いて切り込んだ大刀に無駄が無かつたものを謂つたものであら

う。若し彼が實在人物であるならばその兩耳の構造を解剖研究することによつてその然る理由の一部を發見されたことであらう。對潜格闘においてはかゝる敏感な機能は未だ發達して居ない。

3 英國の對潜策

潜水艦は他の水上艦艇に比べて攻撃力のみが偏重されてゐる特種な艦種である。それは三萬何千噸の主力艦一隻と一千噸内外の潜水艦が持つ攻撃力の量はとうてい角力にならない程潜水艦が劣つてゐることは當然である。然しながら戦艦が持つ兵器は通例全排水量の十七八パーセントに過ぎない。他の重量は防禦その他の設備に費されてゐる。潜水艦は防禦その他に重量を喰つて居ない。砲彈、魚雷、爆彈、爆雷等あらゆる潜水艦の命取りの攻撃力に對して防禦施設は潜水艦それ自體は携行して居ない。外殼は僅に百米内外の深海における水壓に堪へることを目標としてゐるに過ぎない。滿身攻撃力の權化である。されば僅數百噸の潜水艦は時に幾萬噸の巨艦を屠ることが出来るのである。但し潜水艦が強いのは海水を利用してその隱密性を確保した場合のみで敵艦から可視の状態にある時或は聽音装置によつてその所在が明かにされる場合には必敗の弱さを

持つてゐる。故に潜水艦の眼であるペリスコープは他から可視の状態にある時は自由自在に利くやうになつてゐるが一度潜入すれば盲目となる。即ち潜水艦が防禦的に強くなるのは水上艦艇から見えなくなつてからである。故に水上艦艇が潜水艦掃蕩の爲に持つ可き性質はこれを如何にして視るか聞くかといふことになる。水中を視る方の研究はあまり進んでゐない。聞く方は専ら努力が拂はれてゐるのである。

今度の戦争でドイツ空軍が北海において、英國の商船九隻、掃海船一隻、哨戒艇四隻を撃沈したことがあつた。かゝる空襲において無防禦の空軍が武装完備した艦隊を攻撃して高射砲と迫撃機隊の猛烈な反撃を受けながら、此戦果を得たことは、ドイツ側は北海特有の密雲を利用して空軍の隱密性を確保し、岡目八目の優位から敵艦隊の不意を衝いてヘルダイブを行ひ、被攻撃時間を極度に短縮して奏効したものとすれば視認力と視認力との闘ひと視ることも出来る。雙方の持つ兵器の力を超越した用兵上の妙味である。視えない敵に對する準備としては聽音装置による外豫知の方法がないのであるが、海上の小艦艇で空中聽音を完備することは、今の處まだまだ前途遼遠といふべきであらう。かゝる未開拓の方面を考へてその虚隙を衝くことは寡を以て衆を破る

方法としての原則であらう。ドイツ海軍は前大戦においては敵の潜水艦に對する不用意を衝いて華々しい効果を収めた。此戦役の最初から二十八ヶ月間、英國海軍の大艦隊司令長官の重職にあつたゼリコー海軍大將が漏らした戦後の述懐は「從來英國民が當面した危険は少くなかつたが、未だ一九一七年における潜水艦の脅威が絶頂に達した時の如く甚しかつたことはない」といふ意味のものであつた。少くも潜水艦に關する限り英國海軍は弱かつたに相違ない。

デーリー、テレグラフ紙の海軍記者バイウォーター氏は前大戦と今次の戦争とを比較研究した論文中においてドイツ海軍の採るべき作戦を推定して、英國商船に對する唯一の攻撃武器は依然として潜水艦であるとしてゐる。而してその對策として次の如く述べてゐる。

過去二年間英國商船の船長及び高級船員は敵の主力艦、潜水艦或は飛行機の襲撃を避ける方法を熱心に研究して來た。英國は商船護送用の特殊艦艇を多數保有し、又潜水艦防禦装置を完成してゐるから、第一次大戦時よりも對潜水艦戦の準備は整つてゐる。

而して對潜水艦準備とはどんなものであらうか。今次戦亂勃發數ヶ月前に英國海軍政務次官が下院において行つた演説中に、

過去二ケ年に互る海軍省と船舶會社の協力の結果、護衛に關する新制度、施設、人員共に完備し、開戦と共に護衛制度を採用し得る状態にある。即ち二千門の對潜水艦砲は直に商船に裝備可能の如く準備されてある。また本年一九三九年迄に一千隻の商船の甲板は直に大砲裝備可能の如く補強せらるゝ筈である舊年度一九三八年九千名の商船士官は軍事教育「主として射撃と護衛制度」を終了し、今年度は下級船員に對し軍事教育を行ふ筈である。開戦に際し敵潜哨戒用として徴發せらるべき小型商船は既に内定し、之が裝備兵器は既に準備されてある。

又英國海軍の現在採用してゐる水中聽音機は極めて優秀であつて、之に依り十中九まで敵潜水艦は容易に發見することが出來、護衛制度の採用と相俟つて敵潜の脅威を滅殺し得るやうになつた。

と述べ國民を安神させたのであつた。それ程確實な對潜兵器があるならば數の知れたそれ等を狩り盡すことが出來さうにも思はれる。

戰亂勃發以來三ヶ月（一九三九年九月一日から同年十一月二十五日迄）間に英國海岸の敵潜七萬三千噸と傳へられた。また商船の被害は英國七十八隻二十八萬八千噸、佛國十隻五萬一千噸中立國四十三隻十四萬四千噸であつた。而してドイツ側の犠牲は潜水艦十隻と商船十五隻六萬九千噸であつた。

對潜兵器の眼や耳が發達したといつてもそれが逃げるに適する發達であつては對潜水艦作戰は極めて消極的なものとなる。殊に潜水艦により機雷敷設が發達した今日では水上艦艇に襲ひかゝる潜水艦を退治して居たわけでは海上の危険は知らぬ間に蔓延するのである。若し艦船の耳が話のやうに完全なものであるならば敵潜の機雷敷設にも監視否監視の耳を配置さるゝべきである。獨英の戰果から觀察すれば潜水艦に對する方向距離の探知といふことは話程に接戦の爲には役立つてゐないのではないかと思はれる。

4 聽音索敵の將來

前大戰中ドイツ潜水艦が實際に出動して居たのは三十隻内外に過ぎなかつたのであるが、これ

を警戒撃攘又は敷設機雷の處分の爲に聯合國側の使用した船舶はその最盛期において英國三千八百隻、フランス千二百隻位であつた。後年敵潛一隻に對して三十倍の艦艇を動員しながら英國は完全なる制海權を獲得することが出来なかつたと論ぜられたのがこれである。四船戰術も試みられたが最初のやうな効果をいつまでも見ることは出来なかつた。老大な機雷原を作ることによつて獨潜の行動を制肘することには成功したともいひ得るが、これは來るのを待つワナであるから驅除の完成手段ではなかつたものである。前掲英國海軍政務次官のいふ如く今回多數の敵潛哨戒用の船艇が用意せられ十中八九まで敵潛發見を確實にする機能を備へるものであるならばそれは戰果に現はれて來なければならぬ。

潜水艦の創生理由、存在理由はその隱密性に依存してゐる。その隱密性を發く方法が完成する時は潜水艦の敗北に止らず潜水艦の終焉である。然るに潜水艦はまだ若い。進歩の階段を二三段階み出したところである。三隻の水上艦艇が水中聽音機の機能によつて一隻の潜水艦を追ひつめることが出来るならば百隻の敵潛を掃蕩するには三百隻の小さい哨戒艇を用意すれば充分だといふことになる。英米海軍が巨額を投じて設備し、またしつゝある主力艦の水中防禦も無意義な浪費

であつたといふことになるが、そんな見透しのつかぬことをする筈はない。潜水艦は如何に見張りを嚴重にしても耳を緊張させても時には大艦にも肉薄し得るものであることが現状であるに相違ない。

聽音索敵の精度は日と共に進むであらうが滅敵手段がこれと共に進まなければ價值はない。今假に其の哨戒艇から方位何々距離幾何の地點における海中に敵潜水艦が潜航中であることが解つたとしてこれを如何にして攻撃するか。將來劃期的なものが此方面に發明されるかとも思はれる。

潜航中の潜水艦を撃破する武器はその直上から投下する爆雷が唯一の手段となつてゐる。或は、捕獲網と稱する投網式な考へに基いたものもある。位置を確めてから破壊力を仕向けるまでの時間及びその破壊力が目標に到達するまでの時間を考へると、水上の戰鬪において砲彈によつて狙ひ打ちされる場合とは比較にならぬスピードの段違ひである。これは非常な肉薄の後に實施されることが要求せられ艦艇に依る肉薄には相手の遁走が伴ふ。幸にして潜水艦の速力は水上艦艇に比べて遙かに低い現状であるから、かゝる攻撃法が絶望であると斷すべきではなからうが、

水上における砲彈射撃等に比して精度は遙かに悪い。従つて多數の攻撃中から僅かな奏効公算を期待するに止るといふことが當然かと思ふ。

海中で或る程度の視認距離を得られるやうな時代が来るならば、防空には空中戦闘があるやうに潜水艦對潜水艦の水中格闘によつて現代の手ぬるさを解決するのではないかと思はれる。但し此場合の水中武器は砲彈は用ひられず、魚雷も手ぬるしとして、新しい水中近距離格闘法が案出されることであらう。

八、東 郷 戦 法

1

東郷元帥家の系圖は、その源をとほく桓武天皇に發して居る。天皇の王子葛原親王から第三代目の高望王は、平氏の姓を賜はり、臣下に御下りになつた。

それから十一代目には、六人の男子があつた。その兄弟の内次男實重が東郷姓をなおり東郷家の御先祖となつてゐる。代々秩父に住んで源氏に仕へた兵馬の家であつて、鎌倉時代に鳥津家の家臣として南進の列に加はり、遠く薩摩に下つたのが、元帥の幾代か前である。

先祖も幾度か戦争の苦みに堪へ、忠義武勇をあらはしたが、元帥も青少年時代から戦争の困苦を次々に味はひながら、一生の半分以上を過した。弘化四年（皇紀二五〇八年）十二月二十二日に元帥は郡奉行（今の郡長）東郷實友の第四男としてこの世に生れた。その頃は米國や歐洲の軍

艦が日本に来て、国内が、大騒ぎをした時代であつた。十七歳の時、英國艦隊が鹿兒島灣に攻め入り、その防戦につとめたのが最初の出陣である。そして二十二歳で薩摩藩の軍艦春日の乗組士官となつたのが、海上生活の第一歩であつた。その年から翌年にかけて徳川幕府の倒れる時の戦争に官軍の方の軍艦春日艦の砲術士官として働いた。若い東郷さんはその頃苦しくつて早く戦死したいと思つたことがあつたさうである。それから明治二年（皇紀二五二九年）横濱に出て英語を學び、その翌年は英國へ留學を命ぜられた。イギリスでは、名將ネルソンの戦法なども研究した。明治二十六年米國がハワイを取る騒ぎの時は、浪速艦長としてハワイ居留の日本人保護のつとめに當つた。翌年と翌々年は日清戦争（浪速艦長）明治三十三年には北清事變に出征（常備艦隊司令官）して日本人保護のつとめに當り、明治三十七年の日露戦役には聯合艦隊司令長官としてまた出征といふ風に、世界古今を通じて稀に見る歴戦の勇士であつた。そればかりでなく海軍大學校長をして居た時（明治三十一年）にはロシアの戦略家マカロフの戦法を研究した。また大楠公の編み出した楠流兵法の書は、若い頃から常に愛讀した。支那の兵法も研究した。また大従つて東郷戦法は、かゝる勉強と實地に會得したものが元帥についてゐたものである。それを

戦場で鍛へあげた大膽さを以て非常の時にも平然として自由に使ひこなしたのである。

2

昔の支那の有名な兵法家孫子が残した言葉の中に、「軍隊を用ひる方法は、敵の來ないのをたのみとせず、われに敵を待ち受ける準備のあることをたのみとする心がけが大切だ」といふ意味のものがある。

或日東郷元帥は、この言葉について「詳しいことは漢文の先生が十分に解釋するであらうが、これを簡單にいつて見ると、敵の來る方を待てといふ意味である。戦は必ず來るものと思はなくてはならぬ。戦が無い方がよいと思つてはいかぬ。いつでも用意してゐて、敵のやつて來るのを待つやうにせんければならぬ。自分はさう解釋してゐる」と語られたことがある。

旅順のロシア艦隊が不意に出て來たことがあるが、その時わが艦隊はチャンと適當な位置に待ち受けて戦つた。これが日本海海戦の前の年にあつた、八月十日の黄海大海戦である。この海戦ではわが艦隊にも命中した敵弾が多く、わけても旗艦三笠には敵の砲弾が集まつた。前の三笠だ

けで死傷者は百名以上に達した。東郷長官は苦戦となればいよく、勇氣が百倍し、敵を逃がさぬ陣形の秘術をつくして追ひ打つた。砲戦は午戦の一時から八時までの長時間にわたつてつゞけられた。わが砲弾が敵の旗艦の司令塔に命中したため、ワイトゲフト司令長官は戦死し、またわが砲弾は敵旗艦の操舵機を破壊したので、敵の陣形は大混乱となり、わが艦隊は二千米の近距離まで追ひ迫つて、猛射をあびせた。夜になつてから駆逐隊、水雷艇隊が代つて敵艦隊の襲撃にあたり、わが艦隊は明日の戦鬪豫想地點に向つた。この海戦後再び旅順に逃げもどることの出来たのは傷つた戦艦五隻、巡洋艦一隻、駆逐艦三隻のみで、もはやわが艦隊と決戦する資格も勇氣も失つた艦隊となり、その後港内で皆沈められて仕舞つた。その他はどうなつたかといふと戦艦一隻（旗艦）と駆逐艦三隻は膠州灣に、巡洋艦一隻はサイゴンにのがれて、その地の役人即ちドイツ、フランス、支那の官憲の命するまゝに武装を解き、抑留されてしまつた。巡洋艦一隻は浦鹽に落ちのびる途中をわが巡洋艦戦隊のために撃沈せられ、駆逐艦一隻は暗礁に乗りあげて破壊し、また一隻の駆逐艦は芝罘^{チーフォー}でわが駆逐艦のために捕獲された。

この海戦は、日本海海戦ほどに有名でないやうであるが、バルチック艦隊の來るのを待ち受け

る準備として大切な仕事であつた。もし敵の思つたやうに、この全艦隊が浦鹽にのがれ、バルチック艦隊の來る時まで片づいてゐなかつたらば、日本海海戦はもつと困難なものとなつたのである。

前歐洲大戰では、イギリス艦隊がドイツ艦隊を追撃することを中途ハンパでやめたことが二度ある。それはドイツ潜水艦が英國艦隊に及ぼす危険とか、イギリス側に駆逐艦が不足してゐたためであるとかいふことに言ひわけはなつてゐたが、イギリス艦隊がドイツ艦隊を撃滅する氣力も無かつたのである。

3

東郷艦隊に對してロシヤの旅順艦隊とバルチック艦隊即ち第一第二太平洋艦隊が力を併せてかかれ、われは一で、彼は二に近い勢力であつた。わが作戦が神速機敏であつたためと、第二太平洋艦隊の派遣がおそかつたために、いづれも戦史にめづらしい戦勝を得た。黄海海戦にもイの字戦法が用ひられ必勝の陣形がしかれた。世界の戦術家がほめるばかりでなく、驚嘆したほどの

全勝であつたが、東郷さん自身にとつてはまだその勝ち方に不満があつた。

次に来るバルチック艦隊に對しては、もつとうまく勝つといふ信念にもえ、その準備に苦心した。日本海海戦の前に、東郷大將が部下に與へた訓示の中にも、前に述べた「待つあるを恃め」といふ言葉を引いて部下を激勵した。その心組みで、訓練は火花を散らすばかりに行はれたから、わが艦砲射撃には全く百發百中の實力が盛り上つた。作戦の方も、敵艦隊がどんな風に出て來てもこれに應ずる用意が出來てゐた。一度敵に會つたらば、前の黄海海戦以上に徹底的にこれを撃滅する工夫をした。

東郷さんの七段構への陣法と後にいはれるやうになつたのは、この準備のことである。

いよいよ五月二十七日、敵艦隊が現はれてからの戦法は、敵の行動を見抜き、わが實力を信頼し、落ちつきはらつて敵の死命を制する陣立であつた。わが艦隊に十分の用意があつたこと、司令長官が日頃の研究に對する自信と、戦争に慣れてゐるおちつきとは敵艦隊のものに比べて、比べものにならない程のちがひがあつた。

敵の艦隊も日本艦隊と戦はずして、無事に浦鹽に行きつけると思つたわけではないが、落ちの

びることと戦ふことを、半分づゝ考へてゐた。従つて戦ひを待ち受ける心組は、こちらの半分であつたといふことも出來やう。

その頃の海戦では合戦に先立ち餘分の石炭は海中に捨てて身輕にすることになつてゐたが、ロシア艦隊はどこまでも逃げる覺悟であるから、石炭を山のやうに積んだまゝで戦闘を開始した。主力艦の装甲は、水線附近一定の幅だけ張られてゐるものであるから船足が深くなると装甲帯は餘計水中に没して非装甲部が水線に近づくことになる。それに天氣は晴朗で、わが艦砲の照準には好都合であつた。風が強くて浪が高いところへ、ロシア艦隊の水線附近に、わが砲弾が遠慮なく大孔をあけたから、海水は瀧のやうに流れ込み沈没することになつてしまつた。右のやうなわけのみではなく、今まで砲撃では、なか／＼沈めにくいものと考へられてゐた戦艦が、わが砲弾のために脆くも沈んだ結果から、海戦と砲撃といふことに新しい問題が世界的に起り、大艦巨砲主義、即ち排水量の大きな軍艦を作り、それに口徑の大きな大砲を備へることが大切だといふことになつた。

たゞこの海戦で、日本の方では軍艦はもとより巡洋艦一隻も撃沈されてゐない。別にロシア艦

隊の大砲が小さかつたわけではないが、わが戦術、わが射撃が優れてゐた上に、敵の方には石炭のいたづらまでが加はつたわけであつた。

4

歐洲大戰後、遠距離砲戦の弾が垂直に近い弾道で落下することと、飛行機による爆撃を防ぐために、軍艦特に主力艦の水平防禦といふことがやかましくなつた。新造艦はこの考へを入れて設計し、古い戦艦は改装によつて防禦甲板を厚くしたり、潜水艦の襲撃に對抗する水中防禦を加へる工事をしたと発表した國が多く、中でも英米海軍がまつ先であつた。その英國海軍のしかも新式主力艦が今度は盛に沈む。これは敵艦の強いのを待ち受けた結果と見るべきであらう。敵の打つ手を待ち受けてそれに超えた方法をとることは戦勝の秘訣であるが、その威力はいよいよ戦争になつて見なければ、解らないといふ場合も多い。

強敵を待つ覺悟と準備の大切なことが戦場の懸け引きにおいて大切な事は、東郷艦隊の例でも明かである。

5

楠正成や東郷大將のごときは、聖將とも呼ばれ、いくさのかけ引きに上手なはかりごとが出来たといふばかりでなく、遙かに立派な力があつて、今までの歴史では百年に一人、千年に一人といふやうな珍しい人々である。同じやうな忠義の心、同じやうな苦しみの経験がないものには、そのほんたうの氣持はわからない。しかしながら現代戦においても、國々の内部のありさまにおいて、その國が盛になり、或は沈んでゆくこと、或は亡び易いとか、攻めにくいといふことは、單にそろばんの上の考へ方や、持つ物の多少とか、その動かし方ばかりに基くものでなく、もつと深いよりどころがあるものであるといふことが、解るやうな氣がする。

6

東郷司令長官が戦役中味方に不利な、例へば敵の機械水雷のためにわが初瀬、八島といふやうな大戰艦が沈没した時、若い士官や水兵たちが、これはポツポツ負けるのではないかと心配し、

ユウウツを感じはじめた時でも、東郷さんはいつもと少しも變らない顔をして三笠の後甲板を散歩してゐた。この有様を見ると將兵たちは、大丈夫勝てるといふ信念がまた湧いて來た。

「皇國の興廢此一戦に在り」の信號や、イの字戦法、敵の艦隊が六千米に近よつてからはじめて下された「打方始め」の號令など、海戦と陸戦のちがひはあるが、楠公さんと東郷さんは時代を隔て、兵器は異つてゐても同じやうな戦法を以て戦つたことが考へさせられる。

九、爆 雷

1

グリーンランド島の沖でアメリカの驅逐艦が、ドイツの潜水艦と戦ひ爆雷を投下したが當らなかつたといふことがあつた。爆雷は魚雷や機雷とちがつて、潜水艦の附近十數米の水中で爆發しても、潜水艦はこはれることになつてゐる。ドイツ潜水艦は、もぐり方が上手であつたものと見える。

2

潜水艦は、水の中まで追ひかけて行かなければ、つかまへることが出來ない。爆撃機を追ひかける戦闘機のやうなものが、水中戦にもあらはれたらいいのであるが、まだ出來ない。水中で眼

が見えるやうになつたら、鬩魚のやうな水中戦闘が出来てあらう。

前の歐洲大戰では、ドイツ潜水艦が盛に働くので、何とかしてこれを取押へてやらうと工夫した。

鋼鐵の網を海中にたらしめて潜水艦をからめ取る法、機雷のおき方で、ぜひともこれにかからせる工夫、飛行機の爆撃法なども進んだが、爆雷は水中まで追ひかけて行くことの出来る性質を持つてゐるから、威力無類であつた。その頃イギリス海軍が、爆雷で沈めたドイツ潜水艦は三十四隻、他の國の爆雷攻撃をあはせると、四十二隻の潜水艦を、ドイツはこの新兵器のために失つたのであつた。

爆雷を思ひついたのは、イギリスのゼリコー海軍大將である。あちらではデブス・チャージといつてゐる。水中爆弾、深海爆弾なども譯されてゐる。

3

爆雷は潜水艦のもぐつたところ、或は水中の音によつて潜水艦のをることがわかつたところ

へ、船から投げ込むと、その時は爆發しないで、自分の重さで水中に沈んでゆく。水中の潜水艦から見れば、追ひかけて来るわけである。投下する時に、お前は水面下二十米の所で爆發するのだといひつけておくと、その通り爆發するのが發明の要點である。

何によつていひつけてやるかといふと、爆雷は火薬に火をつけるものが、水の壓力によるものであるから、その感じ方を加減するネジをまはしておくのである。それは魚雷が走つてゐる間に、深くなり過ぎたり浅くなり過ぎると、自然に上げ舵下げ舵をとるやうに水壓を感じさせるのと同じりくつである。

爆雷は普通は、長さ三十糎あまり、直径十數糎の鋼鐵で出来た罐の中に、爆薬を入れてふたをしたもので、そのふたに水壓を感じる装置がついてゐる。それにつながつて内部に發火装置がついてゐる。爆弾に似た形のものもあるが、これは飛行機が高いところからおとすのに用ひられる。爆薬の量は、イギリスでは一八一グラムが普通である。イギリスで實驗したところによると、この程度の爆雷の爆發中心から、一八米以内にある潜水艦は、爆雷が命中しなくても破損して、浸水のため沈没する。

それよりもつと離れてゐても、爆發の力が水に傳はつて、敵の潜水艦にあたるから潜水艦内部の精密な機械に狂ひをおこし、進退の自由を失はせることが出来るといはれてゐる。

4

爆雷を投下するには、飛行機では低空飛行による普通の爆彈投下と同じことである。驅逐艦または驅潜艇、高速内火艇などでは、爆雷投射砲を備へてゐて、これから打ち出すのが普通である。また潜水艦もぐつたとところに、艇みづから突進して艇尾から爆雷をころがしおとす法もある。

爆雷投射砲といつても、艦砲射撃のやうに狙ひうちをするのではなく、敵潜水艦のもぐつた場所に、艦艇自體が飛びこんで行つて投射するものであるから、投射距離は數十米にすぎない。

イギリスのソーニクロフト式投射砲は、筒の長さ一米に足りない曲射砲のやうなもので甲板上に少し外の方を向けて縦に即ち天の方に向けて取りつけてある。これは二筒の筒が根元でつながつてゐる。一方の筒に發射火藥の藥莢をこめる。他方の筒には長い柄のついた爆雷受け皿に爆雷

をのせて上からその柄を差し込んで置く。ハンドルを引くと、火藥に火がつく。火藥ガスの壓力は下の方の通路から隣の筒に移つて、この柄と受皿と爆雷をうちあげる。

アメリカでは、ソーニクロフト式を改良してY砲といふのを造つた。これは二門を一臺にまとめたもので、Yの字の兩腕から同時にうち出すやうになつてゐる。發射火藥はY字のまたの所に横からこめる。

砲を用ひないものは、艦尾に坂道が作つてあつて、爆雷はレールの上をころげて出てゆく。これらを發射する艦艇は、自分のスピードで、爆雷爆發の危険から離れてしまふ。

飛行機からおとす爆雷で、爆雷と機雷の合の子のやうな、ブライト式といふのがある。

これは金屬製の落下傘に爆雷をつなで結びつけたものである。つなの長さによつて、爆發深度をきめることが出来る。傘の形をした水面抵抗器が、沈んでゆく爆雷のつなを強く引くことになり、スプリングを働かせて、雷管を打つ仕組である。

5

爆雷投射砲は、高速内火艇には大低ついでゐる。イタリヤは、高速内火艇建造の元祖の國である。大戦中、およびその後造つたものは、長さ約十六米、排水量十二噸、四十五糎發射管二門、機銃二門、速力二十二―二十六節の、チボ級といふもの十一隻が、設計のはじまりである。その次に造つた長さ約十八米、排水量二十一噸のものには、發射管、機銃の外に、爆雷投射砲三基をつけ、その次の長さ約十五米、十三―十五噸型十隻は、速力を四十節にして爆雷投射砲五基をつけた。今度參戰した頃は七十二隻持つてゐた。

イギリスは、大戦中潜水艦爆破の目的で、國內の漁船や、スポーツ用の船を狩り集めて武装をほどこし、爆雷をつんだことでは元祖である。高速内火艇は一九三五年から造りはじめ、今度開戦の時は三十隻くらゐであつたが、今ではもつと多くなつてゐる。一九三八年に設計したものは二十隻ばかりで、速力五十節、艇の長さ約二十一米、五十三糎發射管二基、その外小さい砲と、爆雷を持つてをり、航續距離一萬海里だといふことであつた。

これらが今、商船航路の警戒にも當つてゐることと思ふ。

地中海でイタリヤ海軍のマス艇隊が、一五二〇噸のイギリス機雷敷設潜水艦カシヤロットを撃沈したことがあつた。この時は爆雷を用ひたものと思はれる。

前の大戦中一九一七年のはじめには、イギリスの驅逐艦は、一隻について、わづかに四箇の爆雷を持つてゐたに過ぎなかつた。その年の末頃には、驅逐艦、哨戒艇は隻について、三四十箇の爆雷を用意して戰つた。

一九一七年十一月のある朝、北海警備のイギリス哨戒艇P五七號(六〇〇噸、速力二〇節、一〇糎砲一門、四糎高角砲一門、爆雷三十箇)が、はぐれた仲間の哨戒艇をさがすために探照燈を照らしてゐると、突然大きなドイツのUボートが浮いてゐるのを發見した。

距離は一八二米に迫つてゐた。哨戒艇のエンジンは、忽ち全速力を出して敵に突進した。十五秒の後哨戒艇はもぐり切れないUボートに衝突したかと思はれたが司令塔のすぐ前を乗り越えてしまつた。

これと同時に哨戒艇指揮官バニー少佐は、爆雷投下の號令を下した。第一發は艇尾がUボートを離れないうちに、すばやく精密に投下された。行き過ぎた哨戒艇は、すぐ舵をとつてもどつて來たが、もう潜水艦はもぐつて見えなかつた。それで、第二發目の爆雷を投下してから、その位置がよくわかるやうに、浮標に錨をつけて投げ込んだ。その上バニー少佐は戦闘位置を精確に測つて海圖に記入した。

P五七號は、一時間あまり附近を走り廻つてからもどつて來て見ると、投げ入れた浮標から四十六米離れた位置の海中から油がわき出てゐるのを發見した。この位置に第三發目の爆雷を投下して、第二の浮標を入れた。明るくなつてから掃海艇が來て、深さ約五十五米の海底を掃海して見ると、Uボートの沈んでゐる位置が確められた。

その掃海索によつて、第四發目の爆雷を海底におろし、潜水艦を完全に爆破した。

7

一九一八年四月のある暮れ方、イギリス哨戒隊のバーチ司令は、トローラー第二ラーク、第三

サンダー、および掃海艇リブリフツドの三隻を率ゐて、北海を哨戒してゐた。

第二ラークは、右舷後方四五七米にドイツ潜水艦の潜望鏡を發見した。潜望鏡は二米ばかり水面上に出てゐるのでよく見えた。速力は二節くらゐらしい。バーチ司令は直ちに砲撃用意を命じたが、潜望鏡は忽ち海中に姿をかくしてしまつた。司令は敵潜水艦の發見を、ほかの艇に信號をすると共に、第二ラークは敵のもぐつた位置にかけつけた。

しかし早何の手がゝりもない。止むなくその附近にたゞよつて、水中聽音機に耳をあててみた。これは潜水艦のエンジンの音を、船底のマイクロホンに入れて、それを聽きとる工合により、潜水艦のある方向を知る機械である。

ところが、これに耳をあてた瞬間、敵は前面十八米の近さに潜望鏡を三十纏ばかりあらはした。

第二ラークはすぐさま大砲を打つた。それは潜望鏡が再び海中にかくれる前に命中して打ちくだいた。バーチ司令は全速力を命じて、その位置に突進した。約十五米の深さで爆發するやうにした爆雷を投下させた。

この時他の二艇も馳せ集つたので、三隻は代る／＼爆雷を投下した。第二ラークは五發、他の二隻は三發づゝ投下して、それは皆完全に爆發した。暫くすると、大量の重油と氣泡が水面に浮び上つて來た。

これらが爆雷戦の一例である。

十、艦 砲

1 大砲の歴史

イタリアのフロレンスで、一三二六年に鑄造された大砲が、世界で最初のものだといはれてゐる。それは、火薬の爆發力を利用して、石を敵陣に飛ばすものであつた。日本で、楠正成が千早城で戦つた年の六年前にある。蒙古の忽必烈がベルシヤの砲匠を招いて大砲を造らせたのは一三七二年であるからアジアが先であらうかと思ふ。學者の説はまだ一致してゐない。

一三四六年、イギリス王エドワード三世が、ノルマンディーに上陸して、フランス軍を破つたクレシーの戦には、イギリス軍は大砲を用ひ、フランス軍の方は、弓矢で立ち向つて敗けた。この時も、彈丸はまだ石であつた。鐵の彈丸が出來たのは、一四三〇年頃である。

大海戦に大砲が用ひられたのは、一五八八年スペイン王が無敵艦隊をつくり、オランダやイギ

リスの海軍と戦つた頃がはじまりである。

一八四五年、イタリアで砲身の内面にねぢれた溝を幾條もほり、弾丸がキリモミ状に回轉しながら飛び出すやうにした。これが今の砲彈のやうに、長い形（椎の實型）になつたはじまりである。それまでは丸玉（球形）であつた。この溝のことを砲の施條といふ。この頃までの大砲は、鑄鐵、銑鐵又は青銅で作つたが、長彈に變ると共に、火藥の力も強くなつたので、フランスで鋼（ステイール）のタガを砲身にはめることを發明した。

ドイツではクルツプが一八二〇年から大砲製造をはじめ、イギリスではアームストロングが一八五四年から造砲業をはじめ、大口徑の鋼砲が盛に出来るやうになつた。一八八三年、イギリスで鋼線砲を造り出した。これは砲身を強くするために、鋼製の針金をグル／＼巻きつけたものである。今列國の海軍砲の製造法は大方これである。一八九一年、ドイツで、ニツケルと鋼との合金で、砲身を造るやうになつた。これも今各國が採用してゐる。一八八〇年に無煙火藥が發明された。

わが國に大砲が來たのは、天文二十年（西曆一五五一年）である。豊後の大友宗麟が、ポルト

ガルの船から二門買つて、島津義久と丹生島で戦つた時にこれを用ひた。

安政二年（一八五五年）オランダ國王から徳川幕府に贈呈した軍艦スームピングには、青銅砲が六門備はつてゐた。この軍艦は、名を觀光丸と改め、練習艦として、幕府をはじめ各藩の武士が、オランダ人教師から海軍の技術を習ふのに用ひられた。

艦砲の進歩は今日でもとゞまる所を知らない。大體今日のやうな形式のものになつてから、大海戦に用ひられたのは、日清戦争（西曆一八九四—五年）が世界で最初のものである。

2 火 藥

火藥は彈丸を打ち出す原動力である。火藥に火がつくと、急激な化學變化が起り、ガス體に變る。ガスは熱のためにさらに膨脹して、八千倍ぐらゐ容積を増す。この力を利用して彈丸を打ち出す。これが軍用火藥の内の發射藥である。軍用火藥には、この外に破壊藥と、起爆藥があり、合計三種となる。

發射藥は、彈丸を砲身から打ち出すもので、割合靜かに燃える種類のものである。無煙火藥は

これに属する。なぜ無煙火薬といふ名がついたかといふと、煙が割合に少いからである。昔は發射にも、破壊にも、硝石七十五、木炭十五、硫黄十の割合で作つた黒色火薬を用ひた。これは煙が多いので有煙火薬といふ。これに對して、綿火薬即ち綿に硝酸及硫酸の混合液をひたして作つたもの、又は、ニトログリセリン、即ちグリセリンを硝化して作つたものは、發煙が少いので無煙火薬といふ。しかし今でも有煙火薬は導火薬（くち火）になくてならぬものである。

破壊薬は、砲弾の中に入れる炸薬のことで、これは燃焼の速度が非常に速く、毎秒八千米以上である。爆發の威力は大きいものであるが、これを發射薬に用ひたら大砲が破裂してしまふ。

起爆薬は、右二種の火薬に火をつけるためのもので、普通雷汞が用ひられる。雷汞は硝酸に水銀をとかし、アルコールを加へて化合させた結晶體である。

發射用の火薬はイギリスではコルダイトといひ、イタリアではバリストタイトといふ。わが國では紐狀火薬といつてゐる。大口徑砲では、これを絹製の袋に入れてこめる。絹は燃えかすが残らないから用ひられる。燃えかすが残ることは次發をこめる時に危険が多い。中口径砲以下では、金屬製の藥莢を用ひる。

3 砲 身

砲身は非常に高壓高温の火薬ガスに耐へなくてはならぬ。前に述べたやうに、昔は青銅を用ひたが、今ではニッケル鋼で、百分の四くらゐのニッケルをふくんだ鋼である。

砲身を造るには、鋼材の塊を鍛鍊して管を造り、管に心棒を通して、水壓機で更に鍊へる。その外に被筒を焼きはめる。砲身を見ると先の方がほそく元の方が太くなつてゐるのは火薬壓力を強く受ける部分に、被筒が多く重ねてあるからである。また被筒の間には厚さ三ミリ幅十ミリくらゐの平たい鋼の針金を特殊な機械でグルグル巻いて締めつけてある。大口徑砲ではこの針金が、百三十回くらゐ重ねて巻いてある。砲身の内面には、前にも述べたが施條が刻んである。これは長弾が先端を先にして飛んで行くために、彈丸の軸を中心に回轉運動をするためのものである。

4 彈 丸

軍艦の装甲を貫くものは、破甲弾又は徹甲弾といふ。ニツケル・クローム鋼のやうな、最も堅い鋼を以て厚く作る。内部に炸薬をつめ弾底には信管をつける。信管は弾丸が敵艦にあたると發火する装置である。敵艦の装甲が非常に固い鐵で、これにかたい弾丸が當ると、當つた時の角度によつてすべる。このすべりを防ぐために彈帽又は被帽といつて、割合軟い鋼の帽子を彈丸にかぶせる。信管の働きが早過ぎると、彈丸は装甲の表面で炸裂してしまふから、當つて少しめり込んだ時に、爆發するやうに信管が出來てをる。装甲部でない所を破壊する目的のものは、通常榴彈といつて、命中の際に炸裂してその破片が飛び散り、破壊或は敵を斃すやうに出來てをる。觸發によらず一定秒時後空中でも炸裂する時限信管といふものを用ひる場合もある。

5 仰 角

彈丸が砲口を飛び出すと、地球の引力が下の方に引きおろさうとする。故に大砲は目標の距離によつて、一定の高さに向つて打ち出される必要がある。これが砲の仰角である。真空中では拋物線といつて、昇りも下りも同じ形であるが、大氣中を彈丸が走る有様は、昇る時よりも落ちる

時の方が急である。この形を彈道といふ。

彈丸の飛んで行く間には、横から風が吹けば風下に吹き流される。また砲の施條により、彈丸の回轉運動が右廻りなら右へ、左廻りならば左へ、かたよりながら飛んで行く。これを定偏といふ。敵艦が動いてゐれば、發射した時の敵艦位置に彈丸が飛んで行つたのでは命中しない。即ち、照準望遠鏡で敵艦を狙ふのと、大砲の向とは一致するものではない。照準機は、大砲に適當な仰角を與へ、左右の向も適當であるやうに砲を向けるために必要なのである。

6 砲 架

砲身には適當な仰角を與へ、左右に適當に向けるために、俯仰旋回をさせる設備が必要である。また砲身は、發射ごとに彈丸が飛び出す反動で後退するものであるから、この激動をやはらげて早く止め、またもとの位置に砲身をもどす設備が必要である。この働きが駐退と復座である。

砲身を支へて俯仰、旋回、駐退、復座をさせるために、中小口径砲では、砲架とこれに附屬し

た駐退機が必要である。

7 砲塔

大口徑砲では、敵弾に對する防禦を嚴重にするために、砲塔の中に砲身の根元ををさめる。厚い鋼板でおほはれた部分を砲室といふ。外見上は砲室だけしか甲板上に現はれてゐない。

砲塔内で旋回ハンドルを廻すと、水壓の動力で砲身は砲塔と共に旋回する。砲塔砲では砲身に仰角を與へるのも、水壓力によつて行はれる。駐退復座のためには轆車といふ。臺の上に砲身が固定してあつて、發射の反動でこのそりが砲と共に轆盤の上を動くやうになつてをる。或る程度まで退却すると、水壓力によつてもとの位置にもどるやうに出來て居る。

8 照準機

照準機の距離目盛盤に大距離を與へるほど、照準望遠鏡には俯角がかゝるやうになつてゐる。その望遠鏡に敵艦が入るやうに俯仰手輪を廻して狙へば、砲身には、それだけの仰角がかゝる。

同様に、左右偏の修正のためには、照準望遠鏡を、苗頭目盛によつて右に或る程度の角度をもたせれば、これで敵艦を狙つた場合、砲身はその角度だけ左の方を向くといふ理窟に出來て居る。

9 方位盤射撃装置

照準装置と引金だけを、砲側から切り離してマストの最上部の高い所に据ゑつけ、代表射手が一人で敵艦を照準して發射すると、全艦の主砲は電氣で連絡して一齊に動くといふのがこの考案である。この装置では、砲側の射手と旋回手は敵を狙ふ代りに、時計盤のやうな俯仰受信器と旋回受信器の針を見てゐる。この針はマストの方の照準器の動作が、電氣的に示されて來るものであるから、同じ盤の中にある實際の俯仰と、旋回を電氣的に示す針と、前の命令の針と一致するやうに追ひかけてゐると、砲には適當な狙ひがついてくるわけである。そこでマストの射手が引金を引くと、各砲は一齊に發射される。この装置によると、遠距離で砲塔からでは低過ぎて敵艦が見えない場合でも高い所で狙ひがつけられる。波や砲煙にさまたげられることもない。各砲の個人誤差によつて彈着を誤つた場合に砲火指揮官が迷はされることが往々あるが、方位盤射撃で

は機械の故障以外にはそんなことがない。缺點は一發の敵弾で此精巧な装置が破壊されることもある。然しそんな時は各砲塔の射手が昔ながらの各個射撃が出来るやうになつてゐる。

十一、魚形水雷

1

ドイツの最新鋭戦艦ビスマルクは、アイスランド沖でイギリス巡洋戦艦フッドと砲戦を交へてこれを見事に撃沈した。しかし彼女が根據地に引揚げない内に、たうとう沈められてしまつた。沈没の主な原因は、イギリスの軍艦や飛行機の魚形水雷を、九本も打込まれたことであつた。

2

魚形水雷を主な兵器とするふねは、水雷艇が元祖である。

日清戦争の時、威海衛襲撃に加はつた水雷艇「こたか」は、二〇三トン、長さ一六五呎（約五〇米）幅一九呎（約五・八米）水雷發射管四門、そのほか大砲少々の小艇であつたが、敵の主力

艦を撃沈し、敵海軍の本營を乗取るに大きな役目を果たした。

それが年が立つと共に、洋上遠方へ出て戦ふために、浪にたへられなくなつて、一段と大きい駆逐艦に役目をゆづつた。日露役の日本海海戦で、敵の主力艦を澤山沈めた駆逐艦は、例へば「むらくも」は三三二トン、速力三〇節であつた。(前の「こたか」は速力わづか十五節であつた) 主力艦や巡洋艦にも魚雷發射管は備はつてゐる。打ち方が少しちがふ。今までの手がらも大した歴史をもつてゐない。大砲が主な武器である。大東亞戦争ではわが大艦の魚雷が大でがらをたてた。世界的な痛快事である。

歐洲大戦では、魚雷戦の花形はドイツのUボートのやうな潜水艦にうつり、駆逐艦は殆んど魚雷戦で働かなくなつてゐた。駆逐艦は潜水艦に對する主力艦の護衛や、商船隊の護送に主としてつかはれるやうになつてしまつた。英國の司令長官がこんな邪道に導いたとも見ることが出来る。

ドイツの潜水艦一隻に對して、イギリスは三十隻程の駆逐艦を使つて護衛に用ひた。今度歐洲では、魚雷戦はおもに潜水艦と飛行機の受持ちとなつた。

殊に飛行機のおとす魚雷は、今までに前例のない新しい戦術となつた、大東亞戦争の海戦程に目覚ましい出来事は歐洲では今もつて發生しない。十九節の水雷艇と飛行機のスピードを比べて見ると十倍位速くなつたことになつたらう。

3

大砲とちがつて、魚雷を打つ役目のふねは、何故こんなに變つて來たかと申せば、それは魚雷と大砲との性質が、甚しくちがつてゐるからである。

魚雷は水中を自力で走つて、敵艦の水面下の部分に孔をあけることが出来るから、大砲よりも撃沈する力は大きく且つ確實なわけであるが、その代りに水中を游いで行くスピードに、大砲のやうなスピードが得られない。今の魚雷でも時速四〇—五〇海里であるから、速いモーター・ボートぐらゐのものである。砲弾は毎秒數百米の速度で飛ぶ。

それで、どうしても打手が敵に近よる必要がある。従つて、魚雷をうまく打つには、潜水艦のやうにかくれて敵に近づく力のあるもの、または飛行機のやうなスピードを防禦力として、アツ

といふ間に敵艦に近づき、敵弾が當らなければたちまち退散してしまふといふふうなもので、打出すのが適當であるわけである。

4

魚形水雷（略して魚雷）は、形と動作が魚に似てゐる。これを水雷艇、驅逐艦、巡洋艦などの上甲板にある水上發射管から海水中に打ち出す。それから先は、魚雷の推進器が動き出して、自力で水中を進む。潜水艦の發射管や、軍艦の水中發射管から押し出す魚雷は、發射管を離れると、すぐ水中を走つて行く。

魚雷の一番大切な所は、觸挺とこれにつながる雷管と、炸薬のある頭部であることは申すまでもない。魚雷が敵艦にあたるまでの動作に大切なものは、魚雷が海中の一定の深さを進んで、浮きもせず、沈みもしないしかけである。魚雷にはヘソがある。ヘソは假につけた名前だが、魚雷の中央より少し後方に、一錢玉ぐらゐの孔があつて、ゴム板が張つてある。

このゴム板を、海の深さ浅さによつて、水圧が強く弱く押す。即ち深度に比例して動く水圧力

の受信器である。このゴム板の奥に、外方へ發條の力で、押ししてゐる棒が當ててある。

この發條はネジで強くも弱くも調子をかへることが出来るやうになつてゐる。そのネジの巻き方は、魚雷の外側の目盛に、針で示すやうに出来てゐるから、例へば五米といふところに針をまはしておけば、その魚雷は水中五米の所を進んで行く。

それより深くなると、水圧がゴム板に働いて浮く舵をとる。これが魚雷の深度機といふものである。

5

水圧の押し方によつて舵をとるしかけは、物理學の振子の理を應用したもので、魚雷を水平に保つて進ませるために役立つ。

例へば、豫定の水深よりも深過ぎた位置で、その上頭部が下向きになつたとすると、そのまま進めば、海底にもぐつてしまふ。そこで水圧板と振子とが力をあはせて、大きな上げ舵をとる。また水深が豫定よりも浅く、頭部が下向きであるといふ状態になつたら、水圧板は下げ舵を、振

子は上げ舵をとるやうに働くから、両方の差だけの小さい舵をとる。

かやうにして魚雷は、自分の位置を發射の時に申しつかつた通りにする。それは自分で修正しながら進むやうに出來てゐるのである。このための舵を横舵と申します。これが不完全だと、飛魚のやうな魚雷や、どぜうのやうな魚雷となつてしまふ。練習の時には島に飛び上る魚雷なども昔はあつた。

6

横舵があると共に縦舵といふものがある。

これは魚雷が直進して、左右にグレルのを防ぐためである。もしグレた時は、縦舵機がこれを感じてすぐに舵をとる。意見をしても邪道からぬけきらぬ人間とはちがつてゐる。

縦舵機は三軸獨樂（ジャイロスコープ又はジャイロ）が回轉中、コマの心棒は最初の方向を保ちつゞけるといふ物理学を應用したものである。その正しい道は發射前に與へられてゐる。發射後魚雷は自力でそれを守る。

従つて魚雷が誘惑によつて一時グレルと、コマの心棒と、魚雷の他の部分との關係位置が變るといふことになるから、心棒が怒つて、縦舵機の一部に當り、その結果が縦舵を動かすことになつて、修正の目的を達するのである。このコマは高速回轉が必要なので、壓搾空氣をタービン（風車）に吹きつけて、回轉を起すやうに出來てゐる。魚雷が發射されると同時に魚雷のお腹の中で、これがはじまるのである。

7

縦舵の應用の一つとして、發射した方向にでなく、九〇度でも或は反對の方向へでも、魚雷を進ませることが出来る。これは大艦が砲戦中に魚雷發射をするやうな時、水中發射管を敵に向けると同時に、軍艦が向きを變へないでも、發射が出来るのである。ソロモン附近の夜戦で日本の巡洋艦が此發射法で敵艦を沈めたい記事が報導班員の手記にあつたやうに思ふ。

イタリヤの飛行機魚雷の實驗では、敵の港灣に魚雷をおとして、それが港内をぐる／＼廻つて敵艦を縫つてあるく方法をやつたことがある。これも縦舵機の應用である。

十二、米國戦力検討

一六四

大東亞戦争勃發當時、米國の軍用第一線機は一萬數百機用意されてあつた。この中でマレー方面では約四百機、東印度方面では約二百機のみが戦闘に参加した。これは米國が日本を見くびつてゐた結果斯くの如く航空兵力の使ひ惜みをやつたのだといふ見方もあるやうであるが、米國が自ら恃む航空兵力を使用しなくても、態勢がこれを許さず、どうにもならなかつたといふ見方もある。更に考へて見ると日本を見くびつたのでもなく、戰略に窮した譯でもないがはじめから諦めてゐた豫定の行動であつてあれが戰略なのだといふ見方がある。オランダ人はうらんでゐた。

太平洋の殆んど全部を越えて作戦しなければならぬ米國にとつては空軍の用法は相當な難問題である。米國は日本に挑戦して來るのがそもそも間違ひであつたと思はれるが、米國當路者に戦ふ方策を發見するものが居ないのにかゝはらずこんな状態を好んで求めやうとは思はれない。米國は多年對日作戦を研究して來てゐるのであるから若し内幕をのぞくことが出來たならばなる程

と感心するやうな手を持つてゐるかも知れぬ。米國の海軍大學ではこゝ廿餘年間日本遠征のやりかたばかり研究させてゐた。わが當路者は敵のあらゆる手を想像推斷して事を運んでゐる事は當然なことだと思ふ。作戦は相手によつて動くものであるから、敵が手が出せないといふ場合は敵が怯懦或は無策で手を出さないのではなくてわれが出させないから、手が出ないのである。敵の戦力はわが戦力次第で現はれる。

前大戰にも前例があるが、平時において研究或は實驗の結果求め得た結論が實戦においてそのまま適用されぬ場合が生ずる時に意外な出來事が生ずる。例へば英國海軍がドイツ潜水艦に對する認識といふものは開戦の前と後では甚しき相違であつた。あの場合ドイツ潜水部隊當事者においてすらその効果について疑念を持つた者が、實行を重ねるに従つて自ら自分の力に感心したといふやうな次第であつた。従つて英國側の對潜水艦作戦なるものは開戦後敵の打つ手に引きづられて對策を講じたのであつた。その對策は一部圖に當り一部は能率を擧げ得なかつたまゝ、他の原因で戦局は終了を告げた。

今度珊瑚海々戰の頃米軍は時速六百四十軒に達するといふペルP・三九戰鬥機六機を以て我が

戦闘機一機を取圍んだことがあつた。わが戦闘機は敵の重圍を突破して上空に抜け上昇を開始したので米機は之を追つたが遂に及ばなかつたといふ事件があつた。こんなことは米軍はやつて見はじめたので豫め想像出来なかつたことである。

飛行機の戦艦に對する爆撃効果といふものは、今次の歐洲戦争前列國の懸案になつてゐた。特に英國と米國は大規模な實驗も行ひその研究結果は巷間にも傳へられた。米國海軍が當時發表した要點は上方からの攻撃では爆弾に透徹力を與へるために相當の高度が必要である。然る時は命中率が悪い。特殊な弱點に命中弾を受けない以上戦艦は爆弾に對して脅威を感じないといふ結論であつた。

魚雷に對しても戦艦の設計者は二發三發程度では沈没しないやうに出来てゐることを理論的に證明して安心させてゐたものである。

若し主力艦に此程度の能力が無いといふことになると、渡洋作戦はその講究を再出發しなければならぬといふことになる。この問題は航空作戦に密接な關係を持つものである。米國はさきに主力艦と航空母艦ならびに若干の補助艦を以て機動力大なる部隊を編制して積極的な作戦を試

みたのであるが、若し此方法に成功の見込が無いとすれば水上部隊の如何なる編制といへども、基地に據る敵航空部隊に關する限り、彼の水上部隊活動の餘地は甚だしく掣肘される時代が既に來たといふことになる。

米國の作戰當路者は日本海軍に對して殆んど杞憂であると思はれる程度の場合までも豫想してゐた。特に航空部隊と潜水部隊に對しては米國側ではとても實行出来ない行動を日本は敢てすることを覺悟してゐたことは戦前彼地に現はれた諸説を見ても明かである。然しながら現實は惡夢以上であつた。米國が豫想してゐた以上の事をわが海軍は敢行した。そこで米國は作戰の再検討が急務であることを發見したと想像することは必ずしも無理な理論ではない。現實が想像以上の消耗を要求することを知つたならば生産に拍車をかけるか早く降参するより外に第三の道は戰略としても有り得ないのであるが、後者を得策と考へついで大敗の結果國內の大混亂となる事を防ぐ目的を以て今の内に改心を表明しやうと假に決心がついたとしても、日米の間に立つてママアと仲裁の出来る顔を持つ國家はないのである。これが居たらそもそもこんな戦争は起らなかつたのである。起きて甚しく形勢の變つたものであつたのである。

そこでわれわれは米國が最も誇りとする工業力を總動員し、全馬力をかけて造り出す艦船兵器航空機の種子が盡きる迄彼の消耗を手傳つてやらねばケリがつかない義理合に置かれてゐることを眞剣に覺悟しなければならぬと思ふ。卑近な例によれば食物でもあるがまゝ、出来るがまゝに之を喰つてゐたら終には腹をくだすであらう。然しながら戦争の場合は最早滿腹仕つたといふ時はそれが無條件降伏の時である。飽くまで喰らひ、飽きても喰らはねばならぬ。五條の橋の辨慶は別に低能兒ではなかつたがヘタヘタになるまでやつて見なければ降参する氣になれなかつた。これは仲裁の無い場合の鬭争の本然の姿である。近世に入つてから侵略戦争を別にして、國運を賭した戦争が幾度か營まれたが、仲裁の有り得ない戦争は前大戦を以てはじまりとする。それだけ人類の世智辛くなつた世界的な現象である。宗教に關係のある豫言者は宗旨の如何を問はず人類最後の審判或は世の終りが来るべきを説いてゐる。

然しながら始めも無く終りが無いものが世の中である。人間が想像出来る程度に手ツ取り早く世の終りが來たら人生の解決も頗る簡單であるが生物に死はあつても絶滅は無い。世に終りがあるやうに見えても終りがあるやうなものは世と稱し難い。悪人亡びて善人榮えるときまつてゐる

いのも「世」の現實相であるが、人爲的に不合理な體制といふものは時間が必ず之を亡ぼす。これは自然に對する反逆者を改めさせ更に悠遠の世を清新ならしめる法則である。これは人間がどうしても従はねばならぬ道である。此の清新なる氣分は國家間においては戦争によつて獲得される。若し或る戦争が右の目的を達し得ない場合には必ず次の戦争が遠からず勃發して更に改造に努力する。此休憩時間を平和と稱する。自然界では夜が來れば一定時間後に必ず黎明が來る。常闇なんていふことは人間の想像に過ぎない。たゞ人間の作る歴史は不整である。暗黒時代あれば復興が來るが暗黒に次ぐに暗黒が來る場合もある。歐洲を蔽つた暗黒は前大戦によつて破られたかの如くに見えたが更に暗黒がつゞいた。ベルサイユ體制が不合理であつたからである。これは當時と雖も誰も氣がついてゐたのであるが、兵器に信賴し過ぎた者と兵器に見離された者の寄り合ひの相談であるから正氣は地を拂つて失はれた。兵器は物である。物の命じた號令に不服であつたら貸すに時間を以てすることを天に要求するより外に道はない。長期戦といふ言葉が流行であるが、過去においては三十年戦争、百年戦争などと稱せられる種類のものがあつた。これは其の期間戦争をやりつゞけたわけではなく、平和と戦争を交織して問題を解決したのである。兵

術の理想は速戦速決に在る。然しながら戦争は力の比較であるから諦めがつかなければ休み休みいつまでもつづける。ベルサイユ体制の顔合せが無かつたら太平洋會議も起らなかつたであらう。太平洋會議が無かつたら太平洋は更に太平を持越したであらう。あれには英米の大暗行爲があつたのである。英米はドイツが取持った奇縁によつて邪道に踏み入つた。彼等のみならず世界を道づれにしやうとした。然しこれが通つたらこれこそ審判の日の來ることを神に請願しなければ人類は腐敗墮落して世の終りに突入するより外に道はあるまい。古來新興國家は此種非道國家の壓迫に耐へ兼ねて奮起したことによつて生じてゐることは歴史が示す通りである。わが大日本は古く尊い國であるが、興つたのは新しい。新興國家は不合理をよく認識してゐる。その正しきが通るか通らぬかは力の問題である。われらはベルサイユ會議に戰勝者の一群に伍して介入したのであつたが、その直後から思はしからぬ道に向つた。最早かれこれ三十年戦争である。日露戦争後からの米國の意圖を考慮に入れれば四十年戦争を経過したものである。「攻撃の成功は、現有兵力が敵よりも優勢な結果である。茲に言ふ優勢とは、精神的及び物質的力量的の兩者を含んでゐる」とクラウゼヴィッツは言ひ「敵が兵數において我れに勝つならば、決戦を避け、たゞ僅に

要害堅固な陣地を占據し、有利な隘路に防禦工事を施し、以て敵の前進を阻止することにあまじなければならぬ」とナポレオンの戦争訓は説いてゐる。

米國の戦力がどうであらうとわれらは勝たねばならず、當然勝つべきである。戦時下に米國の戦力を云々するのは少しおかしな話であるが近頃は彼の生産能力はどうか食糧問題はどうかといふ解説が流行してゐる。この目的は氣休めや、附け景氣であつてはならぬ。生産力の計算で見透しがつくものならば血を流さずともお互に工場の帳簿を見せ合つて話をすればよい。食糧の山を積んで見せても解決せらるべきである。敵戦力を計量する事は、われらの場合においては勝敗を豫斷する目的ではない。これによつて現前の戦争が歩む方向を知つて必勝の信念を新たにする點において意味がある。

米國の飛行機月産額は昭和十四年には二百二十五機程度の貧弱なものであつたが、昭和十七年中に六萬機を造り、昭和十八年度中には十二萬五千機を造るといふのがル氏の言葉であつた。一年に十二萬五千機といへば月産一萬機以上に相當するわけであるから、これが月産二百五十機生産を常態とした國家が急展開を遂げるといふことは無理な話であつたが、ヤンキーは煽れば驚天

動地の奮發を敢えて辭することのない國民性を持つてゐる。且米國の軍擴案は一足飛びに今日の状態となつたわけではない。歐洲戰爭勃發と共に英佛側から飛行機の注文が米國に殺倒した。増設工場の建設費、新發動機の研究費などが惜しげもなく支出された。これは儲かる話であつたからである。ところがフランス破れたりとなつて、身にふりかゝる危険を感じて周章狼狽した結果、自國の用意五萬機案となつた。最初の一ヶ年程度で此態勢に達せしめる豫定であつたが、その不可能なることが判り、結局昭和十八年の三月において年産十二萬五千機案は五萬機の能力に達することを目標とすることに修正された。ところが眞珠灣攻撃のあつた日から五週間目に米國では全自動車工場の生産を停止して轉業準備を開始した。これが昨年末までに軍需品生産に全力を發揮するものとなつた。十八年年度は十二萬五千機程度の生産は實現するものと見るべきであらう。機種の種類としては高々度飛行機に力癩を入れてゐる。米國が高々度飛行に着眼したのは大正時代のことであつた。目的は高射砲で打たれる心配なしに敵本土或は敵前進基地の盲爆をやらうといふのである。長距離爆撃機は先年搭載爆撃機十餘艇航続距離一萬二千料といふ程度のものを試作したが大量生産にはまだ着手してゐない。

軍艦建造の方は所謂二割増強案といふのが世界戰爭勃發一年前昭和十三年に立案された。これは各種艦艇百二十六萬噸を百五十六萬噸に増加せしむる案であつた。歐洲戰が勃發してドイツ軍の電撃的勝利を見た米國は不安を感じ出して百七十二萬噸の海軍を持つ決心をした。これは昭和十五年春のことである。それから四ヶ月後には更に一躍三百五萬噸、昭和二十年末完成といふ案を米議會に通過せしめた。大西洋、太平洋同時作戰を可能とする所謂兩洋艦隊建造案がこれである。

對日戰爭に入つてから昭和十七年一月に航空母艦、驅逐艦、潜水艦の追加建造を決定し、同年五月更に潜水艦の追加建造を決定した。これが完成すると米國海軍は戰艦二五隻、航空母艦三十四隻、巡洋艦百二十四隻、驅逐艦三百三十三隻、潜水艦六百十五隻、合計千百三十一隻、五百三十萬噸となるわけである。大東亞戰爭勃發後一年にして米國海軍は戰艦八隻、航空母艦十二隻、巡洋艦十九隻、驅逐艦二十二隻、潜水艦五十九隻合計百二十隻約八十萬噸を日本海軍の爲に撃沈されてゐる。この内航空母艦は高速商船を改造した特設航空母艦が含まれてゐる。米國が現在までに、どの程度に特設航空母艦を造つたか不明であるが、大型航空母艦にすることの出来る高速

客船は二十隻位ある。優秀貨物船利用の小型航空母艦は去る昭和十六年三月から約二ヶ月の改造工事によつて總噸數八千噸速力十八節の貨物船一隻を戦闘機三十機搭載の特設航空母艦とし、これを大西洋における米國商船隊の護送任務に充てたのが最初である。これは成績がよければ三十隻位造ると言つてゐたから現在では相當の隻數になつてゐるものと思はれる。

開戦後の報道によれば既定計畫下の戦艦および二萬五千噸級超巡洋艦は工事中のものは工事を中止し、未起工のものは起工を止めて悉く航空母艦とするらしい。アメリカ今日の建造計畫の眼目はその重點を航空母艦と潜水艦に置いてゐるものゝ如くであつてゲリラ戦準備である。海戦の原則を離れてこの有様を看ればアメリカ海軍は大量の飛行機を日本近海に送り得るかの如く見えるが、脆弱なる航空母艦、特に急改造の特設航空母艦を多數にまとめて洋上會戦を豫期する渡洋作戦を如何にして行ふかは判断に苦しむ所である。

次はアメリカの商船に關する問題である。アメリカは大體自給自足の出来る國で海運國ではない。自國商品の輸出にも外國依存の方針であつた。ところが世界情勢の險惡となるに及んで一朝有事の際陸海軍の軍用船舶の不足といふことに想到したので、「米國の商品は米國船員米國の船

船で」いふスローガンの下に昭和十三年一月から十年間に五百隻の優秀貨物船を建造する方針を建てた。前に述べた特設航空母艦にはこれで出来た船を改造したものが多し。

歐洲戦争が勃發して見ると米國を兵器庫と頼んだ英國が商船を獨伊海空軍の爲に失はれて行く有様に直面するに及んで形勢緊迫を感じた。昭和十五年十二月には英國からの六十隻建造注文を引受けた。自國用のものは此頃二百隻急造の命令を發し造船所の急造、既成造船所の擴張に繁忙を極めた。此急造商船は總噸數七千噸程度の一種類に劃一し、型を極力簡單なものとして曲線を少くし、速力は十節乃至十一節の低速に満足し機械は製造にも取扱にも簡単な蒸氣往復機械とした。

また急造の目的を達する爲に造船所は最終の組立作業のみに専ら當り、部分品は汽車製造會社を動員するといふやうな方策を採用した。

かくして昭和十六年は總噸數で百萬噸建造し、昭和十七年は六百萬噸造つた。昭和十四年七月一日現在で米國の商船保有量は總噸數千五百五十萬噸であつた。

以後今日までの建造高を八百萬噸と假定すれば保有量二千餘萬噸であるが、日獨伊の潜水艦と

飛行機の爲に多数の商船を消耗してゐる。

今日の形勢では一年に四百萬噸の米國商船が失はれて行く見當である。速力がのろく操縦性の悪い急造型商船が續々出現して來れば更に撃沈能率は向上せしめ得めることゝ思はれる。

之を要するアメリカは今、大量の陸兵を養成し、大量の飛行機を作り、航空母艦潜水艦の増強を實現しつゝあるのであるが、大量の消耗を豫期しなければならぬ形勢に在る。且消耗を犠牲にしても如何にして戦争目的を達するかといふ作戰目標を失つてゐる。

われらは米國戦備の量の大なるに驚く必要はない。如何にして之を消耗し盡すか、喰らひ盡すかといふことに向つて國民の總力を擧げる覺悟こそ必要である。

十三、米國の潜水艦

1

太平洋にはサンゴ礁が多い。潜水艦が魚であれば飛行機はかもめである。天氣晴朗海波比較的平靜な日は上空の飛行機は相當深く潜航中の潜水艦を視認することが出来る。

爆雷は水中適當な深度で水中爆發を行ひその中心から十八米位（英國）の半徑内に在る潜水艦は爆沈せしめ得る能力を持つてゐる。

かもめからこれを投下されては毎日潜水艦は減る一方である。チャーチルの演説によればドイツでは此頃一日一隻の割合で潜水艦を建造してゐる。一年三百六十五隻。米國も此手で増建したところで出て來る潜水艦が毎日爆沈せしめられては潜水艦は減る一方となる。

潜水艦を貯藏するにはどうしたらいいかといふことは米國海軍の頭痛に相違ない。

常識を以て想像すれば、根據地に休養中の潜水艦は航空爆撃に對する安全を保障してやらねばならぬ。珊瑚礁にのべつにもぐらせてゐるわけにも行くまい。山の土手腹に横穴をうがつてその孔の中に繋留するより外はあるまい。米國の潜水艦には魚の名がついてゐるが、それでは魚のみでなくカニとか鮑といふやうな名もやがては命名されなければならぬ。事實員の名も少しは用ひてある。

潜水艦作戦の完璧を期する爲には制空權が關係することは明かである。

海軍の兵力は何れに偏しても勝利は期し難い。釣合のいゝ海軍といふことは海軍兵備の理想である。

米國潜水艦箇々の特性を観察すれば潜水艦作戦、ひいては全作戦の傾向を知る資料となるであらう。また全作戦の方向から潜水艦戦に期待する所を發見する事も出来るであらう。

2

米國の科學雜誌サイエンティフィック・アメリカンに大分昔のことであるが、潜水艦から豆タ

ンクを吐き出して敵前上陸をやる圖解が載つてゐたことがある。

米國の潜水艦は沈没した時に逃げる設備（急に壓力が變化するから『鐵の肺』と稱するタンクに一人一人這入つて海底から水面に浮びあがるのである）は精巧なること世界一であるが、潜水艦を以て攻撃的に使用することの進歩の程度、また努力されてゐる程度といふことは戦果が物語るであらう。米國側の發表によると潜水艦を渡洋作戦に使用する可く建造を急いでゐるといふことである。

米國潜水艦の新傾向を判斷する爲には先ず米國海軍潜水艦作戦を検討しなければならぬ。

數年前の刊行物であるが「米國潜水艦戦法」といふ一文を見たことがある。その大意は次の通りである。『前世界大戦中、ドイツ海軍は潜水艦戦を以て英國側を大に悩ました。當時の潜水艦「ドイッチランド」の如きは、北アメリカ合衆國の西沿岸まで出沒して無事に歸國してゐる。即ち行動半徑が相當なものであつた。それから凡そ二十年、潜水艦文化は愈々發達した。萬一、日米間に開戦を見るやうな不幸に逢着したならば、米國の潜水艦が日本近海に出現することが無いと誰が保障し出来るやうぞ。』

そこで日本近海に進出した米國潜水艦は何をやるであらうか。其の第一は偵察である。東京灣外に出没して、毎日潜望鏡によつて出入港船舶を観測するであらう。その實況を夜中沖に離れて米海軍根據地に無電報告をやる。此潜水艦が若し日本戦艦に出合ふやうなことがあれば決して遠慮なく魚雷攻撃を敢行して撃沈を企圖するであらう。わが方は飛行機を放つて偵察を勵行する。日本近海要所々に潜水艦を張り込ませて置けば日本艦隊の行動は悉く知ることが出来る。各港灣の口には機雷敷設潜水艦が日本の知らぬ間に機雷を沈置するであらう。』こんな行動をとられたらわが軍艦の二隻や三隻は撃沈されることが無いとも限らぬ。これらの事はまだ序の幕であるが、いよいよ米國の大艦隊が日本近海に押し寄せ、日本艦隊が之に對し出撃する時が来たならばその時こそ、米國潜水艦の乗すべき時である。

米國海軍の有力なる一將官は、「米國は自國の沿岸防禦に潜水艦を要しない。潜水艦は全部攻撃用にする」と言つた。

米國には現に（十年前の話）建造中の潜水艦三隻と未起工のもの四隻を加へて八十一隻あるが最新式大型潜水艦V五乃至V九の性能に對して米國海軍學會雜誌は次の如く報じた。

○V六はV五と共に遠洋作戦用として計畫されたもので、航続距離二萬海里である。

○乗員が長い航海に堪へるやう、艦内生活を安樂にする設備を持つてゐる。

○新式救難装置（逃げ出し用タンク）を持つてゐる。

○隠顯式無線架空線を持つてゐる。

○艦の長さ三百七十一呎

○水上排水量二千七百三十噸

○乗員、士官八名、下士官及び兵八十名。其の他の報道によるとV七、V八、V九の排水量は水上千五百六十噸乃至二千二百十五噸で水上航走の速力は概ね十八節である。兵装は四吋砲一門、二十一吋魚雷發射管六門となつてゐる。

斯かる航洋潜水艦が日本近海に到着しても、彼は其の存在を知られる憂があるから、小さい獲物は決して相手にしない。云々……以下省略するが結論は米國潜水艦の進攻作戦の侮り難い點が強調されたものであつた。

米國が前歐洲大戰後一九三四年迄に建造した潜水艦は所謂V型九隻で、建造中の四隻を加へても列國に比べて甚だ立ちおくれの觀を呈してゐた。ところが一九三四年になつて潜水艦建造の方針が確立されたらしく、巡洋潜水艦、艦隊用潜水艦、中型潜水艦の三種に區別して充實を開始した。

巡洋潜水艦はV六「ノーチラス」||「鸚鵡貝」が代表型である。艦隊用潜水艦としてはV七「ドルフィン」||「海豚」型を、中型潜水艦としてはV八「カチャロット」||「抹香鯨」型を建造する方針を樹て一九三五年から一九四〇年迄に毎年六隻を建造する計畫も此時に確立した。

V四「アルゴノート」||「たこぶね」は巡洋潜水艦であるが機雷敷設潜水艦として特殊なものである。V五「ナーワル」||「一角鯨」は「ノーチラス」と同型、V九「カトル・フィッシュ」||「烏賊」は「カチャロット」と同型である。

現在ではVの何號といふ名は廢止されて魚の名のみで呼ばれてゐる。潜水艦名に舊名Vの何號

と記されてゐるのは右の關係によるものである。

魚の名の頭字で艦型が解るやうになつてゐる。B級といふのは舊名V一からV三までの千九百噸(水上排水量)艦隊用潜水艦である。艦名は「ブラックダ」||「かます」、「バス」||「すすきの類」、「ボニタ」||「かつを」である。未成艦の中に「バーフ」||「口ひげ魚」、「ブラック・フィッシュ」||「黒い魚」、「ブルュー・フィッシュ」||「青い魚」、「ボーン・フィッシュ」||「骨の魚」等がある。A級は「アルゴノート」二隻だけである。未成艦に「アルバコア」||「?」、「アンバージャック」||「?」の二隻があるが要目不明である。

魚の名に興味を持つわけではないが米國潜水艦の名は今後も新聞紙上にあらはれるであらう。

C級は前記の「抹香鯨」(一九三三年の竣工)がC級第一號で、「烏賊」(一九三四年竣工)がC級第二號である。基準排水量(水上)千百餘噸の中型潜水艦である。此外に一九四〇年度計畫發注濟の潜水艦に「コッド」||「鱈」、及び「セロ」||「蠟魚」の二隻がある。